船倉貝塚

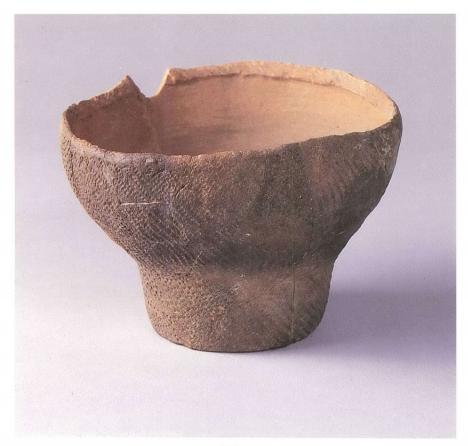
倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第 8 集



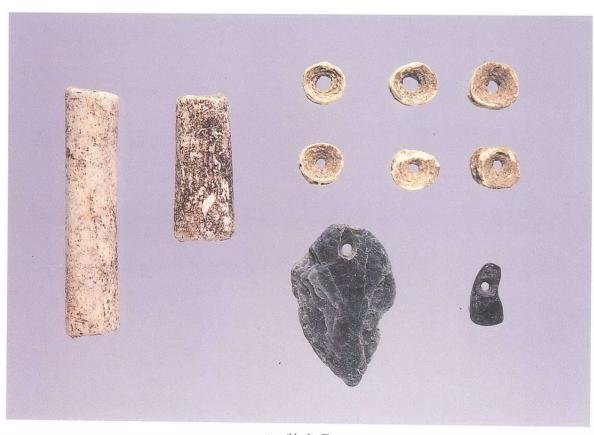
1. 1号土壙墓と2号土壙墓



2.3号土壙墓



3. 1号土壙墓出土の土器



4. 装身具

瀬戸内海に面し、穏やかな気候に恵まれた倉敷市は、西日本でも屈指の縄文時代貝塚の密集地として知られています。

倉敷市周辺では、縄文時代の海進により、平野の奥部にまで遠浅の海が入り込み、河川によって運び込まれた土砂や有機物によって、適度な栄養をもった干潟が形成されていました。豊かな海の幸に恵まれた縄文人たちは、入海の沿岸に住み、多くの貝塚を形成したと考えられています。

市内に所在する貝塚では、古くから盛んに調査が行われており、羽島貝塚や船元貝塚、福田貝塚等々全国的にも知られている貝塚もたくさんあります。

このたび、ここに報告いたします船倉貝塚は、今までその存在が知られていなかった貝塚であります。不幸にも道路の建設工事中に発見され、現状での保存はかなわず、やむを得ず緊急発掘調査を実施いたしました。調査自体は小規模なものでしたが、貝塚全体を調査した稀な例となり、さまざまな考古遺物や埋葬遺構、多種多様の自然遺物等も出土し、多くの貴重な資料を得ることができました。

この報告書は、こうした貝塚の発掘調査の成果をまとめたものです。本書が今後の文化 財の保護、保存に活用されますとともに、学術研究のための資料として、また郷土の歴史 研究の資料として、いささかなりとも役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査をはじめ、出土資料の整理に至りますまで、ご指導ご協力を賜りました関係各位に対しまして衷心より厚くお礼申し上げます。

平成11年3月31日

倉敷市教育委員会 教育長 山田錦造

例 言

- 1. 本書は、都市計画道路羽島四十瀬線工事に伴い発掘調査を実施した、倉敷市船倉町地内に所在する船倉貝塚の発掘調査報告である。
- 2. 発掘調査は、倉敷市教育委員会文化課職員 福本 明、鍵谷守秀、小野雅明、藤原好二が担当した。現地調査は、北調査区と南調査区に分けて行い、1991年7月8日~9月27日と10月17日~11月30日にかけてそれぞれ実施した。
- 3. 出土人骨の同定、分析については、兵庫医科大学解剖学教室 欠田早苗氏に現地調査を依頼 し、同学解剖学第二教室 和田 洋氏がこれを引き継いで整理分析を担当された。
- 4. 動物遺存体の同定、分析については、早稲田大学考古学資料室 金子浩昌氏に依頼し、石材の同定については、倉敷市立自然史博物館 武智泰史氏に依頼した。
- 5. 本書の執筆は、第2章を福本、第3章~第5章の石器については藤原、他を小野が担当し、編集は鍵谷が行った。また、和田 洋氏、金子浩昌氏には玉稿をいただいた。
- 6. 発掘調査における遺構写真は福本と鍵谷が行い、遺物の写真撮影は藤原が行った。
- 7. 出土遺物の整理・報告書の作成にあたっては、倉敷埋蔵文化財センター嘱託職員 内田智美、 臨時職員 大江久仁子、洲脇奈奈、三宅利恵子の協力を得た。
- 8. 挿図中に使用した高度値は海抜高であり、方位は全て磁北である。
- 9. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は、全て倉敷埋蔵文化財センターにて保管している。
- 10. 発掘調査から出土遺物の整理・報告に至るまで、下記の方々にも御指導、御教示を賜った。記して感謝する次第である。

間壁忠彦、間壁葭子、江田伸司、瀬口眞司、内山純蔵、稲葉正子、山磨康平、植月 学、 高橋進一 (順不同、敬称略)

目 次

	1	
г	_	•
ı.	_¥	-
•		_
,	J	

例言

た。 女 中 中 の 11 m 1 か	
第1章遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章調査の経緯	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査の経過	5
第3章発掘調査の概要	7
	7
第1節 調査区の概要と層序	7
第2節 縄文土器の分類について	12
第3節 遺構と出土遺物	13
第4節 包含層出上の遺物	22
第4章貝層の調査概要	26
第1節 貝層の調査方法	26
第2節 貝層出土の人工遺物	27
第3節 貝層出土の貝類	37
第5章まとめにかえて	40
付論 1 船倉貝塚出土の縄文時代の人骨について	43
付論 2 倉敷市船倉貝塚出土の節足、脊椎動物	73
出十遺物観察(一覧)表	88
1. 土器観察表	88
	91
2. 石器計測表	91
4. 骨角貝製品観察表	91
5. 貝層内容物表	93
6 目類の出土量	95

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	1	第20図	土壙1出土の土器(S=1/3)	20
第2図 周辺の縄文時代遺跡	2	第21図	土壙1(S=1/20)	20
第3図 船倉貝塚周辺の地形	4	第22図	土壙1出土の石器(S=2/3)	21
第4図 貝層上面の地形(S=1/200)	7	第23図	溝状遺構(S=1/20)	21
第5図 貝層除去後の地形(S=1/200)	. 8	第24図	包含層出土の土器 1 (S=1/3)	23
第6図 北調査区断面図(S=1/80)	9	第25図	包含層出土の土器 2 (S=1/3)	24
第7図 南調査区断面図(S=1/80)	10	第26図	包含層出土の石器(S=2/3)	25
第8図 北調査区遺構配置図(S=1/100)	14	第27図	北調査区貝層(S=1/100)	26
第9図 1号人骨検出状況(S=1/30)	15	第28図	南調査区貝層(S=1/100)	26
第10図 1号土壙墓(S=1/30)	15	第29図	貝層出土の土器 1 (S=1/3)	28
第11図 1号土壙墓下層出土の土器(S=1/3)	16	第30図	貝層出土の土器 2 (S=1/3)	29
第12図 1号土壙墓上層出土の土器(S=1/3)	16	第31図	貝層出土の土器 3 (S=1/3)	30
第13図 1号土壙墓出土の石器(S=2/3・1/2)	17	第32図	貝層出土の土器 4 (S=1/3)	31
第14図 骨角器(S=2/3)	18	第33図	貝層出土の土器 5 (S=1/3)	32
第15図 2号·2b号人骨検出状況(S=1/20)	18	第34図	貝層出土の土器 6 (S=1/3)	33
第16図 2号土壙墓断面図(S=1/20)	19	第35図	貝層出土の石器(S=2/3)	34
第17図 2号土壙墓出土土器(S=1/3)	19	第36図	貝層出土の石器・石製品(S=2/3・1/2)	<i>35</i>
第18図 2号土壙墓出土石器(S=2/3·1/2)	19	第37図	貝層出土の骨角貝製品(S=2/3)	36
第19図 3号人骨検出状況(S=1/20)	20			
		1 \ <i>k</i>	-	
衣	E	自为	<u>C</u>	
日稻净体筏夕主1	20	日松市	₩ 毎夕 幸↑	20
貝類遺体種名表1	<i>3</i> 8	只 類夏1	→ 性	<i>3</i> 8

卷頭図版目次

巻頭図版1 1.1号土壙墓と2号土壙墓

巻頭図版 2 1.1号土壙墓出土の土器

2.3号土壙墓

2. 装身具

図版目次

図版1 北調査区

- 1. 貝層検出状況(南から)
- 2. 貝層断面(北から)
- 3. 貝層断面(1号土壙墓付近)

図版2 南調査区

- 1. 貝層検出状況(東から)
- 2. 調査風景(貝層土壌サンプリング中)
- 3. 貝層の遺物出土状況

図版3 土壙墓

- 1.1号・2号土壙墓
- 2.1号土壙墓(下層の状況)
- 3.3号土壙墓

図版4 その他の遺構

- 1. 土壙1
- 2. 溝状遺構
- 3. 貝塚遠景(左側トンネル手前)
- 図版 5 1号土壙墓出土土器
- 図版6 包含層出土土器(1)
- 図版7 包含層出土土器(2)

- 図版8 貝層出土土器(1)
- 図版 9 貝層出土土器(2)
- 図版10 貝層出土土器(3)
- 図版11 貝層出土土器(4)
- 図版12 貝層出土土器(5)
- 図版13 貝層出土土器(6)
- 図版14 出土土器(1)
- 図版15 出土土器(2)
- 図版16 土壙墓出土石器
- 図版17 包含層・貝層出土の石器
- 図版18 骨角貝製品・動物遺体
- 図版19 動物遺体(1)
- 図版20 動物遺体(2)
- 図版21 動物遺体(3)

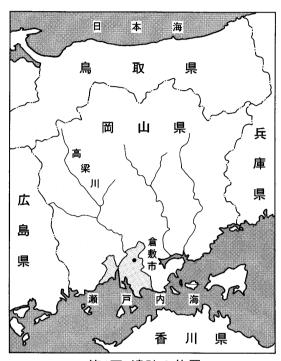
第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

船倉貝塚は岡山県倉敷市船倉町で発見され、発掘調査 が行われた縄文時代の貝塚である。

倉敷市は岡山県南部中央やや西の、瀬戸内海に面した場所に位置する。市域の北は標高300m以下の丘陵群が存在し、その南には近世以降の干拓によって生まれた平野が広がる。干拓平野の中には、かつての内海の島々がとりこまれ、平地の中にいくつもの小丘陵が点在する様相を呈する。船倉貝塚もそうした丘陵の裾に立地しているのである。

平野部から沿岸部にかけてのおおまかな状況を見ていくと、市の南東部はかつて県内最大の島であったというべき児島の西端部分にあたる。児島の北・西岸は干拓平野に覆われ、海水と切り離されているが、南岸は現在でも海岸である。市域の中央から南西部は江戸時代以降の干拓地の沖に昭和期の埋め立てによって生まれた水島工



第1図 遺跡の位置

業地帯を継ぎ足したようなかたちとなっている。この部分に岡山県三大河川のひとつである高梁川 が南流し、水島灘に注いでいる。

当地域における縄文時代の遺跡の多くは、これまで述べたようなその当時の海岸線に連なるようにして存在する。即ち、平野の北側の山裾や児島の北岸から西岸にあたる部分。そして平野に点在する小丘陵の裾に立地するのが一般的である。

第2節 歷史的環境

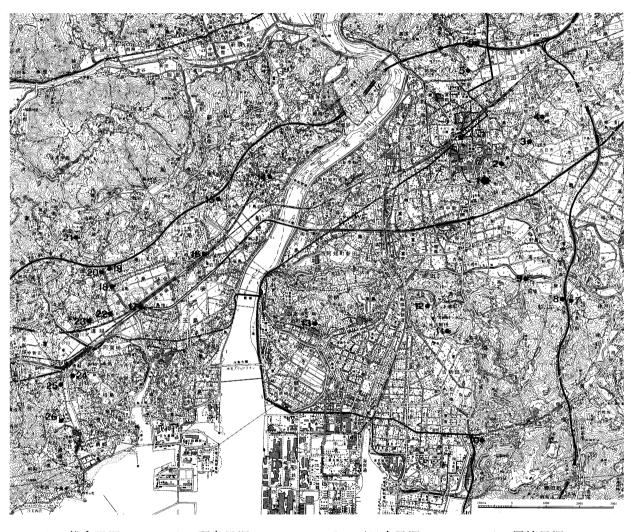
船倉貝塚は倉敷市街の南東にある標高約100mの向山丘陵の西裾に立地する。江戸時代に諸物資の集散地として繁栄した倉敷の古い町並に程近く、船倉の地名は蔵屋敷が倉敷川沿いに立ち並んだことに由来している。貝塚の眼下に流れる倉敷川の水運は、町並の発展の基盤となったものである。倉敷川は、近世干拓が進むなか、高梁川の古い時代の分流の水尾筋を整備改修したものと考えられており、南で児島湾につながっていた。満潮時には海水がさかのぼり、汐入川と呼ばれた。昭和前半期に児島湾干拓工事が進み、湾の淡水湖化が完了するまでは細々とながら海と通じていたのである(1)。

貝塚周辺の平野の大部分は、先述したように近世干拓により形成されたもので、それ以前は高梁

第1章 遺跡の位置と環境

川により徐々に沖積化が進行する遠浅の入海であった。時代を縄文海進期にまで逆上れば、より 深く広い海域が出現していたはずであるが、市内数カ所におけるボーリング調査によると、現在 の平野部における海進以降の堆積層の厚さが10mくらいであり、縄文貝塚が形成された時代でも、 海底はそれほど深くなかったと推定されている⁽²⁾。

船倉貝塚周辺の縄文時代遺跡を見てみると、同一丘陵の北麓に羽島貝塚、その東の早島丘陵に五 日市貝塚、黒崎貝塚が存在する。羽島貝塚は旧海岸にできた砂州の上に立地するもので、前期前 半の羽島下層式の標識遺跡である。この地域が入海になって縄文人が生活しはじめたころの代表



- 1. 船倉貝塚
- 5. 西岡貝塚
- 9. 船元貝塚
- 17. 島地貝塚
- 21. 山の神西遺跡 22. 畑の前遺跡
- 25. 西元浜貝塚
- 2. 羽島貝塚
- 6. 菅生小学校裏山遺跡 7. 舟津原貝塚
- 10. 広江・浜遺跡

- 18. 富田小学校西遺跡
- 26. 中津貝塚

- 3. 五日市貝塚
- 11. 福田貝塚
- 13. 連島西之浦貝塚 14. 里木貝塚(船穂町) 15. 凉松貝塚(船穂町) 16. 長尾神社南遺跡
 - 19. 月の木遺跡
 - 23. 阿原遺跡

- 4. 黒崎貝塚
- 8. 磯の森貝塚
- 12. 浦田貝塚
- 20. 岸本貝塚
- 24. 東元浜貝塚

第2図 周辺の縄文時代遺跡

的な遺跡である(3)。一方船倉貝塚、黒崎貝塚は海岸より少し上がった斜面に立地している。倉敷市街地北の山裾には西岡貝塚、菅生小学校裏山遺跡がある。菅生小学校裏山遺跡は山陽自動車道の倉敷インターチェンジ建設に先立ち発掘調査が行われており、旧石器時代・縄文・弥生・奈良時代以降の遺構、遺物が報告されている(4)。縄文時代の遺構では晩期の木の実貯蔵穴が特筆される。市街地の南では、児島の北岸に位置する舟津原貝塚でも晩期の木の実貯蔵穴が検出されている(5)。その西隣は、当地域において最も早くから貝塚が形成されたと考えられる磯の森貝塚である。羽島貝塚において羽島下層式(前期前半)の時期にはまだ貝塚は形成されておらず、次の磯の森式(前期中頃)の時期でも貝塚は見られない。この前期中頃に本格的な貝塚が形成されたのが磯の森貝塚である。高梁川河口に近く、貝の生育に適した干潟がより早くから発達する条件に恵まれたと思われる羽島貝塚よりも古い時期にこの磯の森貝塚が形成されたことは、周辺の自然環境を考える上で注目される(6)。児島の西岸には浦田貝塚、福田貝塚そして広江・浜遺跡が存在する。広江・浜遺跡は貝塚を伴わない縄文後・晩期の遺跡で、弥生時代前・後期の土器、古墳後期の製塩土器、奈良・平安時代から中世にいたる遺物も出土している(7)。児島の沿岸では古墳時代後期に土器による製塩が盛んに行われ、船元貝塚、浦田貝塚、福田貝塚でも上層から製塩土器が出土している。児島の西には高梁川の旧分流をはさんで連島の丘陵がある。その南麓には連島西之浦貝塚が存在する。

高梁川西側でも山裾や小丘陵麓に里木貝塚、涼松貝塚、島地貝塚などの縄文遺跡が並び、密集地帯を形成している。その中で、山の神西遺跡は海岸線より奥まった地点にある。柏島丘陵と黒崎との間にある細長い干拓地に面して、東元浜貝塚、西元浜貝塚、中津貝塚が存在する。中津貝塚は旧海岸段丘上に立地しており、後期初頭の中津式土器の標識遺跡として知られている。昭和30年(1955)に埋葬人骨の調査が行われ、屈葬人骨を納めた楕円形の土壙墓が確認された(8)。当地域における縄文遺跡のうち縄文人骨が発見された例は中津貝塚の他、羽島貝塚、西岡貝塚、磯の森貝塚、船元貝塚、福田貝塚、里木貝塚、涼松貝塚、西元浜貝塚など数多くあり、船倉貝塚も新例として加わった。

- 註(1) 間壁忠彦「倉敷川畔の昭和初期金石文字」『倉敷の歴史 第7号』 倉敷市史研究会 1997年
 - (2) 間壁忠彦「倉敷市街地の地盤」『新修倉敷市史 第8巻』 倉敷市史研究会 1996年
 - (3)藤田憲司ほか「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報 第11号』1975年
 - (4)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81』岡山県教育委員会 1993年
 - (5)『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71』岡山県教育委員会 1988年
 - (6) 間壁忠彦「貝塚の時代」『新修倉敷市史 第1巻』 倉敷市史研究会 1996年
 - (7) 間壁忠彦・間壁葭子ほか『広江・浜遺跡』 倉敷市教育委員会 1979年
 - (8)鎌木義昌「縄文遺跡における埋葬施設の一例」『石器時代 1』石器時代文化研究会 1955年

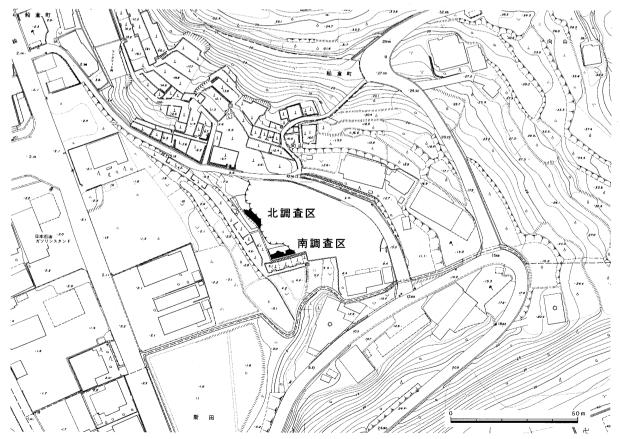
第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

都市計画道路羽島四十瀬線は、美観地区を中心とした倉敷市街地の南側周辺における慢性的な交通渋滞の緩和を目的に計画された道路である。この路線の内、羽島から船倉町に至る間にある標高90mほどの向山丘陵は、延長800mにおよぶトンネルで抜けるというもので、平成3年度中の開通をめざして工事が進められていた。平成3年7月の時点では、トンネル本体はすでに貫通し、付帯工事およびトンネル西出口から既存の道路へ接続する部分の工事へと入った段階であった。

平成3年7月5日の夕方、市内新田在住の川瀬潔氏が、たまたま当該工事現場近くを散歩していたところ、トンネル出口部分で削り残されていた崖断面に厚さ30cmほどの貝層が露出しているのを発見された。このことは当日の内に市埋蔵文化財担当者に連絡され、翌朝7月6日に現地において当該貝層が縄文貝塚の一部であることが確認された。当該貝塚については、それまでその存在が確認されていないものであったため、工事を発注していた市土木部道路建設課(当時)に対し、状況を説明するとともに当該地付近の工事の中止を求め、遺跡の取扱いについての協議を開始した。

発見当時、貝塚はトンネル側からの工事により、東側から大きく削平をうけており、また西側は



第3図 船倉貝塚周辺の地形

かつての墓地造成によりコンクリートの擁壁となっていたために、貝塚部はかろうじて東西4m, 南北16mほどの半島状に残された恰好となっていた。一方、貝塚と計画道路との位置関係については、貝塚がトンネル西出口から約80mほどの、道路予定地のほぼ中央に位置していることが明らかとなった。こうした状況を踏まえ、協議を進める中で貝塚の現況での保存は不可能であるとの判断に達し、やむを得ず緊急発掘調査を実施することとなった。これを受け、発掘調査委員会が組織され、調査が開始された。

第2節 調査の経過

船倉貝塚の緊急発掘調査は、平成3年7月8日から同年11月30日にかけて実施し、その経費はすべて原因者である倉敷市が負担した。

調査は、まず削平された東側の崖面の精査から行われ、貝層は現地表下約40cmほどのところで幅約10mにわたって存在することが確認された。調査にあたっては工事用計画杭を利用し任意の基準線を決め、グリッドを設定し掘り下げを開始した。またこれにより貝層西側部分についても、墓地造成以前にすでに削平を受けていることが明らかとなり、残された貝層の上面の広がりは、東西約3m,南北約10mほどの細長いものとなった。貝層の掘り下げに際しては、グリッドにあわせ50cm単位のメッシュを組み、精査を行うとともに、メッシュ毎に10cm厚で分層して貝層の採取を行った。このため貝層の掘り下げには多くの期間を要したが、8月9日にはおおむね貝層部分の掘り下げを完了し、貝層断面の剥ぎ取り転写を行った。

なおこの間、貝層の全容がほぼ明らかとなった8月4日に現地説明会を開催したところ、約180人の参加者を得ることができ、本貝塚に対する市民の関心の高さをうかがわせた。

こののち、貝層下面を精査する中で、調査区の南寄りの地点で2基、西寄りで1基のあわせて3基の土壙墓が発見され、それぞれ良好な状態で人骨が残存していることが判明した。このため人骨の分析については、兵庫医科大学解剖学教室の欠田早苗氏および和田 洋氏に依頼し、9月3日には人骨についての現地調査が行われ、指導助言をいただいた。

引き続き、土壙墓の掘り上げ、地山の確認等の作業を行い、ひとまず9月27日で現地調査は終了した。

ところが、その後の工事の進展に伴い、貝層のみつかった地点から南へ約11mほど離れた地点にも貝層が残存していることが判明した。このため、すでに調査の完了した区域を北調査区、今回新たに見つかった貝層部を南調査区と呼称し、急遽10月17日に調査を再開することとなった。当該地は、本線から側道への取り付き部にあたり、墓地の一部として残されていた部分である。貝層は、南へ向かって傾斜する斜面に堆積しており、小規模ながらさらに工事予定地外へと広がっているものと思われた。ここでの貝層の広がりは、調査区域内で東西約9m、南北約3mにわたって確認され、厚さは約40cmに達するところがあった。調査については、北調査区から延長した基準線を用い、貝層部分についても北調査区と同様の手法により精査を行い、貝層の採取も行った。南調査区については、土壙墓等はみられず、11月30日をもって現地でのすべての作業を完了した。

第2章 調査の経緯

なお、遺物整理については、小野雅明が中心となり、平成4年度までは文化課粒浦分室にて行い、 平成5年度以降は新設なった倉敷埋蔵文化財センターで行った。整理にあたっては、貝層の洗浄選別 に多くの期間を要すこととなったが、とりわけ自然遺物については数多くの貴重なデータを得るこ とができ、貝および獣骨等の分析にあたっては、早稲田大学の金子浩昌氏のお手をわずらわした。

船倉貝塚発掘調査委員会

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会	教育長
副委員長	杉本保男	<i>"</i>	教育次長
委 員	三好繁光	<i>"</i>	社会教育部長
"	間壁忠彦	倉敷市文化財保護署	審議会 会長
"	山本慶一	"	副会長
"	小野一臣	"	委員
専門委員	福本 明	倉敷市教育委員会立	文化課 学芸員
"	鍵谷守秀	<i>"</i>	
"	小野雅明	"	
"	藤原好二	<i>"</i>	
監 事	三宅正廣	倉敷市教育委員会	社会教育部次長
事務局長	香西文雄	倉敷市教育委員会了	文化課 課長補佐
書 記	橋本篤男	<i>"</i>	文化財係長

(肩書き及び役職名等はいずれも調査当時)

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要と層序

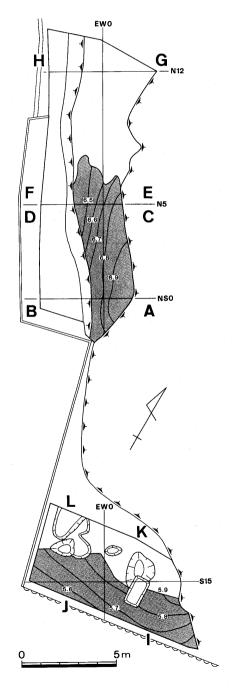
船倉貝塚は向山丘陵の西裾で等高線が東に入り込んだ、やや傾斜のゆるやかなところに位置する。 標高は約5mから7mの地点である。道路建設に伴う掘削工事により最初に発見されたのは、北側の

貝塚であったため、当初はこの地区を中心に発掘調査が進 められた。しかし、後に南側にも貝塚が残っていることが 判明し、引き続き発掘調査が行われた。これら2つの貝塚 は分断されており、両者の関係は不明であるが、当地は開 墾や宅地造成などのため削平されているらしく、両地点の 貝塚は本来連続したものであった可能性もある。そのた め、北貝塚、南貝塚とする呼称は避け、北調査区貝層、南 調査区貝層とする。調査区は、北調査区貝層の任意の点を 基準点として、細長く残されている貝層を見すえ、Aから Hまでのグリッドに区分した。南調査区の調査では、この 基準線を延長して基準点から南15mのところを中心に I か らLに区分した。このため、全体的に均整を欠いたグリッ ド割りとなった。貝層は東側を道路工事により削り取ら れ、西側は宅地造成などにより切断されていた。南調査区 貝層ではさらに南辺が石垣の造成により破壊を受けてい た。もともとの貝層の広がりがどのぐらいであったのは不 明であるが、工事関係者の話によれば、掘削工事の過程で 北調査区の東(山側)10mくらいから貝層が見えはじめたと いう。調査した貝層の平面積は北調査区で約20㎡、南調査 区で約17㎡である。

調査区の土層観察は、幅30cmの畦を設けて行った。貝層の周辺を含め、基盤層までの全層位を羅列すると煩雑になるが、北調査区と南調査区とに分けて概略を記述する。

北調査区の層序

1層~4層(造成層) 厚さ約40cmの淡茶褐色土層で、破砕された貝殻が少し含まれる。ブロック塀、電柱などの基礎工事による掘り込みが散見される。近代の遺物、縄文時代の遺物が出土している。



第4図 貝層上面の地形(S=1/200)

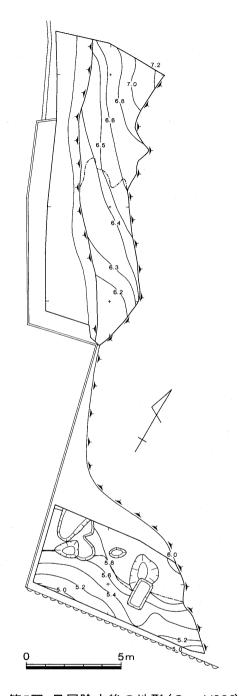
5層~7層 貝層西側が段状にカットされた部分に二次堆積したもの。5層は貝層の二次堆積である。

8層~10層 E、Fグリッドの間で検出された土壙内の 堆積層。円礫混じりの土層で、縄文時代の遺物に混じり、 9層から中世の遺物が出土している。なおこの土壙は、土 層観察用の畦の中に納まるくらいの狭小なものである。

11層・12層 E、F、G、Hグリッドにかけて検出された円礫層である。土層断面は土壙状であるが、明確な掘り方は検出されなかった。11層から古墳時代後期の須恵器杯が出土している。

13層 円礫を含む灰褐色土層で、縄文時代後期の遺物が少量出土している。

14層・15層(貝層) 貝塚を構成する堆積層で、貝の含 まれる密度の違いから14層の暗褐色混土貝層と15層の暗 褐色混貝土層に分けられる。貝層はマガキ主体で、ハマグ リ、ハイガイやアカニシ、ウミニナ類などが含まれてい る。同種の貝がまとまるブロックや貝の破砕層は認められ ない。出土した土器は、縄文時代前期の羽島下層式、磯の 森式、彦崎スⅠ式、里木Ⅰ式、中期の船元Ⅰ式から船元Ⅲ 式、後期の中津式、福田KII式、津雲A式、彦崎KI式、 彦崎KⅡ式である。このうち羽島下層式の出土量はごくわ ずかで、比較的上位より出土していることから他層から混 入した可能性が強い。船倉貝塚で検出されたような貝層 は、出土した土器が示すように、長期間にわたり同じ場所 に貝殻などの日常の食べカスが廃棄され、それと同時にま わりの堆積過程と同様に土砂が流れ込みながら形成された 堆積層であると理解される。近年の貝塚の調査方法とし て、廃棄の単位あるいはそのまとまりを明らかにすること

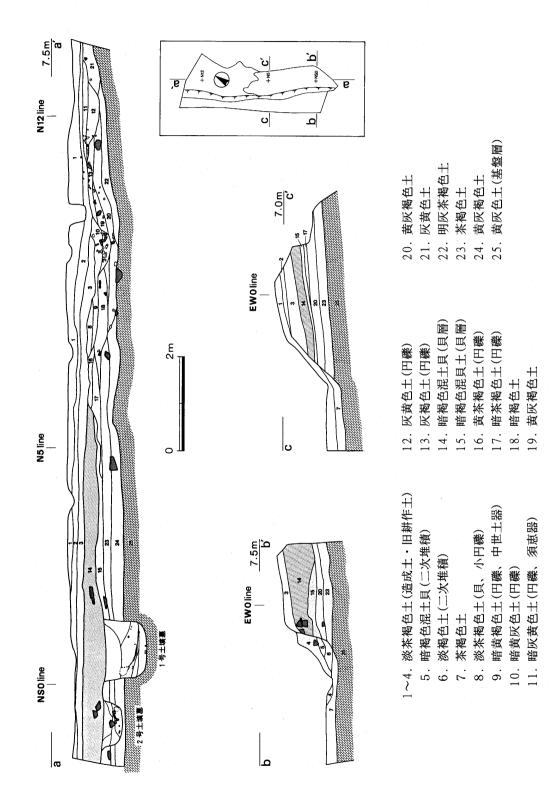


第5図 貝層除去後の地形(S=1/200)

を目的として綿密な貝層の区分を行い、それに基づいた分析が行われるのが通例であるが、船倉貝塚においては、間層などの土層を区別する指標となるものが認められないために分層は行っていない。このことは、貝層と周辺の堆積層との関連を理解する上でも障害となっている。15層を除去した段階で1号土壙墓、2号土壙墓が検出された。

16層 マンガンを含む黄茶褐色土層で、円礫が少し混じる。後期の遺物が目立って出土しており、13層とともに縄文時代の包含層として捉えられるであろう。

17層~19層 マンガンを含む暗茶褐色土層・暗褐色土層・黄灰褐色土層で、北側に向かって人為



第7図 南調査区断面図(S=1/80)

的な落ち込みが認められる。Eグリッドにおいて後期の溝状遺構が検出されており、この時期の生活痕跡として捉えられる。層位的には、貝層の下にあたることから、1号土壙墓、2号土壙墓が検出された付近の貝層と区分する材料になるであろう。後期の遺物に混じって里木 I 式、船元 I 式も出土している。

20層 マンガンを含む黄灰褐色土層で、落ち込みの中の堆積層である。基盤層に近いところから 後期の土器が出土しているが、里木 I 式を中心とした前期の土器も出土する。 F グリッドにおいて、 この層の下から前期の土壙 1 が検出されている。

21層 マンガンを含む灰黄色土層で、遺物はほとんど出土していない。

22層 マンガンを含む明灰褐色土層で、基盤層直上に堆積する。磯の森式、里木 I 式が出土している。

23層 貝層の直下に堆積する茶褐色土層である。羽島下層式、彦崎ZI 式などが少量出土した程度で、遺物はあまり含まれていない。本来は少なくとも調査区全面に広がっていたと思われるが、貝層の北側では縄文時代後期を中心とした活動により失われたと考えられる。

24層 基盤層直上に堆積する黄灰褐色で、23層と同様に貝層の北側ではみられない。土器はほとんど出土しておらず、わずかにサヌカイトのチップが出土している。この層を掘り下げる過程で3号土 塩 幕を検出した。

25層 マンガンを含む黄灰色土で、南調査区へも続き、付近一帯を覆っている。今回の調査で基盤層として捉えた土層である。

以上、北調査区の層序を概観したが、貝塚は縄文時代前期から後期の期間、同じ場所に引き続き 形成されていること。また、貝塚の北側は、後期土器の出土量の多さや溝状遺構の存在が示すよう に、この時期の活動が活発であったことが知られる。

南調査区の層序

1層(造成層) 宅地造成土で、貝殻が少し混じる。貝層の土壌がブロック状に含まれる部分もある。近代の遺物、縄文時代の遺物が出土している。

2層(近世土壙墓の埋土) 灰茶褐色土層で、厚さ2~3cmのタタキ状の灰黄色土塊が重なった状態で検出された。灯明皿などの土器、陶磁器片、魚骨などが出土している。

3層(近世土壙の埋土) 茶褐色混貝土層で、土壙墓の構築に伴う可能性もある。

4層 黄灰色土層で、近世の整地土と思われる。

5層~8層・11層(貝層の攪乱層) 内容物は貝層に近いが、後世の活動により貝層土壌が攪乱を受けた層である。調査区の南には石垣が築かれており、調査区南端は破壊されている。7層から中世の遺物が出土している。

9・10層(中世土壙の埋土) I グリッド南壁で検出されたもの。9層の埋土は貝層の土壌で、土師 質椀などが出土している。

13層(貝層) 暗褐色混土貝層で、北調査区のように貝が含まれる密度の違いは認められない。マガキ主体で、ハマグリ、ハイガイやアカニシ、ウミニナ類の他少量のオキシジミ、ヤマトシジミな

ども含まれている。貝の破砕層、間層などは認められず、分層は行っていない。出土土器は、前期の磯の森式、彦崎ZI式、里木I式、中期の船元I式から船元Ⅲ式、後期の中津式、福田KⅡ式、津雲A式、彦崎KI式である。土層観察では明確にできなかったが、地区ごとにみると、Iグリツドでは後期の遺物が多く、J・Lグリッドでは磯の森式の遺物が多いといった差異が認められる。磯の森式は、北調査区においてはわずかしか出土しておらず、J・Lグリッドの調査によって、貝層にこの時期の遺物が含まれることが明らかとなった。

14層 I・Kグリッドにみられる貝層縁辺の堆積層。船元I式などが出土している。

15層 貝層直下の堆積層。 I グリッドで円礫の集中する火所が検出された。少量の土器片が出土している。

16層~32層 小さな谷状地形に、角礫を含んだ土砂が順次堆積していった過程をしめす。遺物は わずかながら、20層から楕円押型文土器、25層から二枚貝条痕の土器が出土している。

33層(基盤層) マンガンを含む黄灰色土層で、北調査区の22層に対応するものである。

以上、北調査区、南調査区の堆積層について略記したが、貝塚の形成過程に焦点をしぼって概観したい。貝塚が最初に形成されはじめたのは前期磯の森式の時期と考えられる。J・Lグリッドの貝層でその時期の遺物がよく保存されているとみられる。その後、里木I式の時期までに、ある程度の範囲で貝層の堆積が進んだであろう。この時期には北調査区で土壙墓、土壙が構築されており、当貝塚が重要な活動の拠点であったことがうかがえる。しかし、中期前半の遺物は比較的少ないことから、活動の中心が別の場所に移ったのかもしれない。そして、中期後半の遺物はほとんどみられなくなる。後期になると再び遺物も目立ちはじめ、後期中頃の遺物は包含層出土を含めて最も量が多い。上層が失われている可能性を考慮に入れなければならないが、その後の縄文時代の遺物はこれまでの整理の過程で確認されていないことから、彦崎KII式の時期に船倉貝塚は終焉を迎えたと考えられる。

第2節 縄文土器の分類について

今回の調査で出土した縄文土器は、縄文時代早期から後期までにわたる。これらを整理報告する ために分類し、下記のとおり便宜上の名称を与えることにする。分類にあたっては従来の編年型式 を基準とすることは言うまでもないが、最近の研究成果に即していない点があることを最初にお断 りしておく。

〈縄文時代早期〉

包含層から押型文土器が出土している。また、編年的位置が明らかにできないが、二枚貝条痕調整の著しい土器が包含層から出土している。

〈縄文時代前期〉

前期 I 類:口縁外面を段状貼りつけにより肥厚させるもの。この部分に刺突文を加えるものもある。内面、外面には二枚貝による条痕がみられる。羽島下層式の特徴をもつ。

前期Ⅱ類:口縁部付近に爪形文をめぐらし、胴部には縄文が施される。爪形文をもたず縄文のみ

施されるものもある。船倉貝塚では個体数が少ないため爪形文の種類も少なく、右に開口し、上下に区画沈線をもつものと連続爪形文が確認されている程度である。縄文は節が細長く密接しており、 繊細な感じがする。また、前期IV類のものに比べて器表に浅く施文される傾向がある。器厚は薄手で内面を平滑に仕上げるのが一般的である。磯の森式の特徴をもつ。

前期Ⅲ類:竹管状工具で押引き刺突文を施す。地文は無文とし、器表には指頭様の押圧、押引き刺突文による裏面への影響をそのまま残すなど凹凸が顕著にみられる。出土量はごくわずかである。 彦崎ZI式の特徴をもつ。

前期IV類:縄文地に細い貼り付け突帯をめぐらし、その上に竹管状工具による押引き文を施したり、幅広の粘土帯を貼り付けた上に縄文や竹管文を施すもの。口縁部の形態でみると、口縁内外を被うようにして粘土帯を貼りつけるものや内側に折り返し状になるもの、外側を肥厚させるものなど様々なものがあり、出土個体数は比較的多いと言えよう。里木 I 式の特徴をもつ。

〈縄文時代中期〉

中期 I 類: 撚りがゆるく細めの縄文を地文とし、爪形文、二枚貝の圧痕や竹管状工具による平行 沈線がつけられるもの。出土量は少ない。船元 I 式の特徴をもつ。

中期Ⅱ類:貼り付け突帯により文様を描くもの。出土量はごく少ない。船元Ⅱ式の特徴をもつ。

中期Ⅲ類:貼り付け突帯に沿って竹管状工具による平行沈線がつけられるもの。竹管状工具により直線と弧状曲線を組み合わせて描くもの。沈線あるいは短沈線により文様を描くものなどがある。地文としての縄文は太い原体によるものであるが、地文をもたないものや縦位に平行沈線を施すものもある。このような文様の要素は、船元Ⅲ式の内容の一部である。

〈縄文時代後期〉

後期I類:磨消縄文を施すもので、中津式の特徴をもつ。

後期Ⅱ類:3本1組の沈線をめぐらし、その内側に縄文を施す。出土量は少ない。福田KII式の特徴をもつ。

後期Ⅲ類:いわゆる縁帯文土器で、従来の型式名称として津雲A式、彦崎KI式の名がある。この2型式の内容の違いは、地域差を示すものとする見解と、時期差を示すものとする見解の2とおりがあるが、近年の調査研究で津雲A式が彦崎KI式に先行するとの見解が示されている。

後期IV類:従来の彦崎KII式の特徴をもつものを中心とした。この形式に先行する資料がいくつかの報告で示されており、それらと対比できる内容をも含む。また、今回の報告では、後出的な要素をもつものも含んでいる。

後期無文土器:後期 I 類から後期IV類に伴う無文土器を一括する。全く文様の要素が認められないものと、口縁端に刻目等の簡素な施文がみられるものが該当する。

第3節 遺構と出土遺物

北調査区の貝層を除去した段階で3基の縄文時代の土壙墓が確認された。検出順に1号から3号の番号で呼ぶことにする。また、北調査区貝層の北側で縄文時代前期の土壙と縄文時代後期とみられ

る溝状遺構が検出された。これらの遺構について概要を記述する。

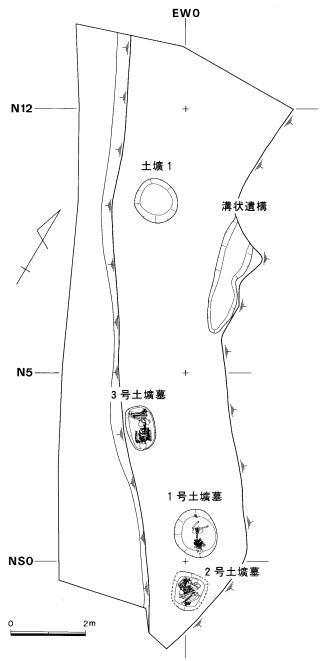
1号土壙墓

遺構と出土人骨

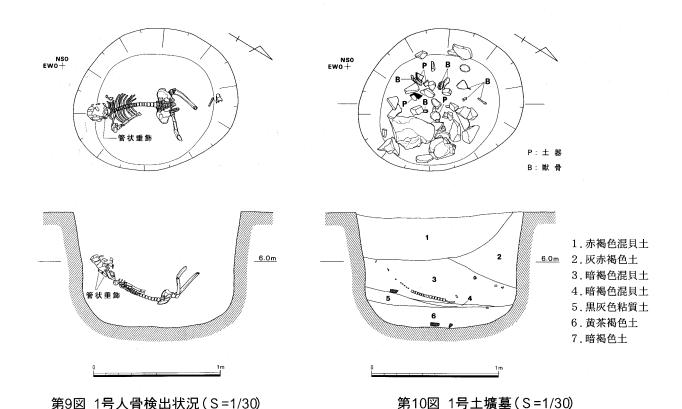
貝層最下部の暗褐色混貝土層を全て採取し、茶褐色土層の上面を露出した段階で確認された。検 出面は標高6.4mくらいで、暗褐色混貝土層が堆積した後に墓壙が築かれているとみられる。平面形 は130×110cmの楕円形で、残存する深さは約90cmである。底は基盤層を掘りこみ、底面は標高 5.5m前後に位置している。

土壙墓内には埋葬人骨1体が残存しており、1号人骨と呼称する。頭位は南東で、仰向けにして頭部と脚部を高くした状態で検出された。体位を横からみると、臀部を最下点としてゆるくV字状に屈曲している。腕の位置は不明である。両脚部は大腿骨までしか残っていないが、埋葬時の姿勢が保たれているとしたら膝を立てた状態であったかもしれない。右側頭部(右の耳付近)に接して管状垂飾2点が出土した。

土壙墓内の埋土は埋葬人骨を境にし て上層を3つ、下層を4つに分層した。1 層は暗赤褐色混貝土層で、すぐ上の暗 褐色混土貝層との区別は、貝の含まれ る密度が少ないことと土色の違いで明 らかである。2層は灰赤褐色土層で貝の 含まれる密度は低い。3層は暗褐色混貝 土層で貝の含まれる密度は高い。直接 埋葬人骨に被さる土層である。4層は暗 褐色混貝土で、埋葬人骨の上半身の下 だけにみられる。埋葬遺体を安定させ るための置き土であるのかもしれな い。5層は黒灰色粘質土で、炭化物が面 的に広がった状態であった。6層は黄茶 褐色土でほとんど貝は含まれない。7層 は暗茶褐色土で粒状の炭化物が混じ



第8図 北調査区遺構配置図(S=1/100)



り、人頭大の礫が入り込んでいる。ほとんど貝は含まれない。この層から残りのよい縄文土器やイ ノシシの顎骨を中心とした動物遺体がまとまって出土している。

出土遺物

土 器(第11·12 図)

1号土壙墓からは縄文時代前期IV類の土器が比較的まとまって出土しており、特に埋土下層には保存状態のよい土器が含まれる。1~4は同一個体と思われる。口縁部内外を肥厚し、その上に縄文を施す。口縁端には竹管状工具による押引き文が2列めぐる。土器を正面から見た場合の押引きの方向は、口縁上端のものが右から左、その下のものが左から右となっている。5は口縁端を尖らせ気味にし、内側を縄文帯で飾る。11はほぼ完形のもので、口縁には凹状に窪んだ部分がみられ、その両側は三角形の突起状となるのであろう。外面全体と口縁内面の肥厚部に縄文を施す。内面には横方向のへラ調整がみられ、口縁肥厚部の直下や胴部と底部の境には指頭圧痕跡が残る。15・16は文様をもたない。埋土上層から出土した33には、無文地に竹管状工具による押引き文が施されており、前期Ⅲ類の時期の可能性がある。

石器(第13図)

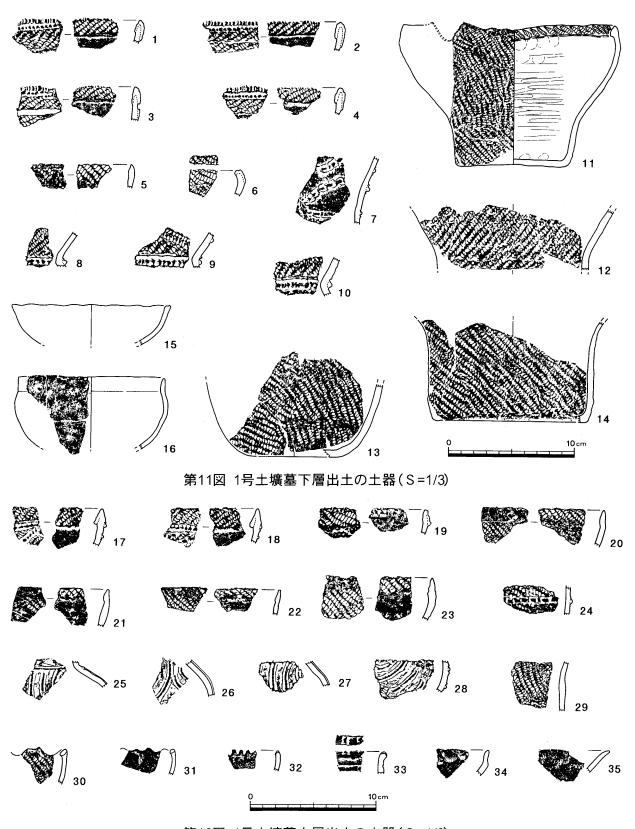
石鏃15点・石匙1点・異形石器1点・スクレイパー2点・叩石1点・石錘2点を図示した。

1~15はサヌカイト製の石鏃である。1~12は凹基鏃、13が平基鏃、14・15が凸基鏃である。凹基鏃は2~4のように脚部がすんなりと尖るものが多いようである。凸基鏃は2点ともやや幅が広く、14は特に厚手で粗雑な作りである。

16はサヌカイト製の石匙である。左右対称の横型のもので、両面調整の刃部はわずかに弧状を呈

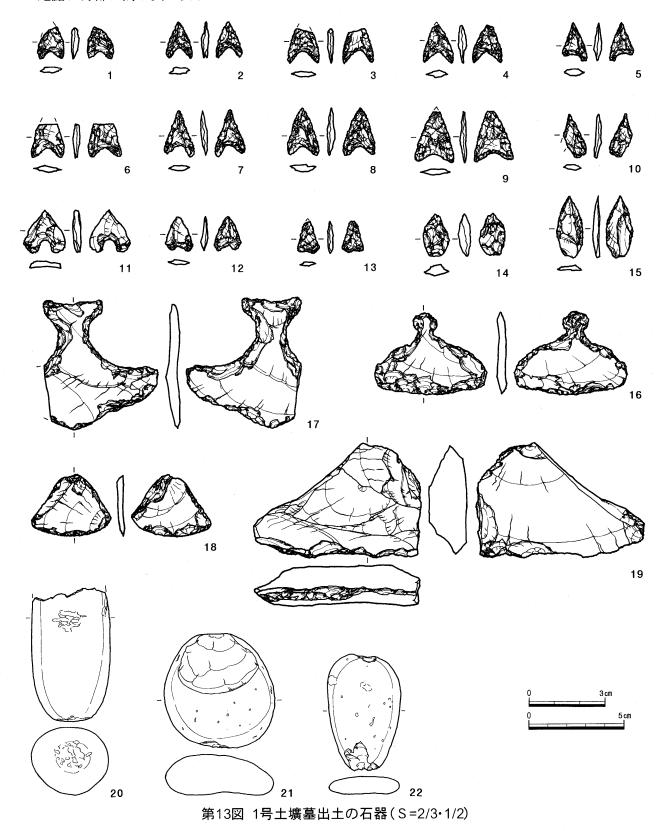
第3章 発掘調査の概要

している。刃部加工は背面側から行われたものが顕著であるが、逆につまみの部分は腹面側から主 に成形されているようである。



第12図 1号土壙墓上層出土の土器(S=1/3)

17は単なる石匙の可能性もあるが、鳥あるいは魚をかたどった石製品の可能性もあるためここでは異形石器として扱うこととする。一部欠損しているが、本来は左右対称形であろう。つまみは魚の尾鰭、身部は鳥が翼を拡げたかのような形状である。また、石匙ならば刃部にあたる辺には、明



瞭なコーナー部が認められる。

18・19はサヌカイト製のスクレイパーである。18は小型で弧状を呈する両面調整の刃部を持つ。19は残核を利用した厚手のものである。刃部は急な角度の片面調整で成形されている。

20は安山岩製の叩石である。上部を欠損しているが、長辺に2カ所、先端部に1カ所の敲打痕が残っている。

21・22は打欠石錘である。21は 流紋岩製で重量が99.8g、22は玄 武岩製で重量33.2gである。

2 5cm

第14図 骨角器(S=2/3)

骨角器(第14図)

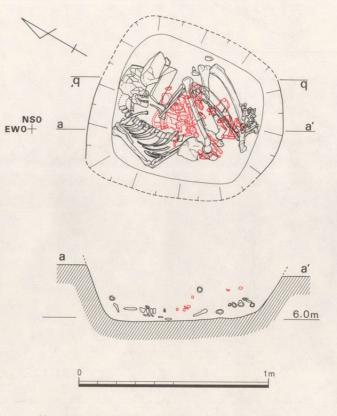
1・2 は、1号人骨の右側頭部に接して出土した管状垂飾である。線刻などの装飾はないが、表面はよく研磨されていて光沢がある。素材は大型鳥類の脛骨と思われる。

2号土壙墓

遺構と出土人骨

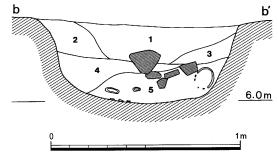
1号土壙墓が確認された時点で周囲の精査を行い、1号土壙墓の南50cmの位置で土層観察畦の断面により確認された。畦にかかる部分以外は、貝層堆積物としてサンプリング処理されたため、上部の壁は半分以上が失われた。検出面は標高6.4mくらいで、暗褐色混貝土層を切って築かれている。平面形は底部の形状から推定すると100×90cm程度の不整隅丸方形ではないかと思われる。残存する深さは約30cmである。底面は基盤層まで達しておらず、標高6.0mに位置している。

2号土壙墓では、埋葬人骨が少なくと も2体残存していた。ほぼ全身骨格が



第15図 2号·2b号人骨検出状況(S=1/20)

残っていて埋葬時の姿勢を保 つものを2号人骨と呼称し、2 号人骨とともに葬られた約 300からなる焼骨片を一括し て2b号人骨と呼称する。2号 人骨は1号人骨とは逆に頭を 北にしている。埋葬位は体の



第16図 2号土壙墓断面図(S=1/20)

左側を下にした側臥屈位で、頭を腹部に向けて曲げている。そし て、頭部直上には長さ20cm、幅、厚みとも10cmくらいの角礫が2つ みられる。

2b号人骨は2号人骨のほぼ下半身の上を中心に検出された。くわ しくは付論1を参照していただきたいが、ほとんどが頭部、上肢、 下肢の骨片で、これらの全てが1個体に由来するかどうかは不明と されている。

埋土は5つに分層した。1層は暗褐色混土貝層で、すぐ上の貝層と の区別は明瞭でない。2層と3層は茶褐色混貝土層で、土壙中央部に はみられない。4層は黄灰褐色土層、5層は暗褐色土層で、と もに貝をわずかに含む。

出土遺物

十 器(第17図)

2号土壙墓からは縄文時代前期Ⅳ類の遺物が出土してい る。土器はすべて小片で、出土量は少ない。

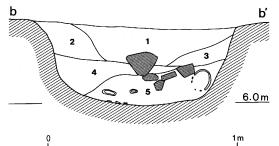
石器(第18図)

石鏃2点・石錘4点を図示した。23・24はサヌカイト製の 凹基鏃である。23は前期によく見られる形態で幅が広い。 25~28は打欠石錘である。25は粘板岩製、26・27は流紋岩 製、28は砂岩製である。重量は25g~53gと比較的まとまっ ている。

3号土壙墓

Dグリッドにおいて、黄色灰褐色土層を掘り下げる過程で 確認された。検出面は標高6.0m。平面形は118×76cmの長 楕円形で、残存する深さは約20cmである。底は基盤層を掘 りこみ、標高5.8mくらいに位置している。

3号十墉墓では、埋葬人骨が1体残存しており、3号人骨と



5. 暗褐色土

1. 暗褐色混土貝層 2. 茶褐色混貝土

3. 茶褐色混貝土 4. 黄灰褐色土







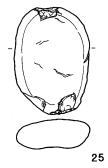


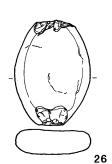


第17図 2号土壙墓出土土器 (S = 1/3)















第18図 2号土壙墓出土石器 $(S = 2/3 \cdot 1/2)$

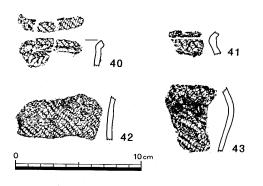
呼称する。頭位は1号人骨と同じ南東で、埋葬位は両脚を左に強く曲げた仰臥屈位である。右腕は、肘を強く曲げて体右側に添わせており、左腕は肘をほぼ直角に曲げて腹部の上に置いている。

埋土は茶褐色土層のみで、貝は含まれない。遺物は出土していないので、時期は明らかではないが、検出状況から他の土壙墓と同じ前期Ⅳ類に属する可能性がある。

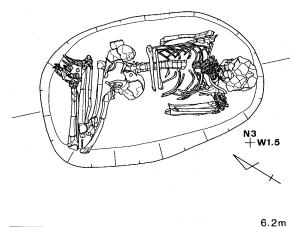
土 壙 1

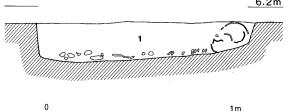
Fグリッドにおいて、黄灰褐色土層を除去し、基盤層を検出した段階で確認された。検出面は標高6.0m前後。平面形は径120cmの円形で、残存する深さは45cmである。埋土には角礫が混入している。大きいもので長さ35cm、幅、厚みがともに20cm程度である。1層が灰褐色土層で、マンガンを含んでいる。2層は暗褐色土層で、わずかながら炭片、焼土を含んでいる。底には基盤層に含まれる角礫が露出している。

出土遺物には少量の土器・石鏃があり、 土器の時期は前期IV類に属すると思われる。石鏃はすべて安山岩製であが、29は平 基鏃で加工が先端部側辺にしか行われていない。また、基部には原礫面を残している。30~32は凹基鏃である。

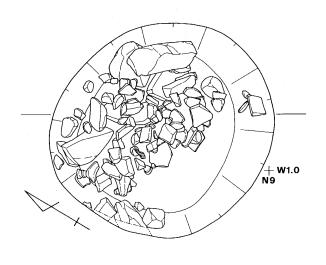


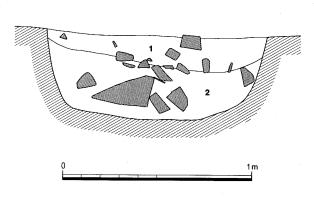
第20図 土壙1出土の土器(S=1/3)





第19図 3号人骨検出状況(S=1/20)



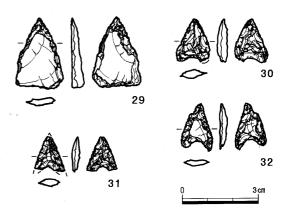


6.2m

第21図 土壙1(S=1/20)

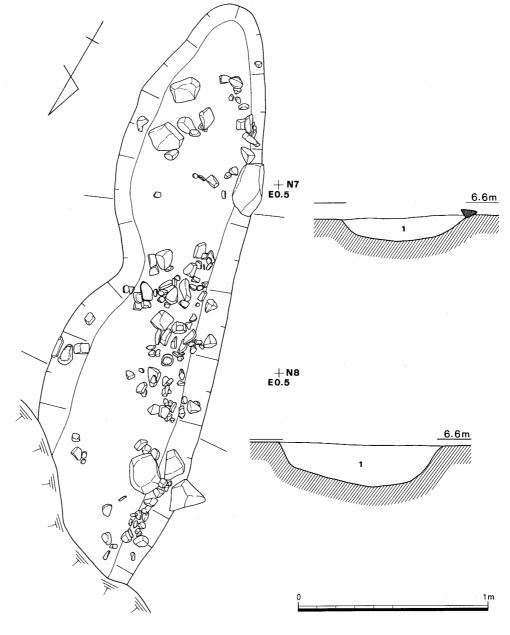
溝状遺構

Eグリッドにおいて、暗茶褐色土層、暗褐色土層を掘り下げる途中で確認された。ほぼ南北方向にのびており、南側に端を確認しているが、北側は工事により切断されている。検出面は南側で6.3m、北側で6.5mである。残存する長さ3m、幅約80cm、深さは15~20cmである。埋土は暗褐色土層で、人頭大の角礫や拳大の円礫が混入している。



第22図 土壙1出土の石器(S=2/3)

出土遺物には数十点の土器があるが、磨滅が著しく図化できなかった。時期は後期IV類に属すると思われる。



第23図 溝状遺構(S=1/20)

第4節 包含層出土の遺物

1. 土器(第24·25図)

第1節で述べたように、貝層周辺の堆積層および貝層より下の層位において、縄文時代の遺物包含層が確認された。これらの出土遺物のうち比較的残りがよく、特徴がわかるものを選んで掲載する。

早期(44)

44は内外に二枚貝による条痕調整を行い、口縁端面には二枚貝背面を押し当てたものとみられる 圧痕がみられる。器厚は7~8 mmで、内面には炭化物が付着している。編年的位置がはっきりしな いが、早期のなかに位置付けておく。この他、押型文土器がわずかに出土しているが、小片で磨滅 が著しいため図化できなかった。

前期 I 類 (45~48)

45は口縁外面を粘土帯貼りつけにより肥厚させ、多裁の竹管状工具の管外側を深く押し当てた刺突文が斜方向に配列されている。肥厚帯直下にも刺突列が一巡し、その下にも口縁部と同様な施文が行われているようである。内面には二枚貝による条痕調整が施されている。46・47の口縁部も肥厚され、内外に二枚貝による条痕調整が行われている。48は胴部で器厚は4mmである。

前期Ⅲ類(49)

49は無文地に半裁竹管で押引きした刺突文がめぐる。内外とも器壁に凸凹が目立つ。

前期IV類(50~55)

50は口縁内側をく字状に肥厚させ、縄文を施している。この部分にあたる外面にはナデが加えられている。51の口縁内側は剥離している。52・53は胴部である。54・55は底部外面にも縄文が施されている。

中期 I 類 (56~57)

56・57は口縁内側に縄文帯があり、56は口端にも縄文を施している。

中期Ⅱ類(58)

58は器表を突帯で飾るものである。

後期 I 類(59)

59は波状口縁となる器形で、太く深い沈線による磨消縄文で飾られている。

後期Ⅱ類(60)

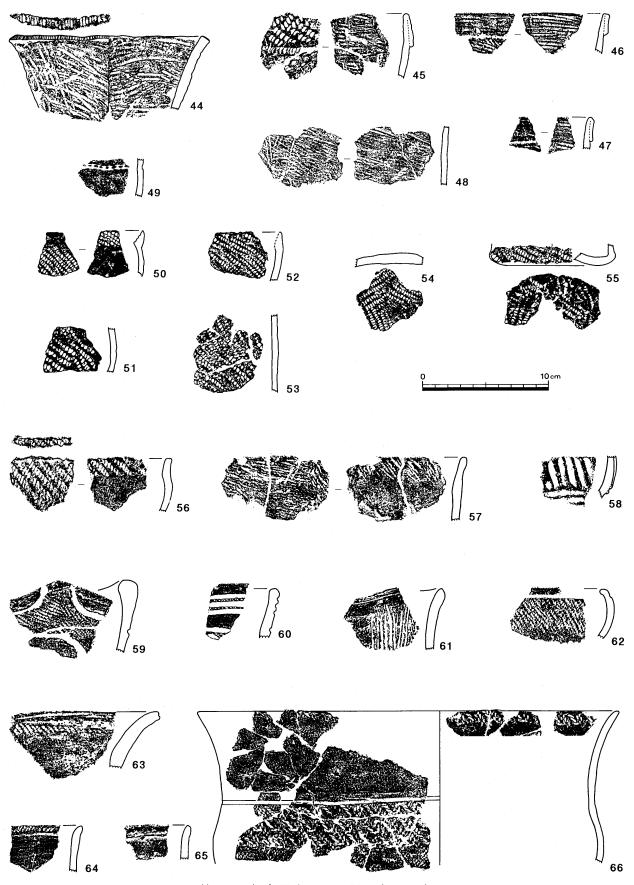
60は3本沈線による文様がめぐり、沈線間の狭いスペースに縄文を配している。

後期Ⅲ類(61)

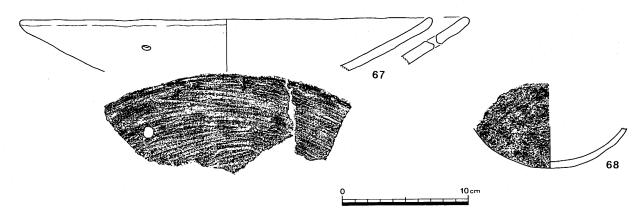
61は波状となる口縁に沿って2本の沈線を加え、その下に垂下条線を施したものである。

後期Ⅳ類(62~66)

62は丸く膨らんだ形状の口縁で、口端に沿って沈線を一巡させ、その下に縄文を施している。63 は口縁外側に狭い縄文帯をもち、口端には1本の沈線を加えている。器面の内外はナデ調整が施さ



第24図 包含層出土の土器 1 (S=1/3)



第25図 包含層出土の土器 2 (S=1/3)

れている。64・65は口縁外側をわずかに肥厚させ、64はこの部分に縄文を施すもの、65は施さないもので、どちらも内外面とも横位のミガキ調整が行われている。66は外反する頸部に丸く膨らむ胴部をもつ器形を有しており、後期IV類の深鉢のプロポーションを表すものである。頸部と胴部の境には沈線により区画されている。施文具には結節縄文を用い、口縁内側と胴部に回転施文している。頸部は無文であるが、内外ともていねいなミガキ調整が行われているようである。

67は後期の無文土器で、浅鉢形の器形を有する。内外面とも巻貝による条痕調整が行われ、内側にはていねいなミガキ調整、外側には軽くナデ調整が加えられている。口縁部には穿孔がある。68は丸底となる底部で、施文は認められない。おそらく後期IV類に属する鉢類のものと思われる。内外面とも 巻貝による条痕調整が行われたのちナデ仕上げされている。

2. 石器(第26図)

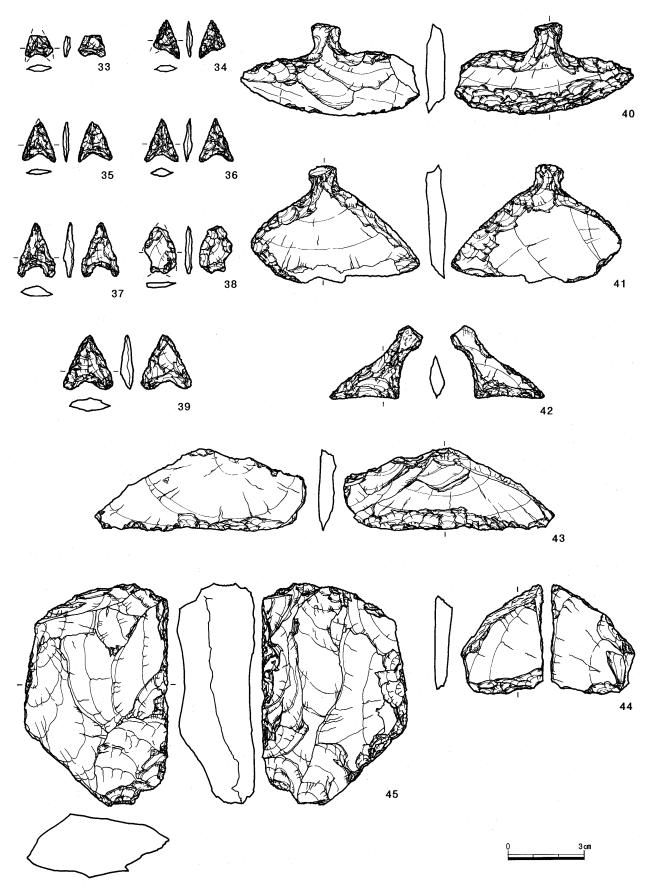
石鏃7点・石匙3点・スクレイパー2点・石核1点を図示した。すべてサヌカイト製である。

33~39の石鏃はすべて凹基鏃である。33~39は抉りはそれほど深くないが、すんなりと尖った脚部を持つものである。38は欠損が激しいが、周縁加工があまり深くまで及ばないものである。39は正三角形を呈し、脚部が丸くおさまる形態をしている。

40~42は左右非対称の横型の石匙である。40は槍先の一方の側辺につまみを付けたような形状で、刃部は弧状を呈している。急な角度の刃部加工が背面側から行われている。41は刃部を欠損しているが、やはり片面調整のものであろう。42は小型の石匙である。刃部は両面調整である。3点とも刃部の一端を尖らせていることが特徴である。

43は横長の剥片を用いた両面調整の刃部を持つスクレイパーである。44は片面調整の刃部を持つ スクレイパーである。背面側から角度の急な刃部加工を行っている。

45は石核である。重量169gと今回出土した中では最も大きなものである。図の左右から不定形剥 片をはぎ取っており、側辺はかなりつぶれが著しい。図の上下は剪断面となっている。



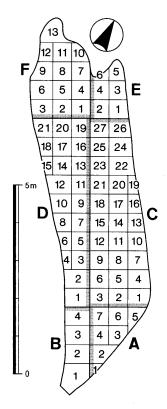
第26図 包含層出土の石器(S=2/3)

第4章 貝層の調査概要

第1節 貝層の調査方法

貝層は、北調査区で20㎡、南調査区で17㎡の範囲にわたって残存していた。はじめに発見された北調査区において、表面の宅地造成土や旧耕作土を除去したあと、貝層の上面を精査し、長さ10m、幅2m強の南北に細長い範囲で検出した。これを縦断するように土層観察用の畦を設定し、2カ所で東西方向の畦を設けた。次いで発見された南調査区では、北調査区の調査基準線を延長し、貝層を十字に区切るように土層観察用の畦を設定した。

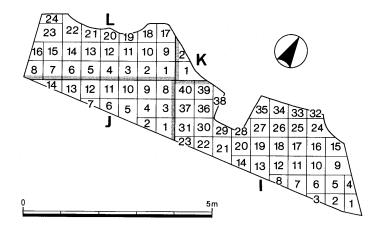
北調査区貝層は、東側を工事により削り取られていたため、この崖面で調査前の断面観察を行った。貝層は南向きの斜面に堆積しており、土砂や礫を多く含む。一般的に混土貝層と呼ばれるもので、二次的に流動している可能性が当初から指摘されていた。さらに内部の堆積状況を調べるために東西畦に沿って細長いトレンチを設けたが、貝層を細分する指標が得られなかったため、機械的に処理を行う方法を選択した。それは、A~Fグリッドまでに区分けされた貝層をさらに平面的に50×50cmの小グリッドに区分し、標高の数値に合わせ、厚さ10cmごとに水平方向にカットしてサンプリングするもので、南調査区の貝層についてもこのような方法を採った。採取した貝層サンプルは



第27図 北調査区貝層 (S=1/100)

整理箱1,100個分で、総重量は約20,000 kgである。なお、サンプリング作業中に目についた遺物は、 出土グリッド名を記して貝層土壌とは別にして取り上げた。

調査現場から持ち帰った貝層サンプルは、その中に含まれている微細な資料を検出するために、水洗選別を行った。その作業にあたって、当初は貝層サンプルを乾燥させてから重量と堆積を計測していたが、乾燥させることによって貝殻と土壌が分離しにくくなり、水洗作業中に貝殻を破砕してしまうことがしばしずるを破砕してしまったままで処理する方法に切り換えた。



第28図 南調査区貝層(S=1/100)

貝層に含まれる土壌は粘性があり、ビニル袋の中で乾燥または半乾燥しているものを堆積を計測するために砕くには抵抗がある。そのため、次の方法で計測を行った。まず、貝層サンプルを8以容量のバケツに適量入れてハカリの上にのせ、目盛りを0にする。その中に全体が8以になるように水を加える。そして、加えた水の堆積(水の比重を1とする)を引いた残りを貝層サンプルの堆積とした。

水洗選別作業にあたっては、1・3・5mmのフルイを重ねて水槽の中へ入れて行った。5mmのフルイの残留物としては礫の他、発掘調査中に回収できなかった土器類、石器類、骨角貝製品、貝殻、大形の魚類、獣類などの動物骨がある。3mmのフルイの残留物としては砂、貝殻の砕片、土器、石器類の小片、魚類、獣類などの動物骨、微小巻貝がある。1mmのフルイの残留物としては細砂、石器類の小片、魚類椎体などの動物骨、微小巻貝がある。また、水槽内の浮遊物としては、細かい炭化物、微小巻貝がある。以上の資料を種類ごとに拾い上げて整理作業を行うのであるが、短時間で多くのグリッドについて水洗処理し、各資料について個別の整理を行うことは不可能である。そのため今回は、貝層サンプルの報告については今までに整理作業を終了させているJグリッドとCグリッドの一部について報告することにしたい。

第2節 貝層出土の人工遺物

1. 土器(第29~34図)

貝層から出土した土器の量は、1グリッド内で整理箱1個から2個分である。これは、未整理の貝層サンプルの中に存在する若干の小片が加わるとしても少ない量である。今回の報告では、発掘調査時に取り上げたものを中心に一部を掲載する。

前期Ⅱ類(69~75)

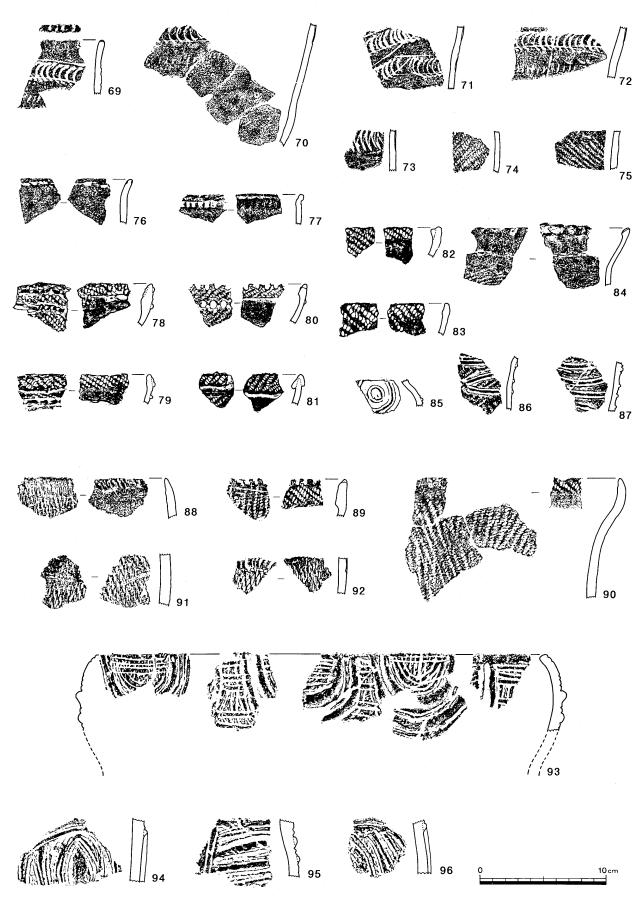
69~72は、胎土、色調が似ており、同一個体と思われる。口縁部を爪形文で飾るもので、割りつけ線としての平行沈線を伴う。69の口縁端には刻目がみられる。73には連続爪形文が施されている。74・75は縄文が施文される胴部の小片と思われ、75は羽状縄文である。縄文は節が細長く密接している。

前期Ⅲ類(76・77)

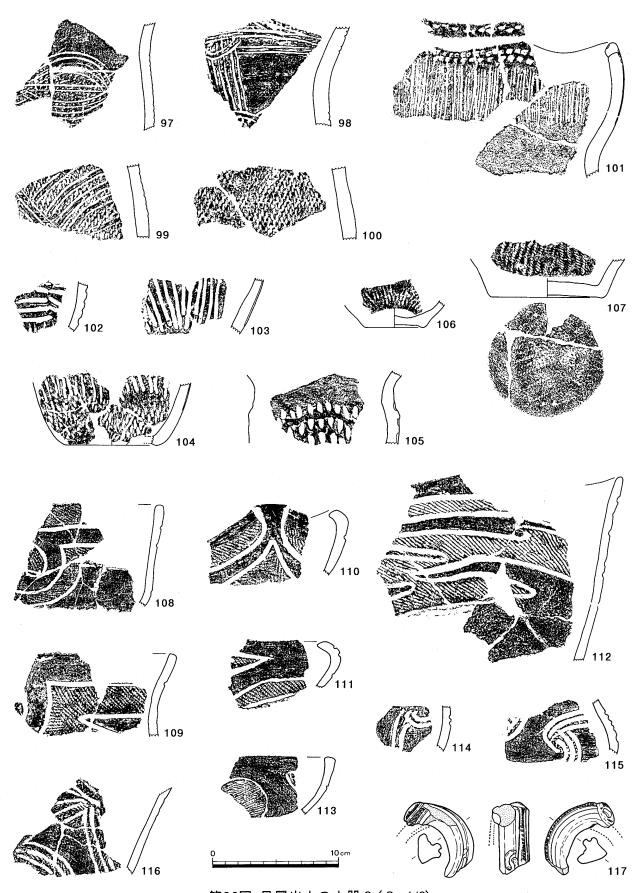
77は竹管状工具で押引き刺突文を施す。口縁内側にも刺突が加えられており、それらの影響を受けて、器表には凸凹がみられる。

前期IV類(78~87)

地文としての縄文をもち、口縁内側も肥厚させるなどして、縄文帯をつくるものである。78・79 には細い貼り付け突帯をめぐらし、その上に竹管状工具による押引き文が施されている。78の口縁は細かい波状を呈するもので、口縁内側を折り返し状にしている。79は口縁外側を肥厚させている。80は口縁内側を肥厚させ、口縁端には深く刻目が付けられている。外面には突帯を貼り付け、それを分断するかのような深い幅広の刻み目がつけられている。81は口縁内外を肥厚させるものである。83は口縁部を肥厚させない。84は口縁内側を肥厚させ、押圧を加えている。口縁部付近は無



第29図 貝層出土の土器 1 (S=1/3)



第30図 貝層出土の土器 2 (S=1/3)



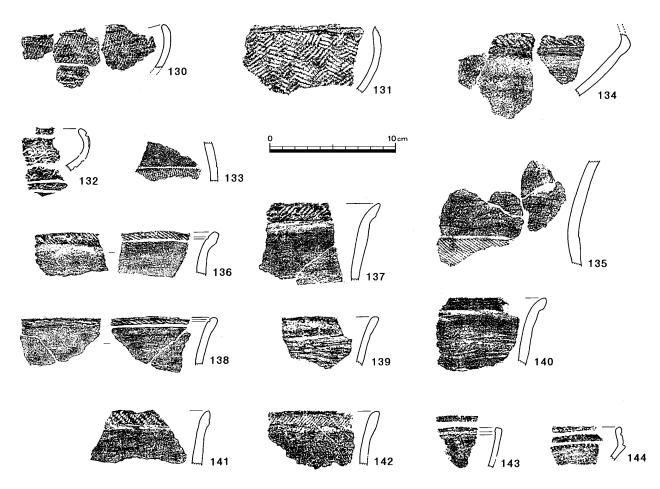
第31図 貝層出土の土器 3 (S=1/3)

文となっているが、胴部には縄文が施文されているようである。85~87は竹管状工具による押引き のある貼り付け突帯を同心円状、あるいは曲線的にめぐらしている。

中期 I 類(88~92)

88は撚りのゆるい細めの原体を用いた縄文を施し、口縁外側には爪形文が密につけられている。 口縁内側は縄文帯で飾られる。89は撚りが比較的強く、あまり大きくない原体を用いた縄文で、口 縁外面には平行竹管文がつけられている。口縁内側には段状につくられた縄文帯をもつ。口縁端は 三角形状となり、竹管状工具により刻目が加えられている。90はやや太い原体を用いた縄文を施 し、口縁外面には二枚貝放射肋の圧痕がつけられている。口縁内側には縄文帯をもつ。91・92は内 外に88に類する縄文が施される小片で、92には爪形文が認められる。

中期Ⅲ類(93~105)



第32図 貝層出土の土器 4(S=1/3)

93~96は縄文地に突帯文と竹管状工具による平行沈線文で飾られるものである。93の口縁部を飾る突帯文は、逆アーチ形を複数に重ねたものを横に連続させている。97~99は平行沈線文だけで飾られるもので、直線と曲線を組み合わせたような文様構成である。100は99と同一の個体と思われる。101は口縁部に竹管状工具による縦位の沈線が施される。口縁に沿って刺突文列がめぐらされている。地文は明らかでないが、頸部のくびれ部は無文である。102~105は棒状工具により刺突文や沈線文が施されるものである。102~104は同一個体と思われるもので、横位の短かい沈線文の下に縦位の沈線が施される。底部にみられる縄文は、地文として器面全体に施文されたものであろう。105は突帯状の高まりをもち、その上下に刺突列を配している。

106・107は底部で、107の底面には縄の圧痕がみられる。

後期 I 類(108~113)

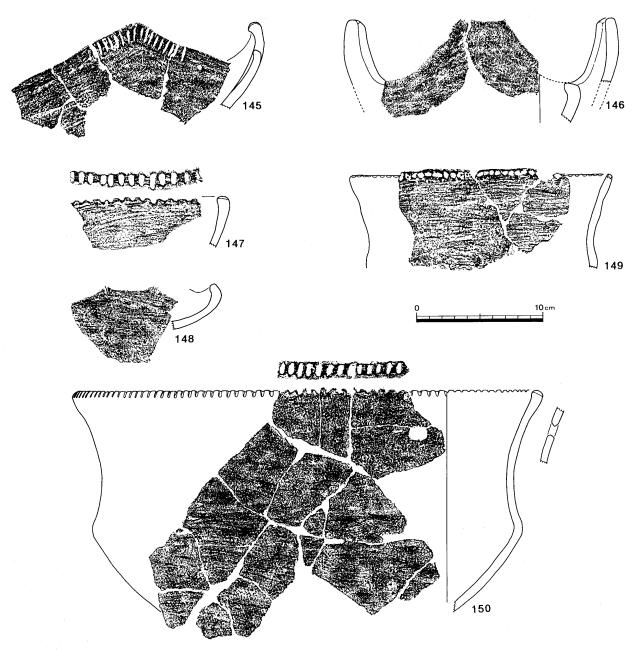
中津式特有の磨消縄文が施されるのものである。波状口縁となるもの(110・112)と平縁となるものがある。

後期Ⅱ類(114~117)

3本あるいは2本1組の沈線による磨消縄文が施されるものである。117は口縁部の橋状把手である。

後期Ⅲ類(118~127)

いわゆる縁帯文土器である。118~120は口縁部の外側を肥厚させ、文様帯としている。118は波頂部に孔を開け、そのまわりに沈線を半周させている。口縁端と肥厚部の下端にだけ縄文が施されるようである。肥厚帯の直下には、波頂部を中心に向かい合わせにした弧状文を配している。119は縄文地に渦文を描いている。120の詳細は不明であるが、119・120とは異なり直線を基調とした文様意匠のようである。今回の報告では後期Ⅲ類に含めておく。121~124は口縁部の内側を肥厚させ、文様帯としている。121の外面には櫛描状の条線がみられる。125は口縁上端を拡張させて広い面をつくり、文様帯としている。頸部には櫛描状の条線を縦に引き、それに対し、斜めに交差させるような図柄を描いている。胴部には頸部の文様とはつながらないように条線を垂下させている。

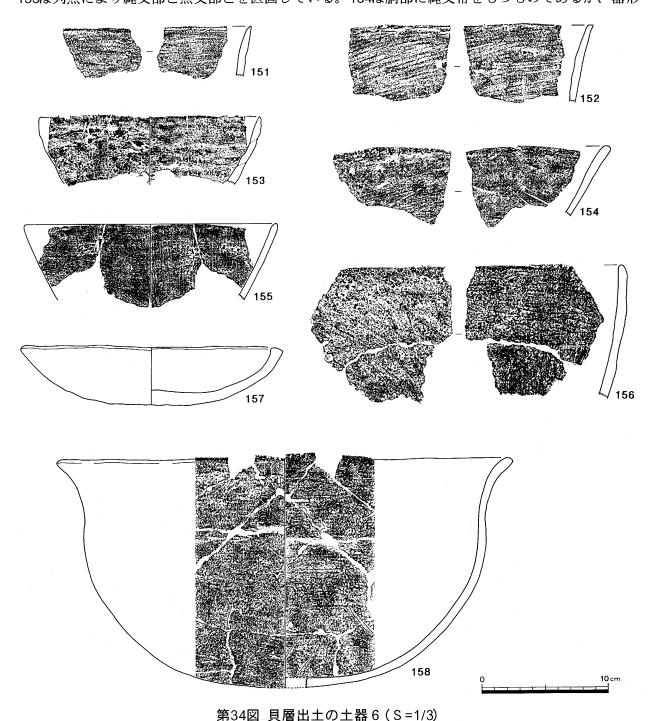


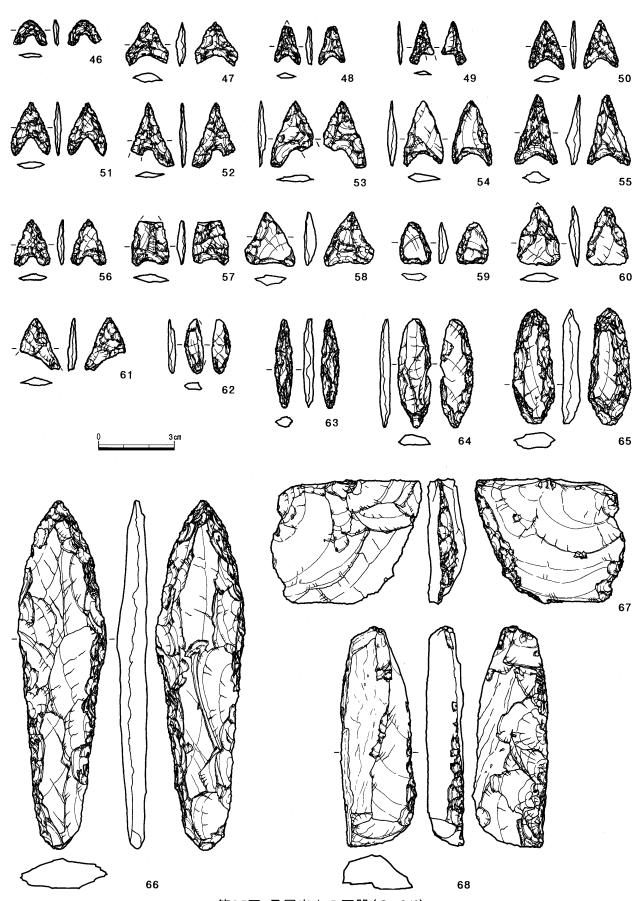
第33図 貝層出土の土器 5 (S=1/3)

126は口縁部の橋状把手、127は垂下条線をもつ胴部の小片である。

後期IV類(128~144)

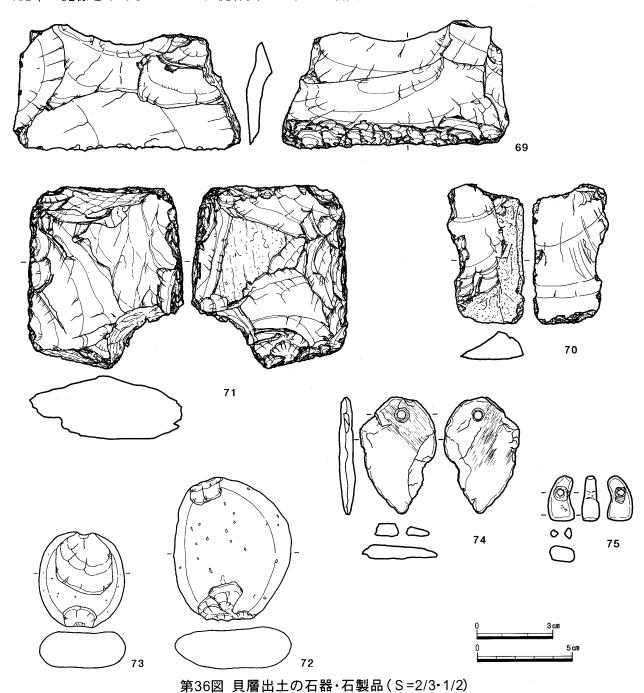
128は口縁に平行する二本の沈線の間に縄文を配した磨消縄文で飾られる。129は丸底の鉢である。口縁部と胴部に無節縄文を施文し、外反する頸部を無文としている。今回の報告ではこの2点を後期IV類に含めておく。130~132は丸く膨らんだ口縁部をもつもので、131には疑似羽状縄文、132には縄文原体の側面にループ(環)がついたものを回転施文し、口縁に平行する沈線を描いている。133は列点により縄文部と無文部とを区画している。134は胴部に縄文帯をもつものであるが、器形





第35図 貝層出土の石器(S=2/3)

等の詳細は不明である。135は無文の頸部から縄文を施文する胴部にかけての破片である。136~142は口縁部の諸形態をまとめた。136は口縁内外に縄文帯をもち、内側には沈線がめぐる。調整については、内外面ともていねいなミガキ調整を行っている。138は口縁内側に沈線を伴う縄文帯をもつ。外側は無文とし、巻貝条痕を残している。内外ともミガキ調整を行っている。137・141・142は口縁外側だけに縄文帯をもつ。調整は巻貝条痕ののちミガキ調整を行っている。139・140は口縁外側をやや肥厚させるが、縄文をもたない。調整は巻貝条痕ののちナデ調整を行っている。143は口縁内側に小さな円形の刺突列をめぐらしている。口縁端には浅く細い刻目がある。144は屈曲する口縁部に2本の沈線をめぐらしている。沈線文の上下には刺突がみられる。



後期無文土器(145~158)

後期 I 類~IV類に伴う無文の土器である。145は波頂部の口縁に線刻状の刻目がある。146の波頂部は水平になっている。147・150の口縁端の刻目は棒状工具によるもので、149のそれは竹管状工具を垂直に刺突したものである。148は波状口縁となる浅鉢である。155は外面が横方向、内面が縦方向のていねいなミガキ調整が施されている。158は大型の丸底鉢で、調整は巻貝による調整ののち、内面は横方向のミガキ、外面は口縁部に横方向のミガキ、胴部にナデ調整が行われている。

2. 石器(第35·36図)

石鏃20点・石槍1点・スクレイパー3点・ノッチ1点・石核1点・石錘2点・石製装身具2点を図示した。

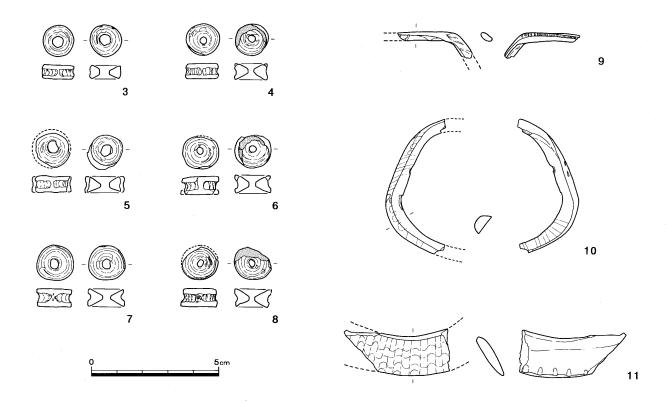
46~58は凹基鏃である。46は小型で幅が広く縄文前期に見られる形態のものである。59・60は平基鏃で、いずれも加工の浅いものである。62~65は尖基鏃である。63は紡錘形で先端と基部の区別が不明確である。65は厚手で大型のものであるが、64とともに茎部を明瞭に作り出している。

66は石槍である。茎部と尖頭部の境は比較的明瞭である。縄文前期に属すると考えられる。

67~69はスクレイパーである。いずれも片面調整の刃部を持つのものであるが、67・68が急な角度の刃部加工を行っているのに対し、69は比較的緩やかな角度で刃部を加工している。

70は黒曜石製のノッチである。打点は折りとられているが、縦長剥片を利用している。背面には 先行する剥離面が1枚と原礫面がある。

71は石核である。平面形は正方形で、4側辺はかなりつぶれが著しい。一部に原礫面を残し、不定



第37図 貝層出土の骨角貝製品(S=2/3)

形剥片を剥離している。

72・73は打欠石錘である。72はデイサイト製で重量が153.1g、73がアプライト製で重量64.6gである。

74・75は石製装身具である。74は滑石製の垂飾りである。孔径2.7mm、穿孔は両側から行われており、錐の痕跡は明瞭である。孔の上部には紐ずれの痕跡がある。また表面には擦痕が著しい。75は蛇紋岩製の勾玉である。孔径2.4mm、穿孔は両側から行われており、錐の痕跡は明瞭である。

3. 骨角貝製品(第37図)

骨製垂飾6点、貝輪3点がある。いずれも水洗選別により検出された。 $3\sim8$ は大型エイの椎骨の中央に穿孔した垂飾で、孔の直径は、 $3\cdot5$ が4mm、7が3mm、 $4\cdot6\cdot8$ が2mm程度である。この他に長さ・幅とも5mm、厚さ3mm、孔径1mm程度の小型の製品が1点ある。 $9\sim11$ は貝輪で、材質はサルボウガイまたはアカガイと思われる。11の表面はよく研磨され美しい放射肋を表出している。

第3節 貝層出土の貝類

船倉貝塚の貝層から出土した自然遺物には次のものがある。

軟体動物門 腹足綱(巻貝)・斧足綱(二枚貝)

節足動物門 甲殻綱(フジツボ・カニ)

脊椎動物門 軟骨魚綱(サメ・エイ)・硬骨魚綱(スズキ・クロダイなど)・両生綱(カエル) 爬虫綱(カメ)・鳥綱・哺乳綱(イノシシ・シカ・タヌキ・イヌ・サルなど)

これらのうち本節では軟体動物門の貝類について扱い、節足動物門と脊椎動物門は付論2を参照されたい。

貝類の整理

Jグリッド貝層サンプルを中心に水洗選別を行った結果、次頁の貝類を検出した。主な貝種の出 土数については巻末の表に記載する。

個体数の算定は、腹足綱(巻貝)の場合は殻軸数を、斧足綱(二枚貝)の場合は左右の殻頂数のうち 多い方を個体数とした。稚貝の扱いについては、個別に算定する必要があるが、今回の報告分では それほど数が多くないので除外した。

主要貝種であるマガキ、ハマグリ、ハイガイ、アカニシについては、殻長・殻高・殻径を計測した。ハマグリの場合は計測できるものが少ないため、資料中から完形のものを選び、左右それぞれ 殻長22mm~102mmまでのモデルをつくり、それに殻頂を照らし合わせて殻長を推定する方法を採った。

貝類の組成

大小各グリッドの貝類の組成は巻末のグラフに示すとおりである。 J グリッド全体における垂直 方向の変化を見てみると、ほとんどのカットにおいてマガキが占める比率は80%以上で安定して出 土している。細かく見れば、下位から上位にいくに従って主体貝種であるマガキの比率がわずかな

腹足綱 ClassGastropoda		斧足綱 Class Pelecypoda	
原始腹足目	Order Archaeogastropoda	フネガイ目	Order Arcoida
リュウテンサ	ザエ科 Family Turbinidae	フネガイ科	Family Arcidae
スガイ	Lunella coronata coreensis	サトウガイ	Scapharca satowi
アマオブネガー	イ科 Family Neritidae	ハイガイ	Tegillarca granosa
アマガイ	Nerita japonica	ハゴロモガイ	Diluvarca ferruginea
中腹足目	Order Mesogastropoda	カリガネエガイ	Barbatia virescens obtusoides
ウミニナ科	Family Potamididae	ウグイスガイ目	Order Pteroida
カワアイ	Cerithideopsilla djadjariensis	イタボガキ科	Family Ostreidae
ヘナタリ	Cerithideopsilla cingulata	マガキ	Crassostrea gigas
フトヘナタ	Cerithidea rhizophorum	マルスダレガイ目	Order Veneroida
	rhizophorum	バカガイ科	Family Mactridae
ウミニナ	Batillaria multiformis	シオフキガイ	Mactra (Mactra) veneriformis
イボウミニ) Batillaria zonalis	フナガタガイ科	Family Trapeziidae
ホソウミニ	Batillaria cumingii	ウネナシトマヤカ	ゴイ Trapezium liratum
カワニナ	Semisulcospira libertina libertina	シジミ科	Family Corbiculidae
タマガイ科	Family Naticidae	ヤマトシジミ	Corbicula japonica
ツメタガイ	Glassaula didyma	マルスダレガイ科	Family Veneridae
新腹足目	Order Neogastropoda	アサリ	Ruditapes philippinarum
アクキガイ科	Family Muricidae	ハマグリ	Meretrix lusoria
アカニシ	Rapana venosa	オキシジミ	Cyclina sinensis
イボニシ	Thais (Reishia) clavigera	アシガイ科	Family Psammobiidae
レイシガイ	Reishia bronni	ムラサキガイ	Soletellina diphos
テングニシ科	FamilyMelongenidae	オオノガイ目	Order Myioda
テングニシ	Hemifusus tuba	オオノガイ科	Family Myidae
		オオノガイ Myd	a (Arenomya) arenariaoonogai

貝類遺体種名表1

腹足綱 Class Gastropoda		柄眼目	Order Stylommatophora
原始腹足目	Order Archaeogastropoda	キセルガイ科	Family Clausilidae
ツタノハガイ科	Family Petellidae	属・種不明	Gen.etsp.indet.
属・種不明	Gen.et sp.indet.	オカクチキレガイ科	Family Subulinidae
中腹足目	Order Mesogastropoda	オカチョウジカイ	Allopeas kyotoense
ヤマタニシ科	Family Cyclophoridae	ホソオカチョウシ	ガイ Allopeas pygula
ヤマタニシ	Cyclophorus herklotsi	コハクガイ科	Family Zonitidae
タマキビガイ科	Family Littorinidae	コハクガイ属	Zonitidaesp.
タマキビガイ	Littorina brevicula	ベッコウマイマイ科	Family Helicarionidae
ムカデガイ科	Family Vermetidae	ハリマキビ属	Parakaliella sp.
オオヘビガイ	Serpulorbis imbricatus	キビガイ	Gastrodontella stenogyra
新腹足目Order	Neogastropoda	ヒメベッコウ属	Discocomulus sp.
ムシロガイ科	Family Nassariidae	ヒザラガイ綱 Class P	olyplacophora
アラムシロガィ	Reticunassa festiva	科不明	Family indet.

貝類遺体種名表 2

がら減少している傾向が認められるが、これは、ウミニナ類の比率の増加と連動したものと言える。 ハマグリの占める比率は各カットにおいて5%前後と少ないが、変動も少ない。次に小グリッドで見 ると、J1では上記の傾向とはかけ離れている。出土貝類の絶対数が少ないため偏差が大きくなって いると思われる。その他はだいたい同じような変化を示していると言えるであろう。C1グリッドで は、Jグリッドと比較して中位にハマグリの比率が多くなっている。この部分での1カット中の実 個体数は150~200個で、ハマグリの貝殻が集中的に捨てられた時期が存在する。

貝類の大きさ

これまでの水洗選別で検出された貝類のうち、マガキについてはJ1~J4の資料の殻高を計測した。マガキは他の二枚貝に比べていびつな形をしており、周縁が壊れやすいので正確な計測値が得にくいが、厚さ10cm単位のレベルごとに集計したところ、どのレベルにおいても殻高24~32mmに45%~55%が集中することが確認された。グリッド内での垂直方向の変化は特に認められない。

ハマグリについては、殻長を計測した。先述のようにハマグリは直接計測できる個体数が少ないため、各サイズのモデルを設定し推定復元して行った(巻末グラフ)。ハイガイについては、殻長を直接計測した。カットごとの殻長分布を調べてみたが、個体数が少ないため傾向がつかめない状態である。そのため、Jグリッドを便宜上J1~7とJ8~14に2分した中グリッドを設定した。J1~7の上半部(標高5.3~5.5m)において、殻長26mm前後の個体が集中していることが認められた。J8~14の同レベルでは、殻長36mm前後の個体が最も多く、地点によって少し変化することが認められた。アカニシについては殻径・殻高を計測した。最小値は、殻径13mm・殻高19mm、最大値は、殻径62mm・殻高80mmで、平均値は、殻径40mm・殻高55mmである。

小 結

これまでに整理用コンテナで約180箱分の貝層サンプルを水洗選別し、多くの貝類遺体を検出することができた。貝類の分析調査は主体種を中心に種類ごとに行われるのが一般化しているため、整理作業にかなりの時間が必要である。そして、これまでに経験のないため、一連の整理作業の流れを把握するまでにも多くの時間を費やし、十分に検討のないままの報告となった。Jグリッドを分析対象に選んだのは、前期磯の森式を含む比較的古い堆積層が保存されているとの認識があったためである。また、貝層サンプルを分析するにあたり、まず調査区全体にわたってその内容を広く分析することが求められるが、当初の水洗選別で魚類、獣類遺体の検出が非常に少なく、取りこぼしを防ぐのには多くのサンプルを水洗処理する必要を感じたため、あえて分析対象地点を広げなかった。今後は、調査区全体を把握するために作業の効率化を考えながら資料分析を継続していくことが必要である。

第5章 まとめにかえて

貝塚の形成過程

第3章でも少しふれたが、船倉貝塚の形成過程についてまとめてみたい。

貝層に伴う最も古い土器型式である磯の森式は、南調査区 I・Lグリッドで多く出土しており、 船倉貝塚の形成はこの付近から始まっていると考えられる。 I・Lグリッドにおける旧地形は、南 に開く小さな谷状で、それを埋めるかのように食物残滓の廃棄が開始されたと推察される。

次の型式とされる彦崎 ZI 式は、出土量が少なく、貝層に伴うものかどうか疑問である。今回の調査では、磯の森式との層位的関係が具体化することはなかったが、編年的位置を含めて当該期の動向については注意すべき点である。

里木 I 式の時期は、人々の活動域が広まったと考えられる。この時期の遺物は、南・北調査区全体に分布している。また、土壙墓などの遺構の存在は、生活の拠点としてこの場所が利用された証であろう。

中期の土器は、船元 I ・ II 式は少量で、船元 II 式は北調査区でまとまって出土しているが、個体数は多くない。中期の活動の中心は、調査区より離れたところであった可能性がある。船元 II 式に続く中期の土器で明確なものは確認されていない。

後期前半の遺物は一定量があり、縁帯文期でやや増加しはじめ、次の彦崎KII式(後期IV類)の時期で最盛期を迎える。後期IV類の時期は、検出された遺構こそ少ないが、南・北調査区全体にわたる活発な活動があったと推察される。北調査区貝層北端部では、貝層の下にこの時期の包含層(貝殻は全く含まない)が検出されており、北調査区貝層の北部分は全て後期IV類以降に形成されたものと考えざるを得ない。また、北調査区貝層の上位のかなりの部分が後期以降に形成されたものと考えている。後期IV類に続く土器型式は出土しておらず、この時期をもって貝塚は終結したのであろう。

狭い調査区の中で、しかも周辺の地形が全く失われている状況では、判断し難いことが多い。船 倉貝塚の形成については、残された課題が多いことを明記しておく。

遺構について

船倉貝塚で検出された、3基の土壙墓には、それぞれに埋葬人骨が残存していた。人骨に関する 分析は、付論1で詳述されており、さまざまな重要な事実が明記されている。

1号土壙墓では、人骨の下に埋土層があり、大小の角礫の混じる中からイノシシ・シカ・イヌの 遺体が出土している。土壙墓を形成するにあたりあらかじめ計画されたものかどうかが問題となる であろう。

2号土壙墓では、埋葬の主体である2号人骨の上に、焼けた人骨片(2b号人骨)が覆いかぶさるようにして検出された。2b号人骨については、1人分に由来するものか複数人分に由来するものか不明である。何らかの方法(火葬など)で焼かれた人骨の一部分が集められて、主たる埋葬に付随して葬られたという1つの埋葬例を示している。また、2号人骨の頭上に2つの角礫がのせられていた

ことも、骨の分析で判明した彼の生活歴と照らし合わせてみれば興味深いものがある。

土壙1について考えてみると、埋土から人骨は検出されなかったが、前期里木 I 式に属するものであること、1号土壙墓の下層と同様に大小の角礫が検出されていることと、その形状から土壙墓である可能性は否定できない。

土壙墓以外の人骨の出土については、北調査区西崖面から、頭蓋骨が数片出土しており、3基の土壙墓以外にも埋葬遺構が存在した可能性が高い。

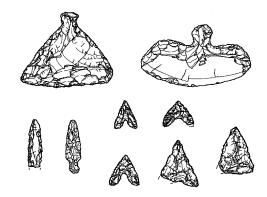
土壙墓出土の石器

1・2号土壙墓からは里木 I 式土器とともに石鏃を含む石器が出土している。この地域の縄文の石

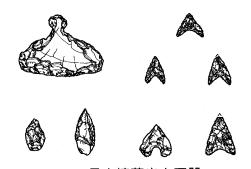
器でその形態・組成が比較的はっきりしているのは、磯の森式土器に伴うものである。里木I式の二型式前と比較的近い時期に位置するので、比較してみることとする。

まず、磯の森式期の石器であるが、従来から言われているように特徴的な形態のものが含まれている。石匙は「整った三角形をした石匙」と楕円をつぶしてへこんだ部分につまみを付けたような石匙が特徴的である。石鏃は基部の両側に抉りの入った「アメリカ式鏃」を含む尖基鏃、先端が宝珠の頂部状に突出した幅の広い形態の鏃などともに脚部の特徴的な鏃と平基鏃がある。

一方、1・2号土壙墓の石器をみると、石匙は左右対称の 横型の石匙という点では磯の森式期の石匙と共通している が、楕円の長辺中央につまみをつけたような単純な形態で ある。石鏃のうち、尖基鏃はやや幅広で加工も粗雑な感が ある。凹基鏃は脚部がすんなりと尖るものが多い。磯の森 式期の石鏃と比較してやや簡素化あるいは粗雑化した作り のように考えられる。



磯の森式期の石器(1)



1・2号土壙墓出土石器

一般に縄文中期の石鏃は前期のものと比較して粗雑化していると言われるが⁽²⁾、1・2号土壙墓の石鏃は前期の石鏃から粗雑化していく一過程を示すものかもしれない。今後の資料の増加を待って再度検討したい。

これまで瀬戸内の貝塚地帯では多数の石器が出土しているにも関わらず、時期のわかる一括資料は少ないのが現状である。今回の資料は必ずしも良好なものではないが、比較的時期を限定できるため、この地域の石器の変遷を考える上で多少の参考にはなるのではないだろうか。

貝層サンプルの整理について

今回、主な分析対象としたJグリッド貝層の貝類種別組成は、8割以上がマガキで占められ、水平・垂直的変化が乏しいというデータが得られた。魚類・獣類遺体の出土量は少ないが、当時食用にされた種類を特定することが可能となった。今後は、別地点でのデータを作成し、比較しながら

進めていくことが重要となる。

船倉貝塚の発掘調査がきっかけとなり、今回はじめて貝層サンプルを扱うこととなった。まず手始めに、JグリッドとCグリッドの一部を水洗選別し、報告する次第であるが、十分な問題意識や目的意識を持たないまま進めてきたことを反省している。現場でのサンプリング方法が次善の策であるため、貝塚から情報を得て生活を復元するのには制約が大きいであろうが、より有効なデータを提示していきたい。

- 註(1) 倉敷市内の磯の森貝塚と一尺谷上池遺跡の出土石器
 - (2) 鈴木道之助『図録 石器入門辞典 縄文』 柏書房 1991年

付論1

船倉貝塚出土の縄文時代の人骨について

兵庫医科大学 解剖学第二教室 和 田 洋

はじめに

船倉貝塚は平成3(1991)年7月、羽島・四十瀬線の都市計画道路建設工事の際に、発見された。考古学調査により9月には多量の縄文時代の考古学遺物と共に、3例の埋葬人骨と多分1人骨であろうが、火葬骨または焼骨が出土した。以下、1号人骨、2号人骨、2b号人骨、3号人骨とそれぞれに命名されたが、1号人骨は1号土壙墓より、2号人骨と2b号人骨は2号土壙墓より、3号人骨は3号土壙墓より出土した。

1号人骨

出自 人骨遺物は平成3年9月に、船倉縄文貝塚の1号土壙墓より出土した。1号土壙墓は不整円形で、埋葬位は背中を下にした、仰臥である。股関節は伸展しているが、膝関節と肘関節の状態は不明である。頚部は強い前屈位である(写真1a)。船倉貝塚調査区では旧耕作土層、撹乱土層、貝殻土層、混貝土層、褐色土層、基盤土層の6層が識別されているが、1号土壙墓は貝殻土層より掘り込まれ、また里木I式土器を伴うので、縄文時代前期の終わり頃(約3000B.C)と推定されている。

残存状態 人骨遺物では四肢の前腕と下腿より先端の骨が紛失しているが、体幹骨は良好な状態で残る。脳頭蓋は前頭骨と頭頂骨の大部分を破損するので、後頭部のみを復元した。顔面頭蓋では上顎と下顎骨のみが残る。上顎には全16歯が残る。下顎には左右共に6歯づつが残る。下顎左側では第1小臼歯は生前に離脱するが、第3大臼歯の萌出はない。下顎右側では犬歯と側切歯は生前に離脱するが、第3大臼歯は萌出する。椎骨では7個の全頚椎と第5腰椎が残る。仙骨では第1仙椎が残る。上肢骨格では右上腕骨が、また下肢骨格では寛骨と大腿骨が残る。右上腕骨では中間の約2/3が、左寛骨では腸骨の大部分と恥骨の一部が、右寛骨では腸骨、坐骨、恥骨の大部分が、大腿骨では近位側の約2/3が左右共に残る(写真1bと1c)。人骨遺物は兵庫医科大学の骨格標本箱H80に保管されている。

年齢 人骨遺物には良好な上顎と下顎歯が、また寛骨と大腿骨が残る。下顎左側には第3大臼歯の 萌出が認められないが、その他の第3大臼歯は完全に萌出している。大腿骨では近位成長骨端線が完 全に癒合する。寛骨腸骨稜には成長骨端線の癒合痕が残る。寛骨恥骨結合面には弱い平行隆線が残 る。腹側傾斜面は既に完成しているが、骨塁は上方の1/3で不連続である。同様に、背側骨縁堤は一 部に形成されているが、腹側のそれはない。寛骨耳状面では縁堤が鋭く、また面もピロード状である。

上顎には全16歯が残る。大臼歯は左第1では近位にエナメルを残すが、その他の咬合面では象牙質を露出し、プロズウェルの5度の強い咬耗である。右側も全咬合面の象牙質を露出し、プロズウェルの5+度の強い咬耗である。大臼歯は左第2では舌側半の象牙質を露出し、プロズウェルの4度の咬耗である。右側

は舌側半と頬側遠位に象牙質を露出し、プロス゚ウェルの4+度の咬耗である。第3大臼歯は左右共に小臼歯様の歯であるが、全咬合面の象牙質を露出している。左第3では遠位面が蝕まれている。咬合面は前後歯共にほぼ水平であるが、前歯の咬耗は特に強い。

下顎には左右共に6歯づつが残る。下顎左側では第1小臼歯が生前に離脱するが、第3大臼歯の萌出はない。右側では犬歯と側切歯が生前に離脱するが、第3大臼歯は萌出する。右中切歯、左中切歯、左側切歯、左犬歯は共に左遠位に移動し、右中切歯は正中面より左側に位置する。第1小臼歯の生前離脱はかなり若い時期に生じたものと思われる。大臼歯は左第1では近位半に、また遠位側の舌側、中間、頬側に2-3mm大の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの5度の強い咬耗である。右側も全咬合面の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの5+度の強い咬耗である。第2大臼歯は左右共に頬側半を虫歯により侵食される。第3大臼歯は小臼歯様の歯であるが、近位半を蝕まれる。咬合面は前後歯共にほぼ水平であるが、前歯の咬耗は歯頚までに及ぶ。歯並びは下顎では良好と言えないが、咬合は鉗子状である。人骨遺物は30歳代の後半の壮年期に相当するであろう。

性別 左寛骨では腸骨の大部分と恥骨の一部が、右寛骨では腸骨、坐骨、恥骨の大部分が、仙骨では第1仙椎が残る。骨盤は辛うじて復元された。骨盤は巾広く、腸骨翼はV字状に拡がる傾向にある。骨盤上口は巾広の楕円形である。寛骨では腸骨窩が広く低い。腸骨稜は不明瞭なS字を描く。腸骨結節は厚いが、腸骨結節稜は余り目立たない。大坐骨切痕はV字状に開き、耳状面の前縁の上方の半分と大坐骨切痕の下方の半分を結ぶ弧描線は二重の弧を描く。前耳状面溝は左右共に巾広く深く、底は小陥凹の集積により形成される。大腿骨では近位側の約2/3が残るが、全体的に頑強である。

頭蓋は前頭骨と頭頂骨の大部分を破損するので、後頭部のみを復元した。眉弓と眉間は僅かな膨隆である。眼窩上縁は丸く薄い。頭頂結節の膨隆は弱い。項平面の膨隆は強い。外後頭隆起は結節状である。上項線は内側半では稜状である。下項線は左側の半分だけであるが、ほぼ全長にわたり溝状である。最上項線は存在しないが、外後頭隆起の上方には帽状腱膜の起始痕と思われる粗な陥凹が存在する。側頭骨では乳突上稜が明瞭であるが、乳突上溝は不明瞭である。乳様突起は外耳孔より先端の長さでは約27-29 mmと、非常に長いが、細い。人骨遺物は女性であろう。

生前身長 上肢骨格では上腕骨が近位と遠位端を、また下肢骨格でも大腿骨が遠位端を破損するので、正確な身長は推定できない。身長推定は女性ではあるが、右上腕と左大腿骨体の長さと2号人骨男性のそれらとの比較法に基づいた。

2号人骨は左上腕骨では最大長(284)が、また左大腿骨では最大長(423)が計測されている。1号人骨の右上腕骨は大結節稜より鈎突窩までの長さでは2号人骨の左上腕骨のそれにほぼ等しい。左大腿骨は骨頭より粗線の遠位端までの長さでは2号人骨のそれよりも約20mm程短い。推定最大長を女性のための7ジイの回帰式に代入し得られる身長は右上腕骨では2号人骨のそれとほぼ等しいので、約149cmで、また左大腿骨では2号人骨のそれよりも約20mm程短いので、約152cmである。推定最大長を女性のためのピアリンの回帰式に代入し得られる身長は右上腕骨では2号人骨のそれとほぼ等しいので、約150cmで、また左大腿骨では2号人骨のそれよりも約20mm程短いので、約151cmである。推定

身長は7ジイ式では約149-152 cm、またピアソン式では約150-151 cmである。生前身長は多分150 cm前後であろう。

脳頭蓋 脳頭蓋は前頭骨と頭頂骨の大部分を破損するので、後頭部のみを復元した。上面観では後半分のみであるが、後頭鱗は尖る傾向にある。頭頂結節の膨隆も弱い。上面観輪郭はt^{*}ル^{*}の五角形に似る。前頭鱗には前頭縫合の遺残も確認された。側面観でも後半分のみであるが、後頭鱗は尖る傾向にある。側頭窩の膨隆は強いが、頭頂結節は弱い。頭頂骨の後方への落ち込みは強いが、後頭鱗の前方への潜り込みは弱い。側面観輪郭は菱形に似る。

後面観では両耳幅(117)と下顎角幅(91)が計測された。両耳幅は西日本縄文女性のそれに比べ、-0.5SD小、また下顎角幅も-1.1SD小である。頭蓋底は西日本縄文女性のそれよりも狭い。側頭窩は膨隆する。頭頂結節の膨隆は弱い。頭蓋冠では正中部がほぼ平坦である。後面観輪郭はハベラーの家屋状に分類される。矢状縫合には縫合骨がテムダ部に、また人字縫合にも縫合骨が左右のアステリオン部に形成される。後頭鱗には横後頭縫合が残り、また後頭平面はインカ骨により3分割されている。

四肢骨格 上肢では右上腕骨が、また下肢では大腿骨が左右共に残る。右上腕骨では中間の約2/3が、また大腿骨では近位側の約2/3が左右共に残る(写真1bと1c)。

上腕骨 右上腕骨は遠位では最小周(56)が計測された。外弯性は強い。近位の後屈性は不明であるが、遠位の前屈性は強い。三角筋粗面位では断面輪郭がほぼ三角形と特異である。最大径と最小径は同じ20mmで、それらは三角筋粗面の前稜と後外側稜の間に、また三角筋粗面と後内側縁の間にある。三角筋粗面の隆起は強い。粗面では前凸稜、1条の中間稜、後外側凸稜の3本の縦稜が走り、粗面は巾広い樋状である。後外側凸稜は上腕三頭筋外側頭の起始であるが、帯状の粗面である。前内側面では烏口腕筋の停止痕が明瞭である。後外側面では後外側縁と橈骨神経溝が明瞭である。後面では上腕三頭筋内側頭の起始稜がほぼ中間稜を形成している。遠位では最小周が西日本縄文女性のそれに比べ、0.5SD大である。遠位は西日本縄文女性のそれよりも太い。断面輪郭は前後に高い三角形である。後面では後内側縁が鋭いが、後外側縁は丸い。上腕三頭筋内側頭の起始は強い凸面である。

大腿骨 大腿骨は骨頭では左側の周径(130)、垂直径(41)、横径(41)、断面示数(100.0)が、近位では左側の矢状径(21)、横径(32)、断面示数(65.63)と右側の矢状径(22)、横径(32)、断面示数(68.75)が、遠位では左側の周径(84)、矢状径(28)、横径(25)、断面示数(112.0)と右側の周径(87)、矢状径(29)、横径(26)、断面示数(111.54)が計測された。大腿骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、内捻転性と前弯性は強い。骨頭周は西日本縄文女性のそれに比べ、0.7SD大、垂直径は0.7SD大、横径は1.0SD大、また断面示数も0.8SD大である。骨頭は西日本縄文女性のそれよりも大きいが、断面輪郭は円形である。骨頚は短いが、屈曲は普通である。近位側の1/3では矢状径が左側では-0.6SD小、また右側でも-0.1SD小である。横径は左側では2.1SD大、また右側でも3.8SD大である。断面示数は左側では-1.8SD小、また右側でも-1.6SD小である。断面輪郭は左右共に前後に扁平な楕円形で、西日本縄文女性のそれよりも過扁平型(X-75)である。外側面の張り出しは左右共に非常に強く、また前面はほぼ平坦である。後面では大殿筋粗面が7ンカリンが溝で、また粗線外側唇も強い

稜である。粗線中間面は巾広い樋状の凹面である。遠位では周径が左側では1.6SD大、また右側でも2.6SD大、矢状径が左側では1.9SD大、また右側でも2.3SD大、横径が左側では0.4SD大、また右側でも1.4SD大、そして断面示数も左側では1.4SD大、また右側でも1.0SD大である。断面輪郭は前後に長い不整形の栗の実状で、西日本縄文女性のそれよりも厚型(100-X)である。後内側面はほぼ平坦であるが、後外側面は強い凹である。前面は左側では平坦であるが、右側では凸面である。粗線では内側唇と外側唇が共に強い稜で、また中間面も溝状である。

2号人骨

出自 人骨遺物は平成3年9月に、船倉縄文貝塚の2号土壙墓より出土した。2号土壙墓は不整方形で、埋葬位は体幹の左側を下にした、側臥屈位である。股関節と膝関節は強い屈曲であるが、右肘関節の屈曲は弱い。頚部は強い前屈である(写真2a)。船倉貝塚調査区では旧耕作土層、撹乱土層、貝殻土層、混貝土層、褐色土層、基盤土層の6層が識別されているが、2号土壙墓は混貝土層より掘り込まれ、また里木I式土器を伴うので、縄文時代前期の終わり頃(約3000B.C)よりも以前と推定されている。

残存状態 人骨遺物では良好な頭蓋と四肢骨が残る。脳頭蓋は頭蓋底の左側頭骨と後頭骨の一部を、また顔面頭蓋は右上顎骨を破損するが、ほぼ復元されている(写真2bと2c)。右上顎骨では上顎体が、また下顎骨では左頭が破損する。上顎と下顎には全32歯が残る。上肢骨格では上腕骨、橈骨、尺骨が、また下肢骨格でも寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨が残る(写真2d-2i)。上腕骨は左右共に近位端の一部を破損するが、残存状態は良好である。左橈骨は橈骨頭の一部を破損するが、残存状態は良好である。右橈骨では橈骨体の中間位の約2/3が残る。左尺骨はほぼ完全に残る。右尺骨は肘頭の一部を破損するが、残存状態は良好である。寛骨では左右共に腸骨、坐骨、恥骨の一部が残る。大腿骨、脛骨と腓骨は左右共に近位と遠位端の一部を破損するが、残存状態は良好である。人骨遺物は兵庫医科大学の骨格標本箱H83に保管されている。

年齢 人骨遺物には良好な頭蓋と四肢骨が含まれるが、頭蓋では蝶後頭軟骨結合が完全に化骨し、また四肢骨でも近位と遠位の成長骨端線が完全に癒合する。上顎と下顎歯では第3大臼歯が既に崩出している。寛骨には耳状面の一部が残るが、耳状面縁は鋭い。頭蓋縫合では矢状縫合のオベリオン部がほぼ癒着するが、ブレグマ、ベルテックス、ラムダ部は未だ癒着していない。冠状縫合では癒着が左右のプテリオンの一部に見られるが、ブレグマ部と複雑部は未癒着である。人字縫合はラムダ、中、アステリオン部共に未癒着で、また蝶前頭と蝶頭頂縫合も未癒着である。

上顎には全16歯が残る。大臼歯は左第1では頬側の近位と遠位に、また舌側の遠位に針棒大の象牙質を露出し、プロズウェルの3-度の咬耗である。右側は頬側の遠位に針先大の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの2+度の軽い咬耗である。大臼歯は左第2では頬側の近位に2-3㎜大の象牙質を、また頬側の遠位に針棒大の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの3+度の咬耗である。右側は頬側と舌側の遠位に2-3㎜大の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの3+度の咬耗である。大臼歯は左第3では咬合面のエナメル質を軽く咬耗し、また右側も咬合面のエナメル質を均等に咬耗し、プロス゚ウェルの2度である。第3大臼歯では左側の咬耗が右側のそれよりも強い。切歯では咬合面が下唇側より上舌側に僅かに傾斜するが、左犬歯では逆

になる。

下顎にも全16歯が残る。大臼歯は左第1では頬側の遠位、舌側の近位と遠位に2-3㎜大の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの3+度の強い咬耗であるが、右側は頬側の近位と舌側の遠位に針先大の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの2-度の咬耗である。第2大臼歯は左右共に頬側の近位、舌側の近位と遠位に2-3㎜大の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの3+度の咬耗である。大臼歯は左第3では未だ咬耗を始めていないが、右側は舌側の近位より遠位に2-3㎜巾の帯状の象牙質を、また頬側の近位に針棒大の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの3+度の強い咬耗である。犬歯では咬合面が僅かであるが、下唇側より上舌側に傾斜する。歯並びは良好で、また咬合は僅かに鋏子状である。人骨遺物は30歳代の前半の壮年期に相当するであろう。

性別 頭蓋は頭蓋底の一部と右上顎骨を破損するが、ほぼ復元されている(写真2bと2c)。頭蓋は 頑健である。前頭鱗の立ち上がりは強いが、女性に見られるほどの立ち上がりではない。前頭結節 は明瞭である。眉弓と眉間の隆起は強い。眼窩上縁は薄く見えるが、厚く丸い。頭頂結節の膨隆は 強い。項平面は狭いが、強い凹凸である。外後頭隆起は上項線と外後頭稜と共に強い結節稜状である。上項線は乳様突起まで明瞭であるが、内側半は特に強い。下項線もほぼ全長にわたり明瞭である。最上項線は存在しないが、外後頭隆起の上方には帽状腱膜の起始痕と思われる粗な陥凹が存在 する。側頭骨では乳突上稜が鋭く強い稜結節状で、また乳突上溝も明瞭である。乳様突起は外耳孔より先端の長さでは約30mmと、非常に長く太い。

寛骨では腸骨、坐骨、恥骨の一部が残るので、寛骨臼周辺が復元された。腸骨稜は明瞭なS字を描き、また腸骨結節と腸骨結節稜も共に強い。腸骨窩は深い。大坐骨切痕はV字状に開くが、耳状面の上前縁と大坐骨切痕の下後縁を結ぶアークコンポーズは一重の弧を描く。前耳状面溝は痕跡的な形成である。人骨遺物は男性であろう。

病歴 右上腕骨では近位側1/3が内後方に屈曲し、また右尺骨でも尺骨頭が変形する(写真2dと2g)。上腕骨では骨肥厚が近位側1/3の前内側面と外側縁に、また前後軸X線像でも前内側面に海綿質化が認められる(写真2e)。尺骨頭は正常であれば下方を向くが、圧平され、また外下方に向く。右上腕骨と尺骨は生前に同時骨折し、その後、骨折は上腕骨では内後屈状態で、また尺骨頭では圧平、外屈状態で癒合・治癒したものと思われる。2号人骨は生前に転倒し、右手首の内側で接地し、右尺骨頭と上腕骨の近位側1/3を同時骨折したものと思われる。上腕骨は反対側の左側でも強い外弯性を示すが、上腕骨の外弯性の強さも巻き添え骨折に関係したかも知れない。

生前身長 身長は左上腕骨、左橈骨、左尺骨、左右大腿骨、左脛骨、左右腓骨の最大長に、また 左脛骨の全長に基づいた。前腕示数は橈骨最大長の上腕骨自然長に対する比で、また下腿示数は脛骨自然長の大腿骨自然長に対する比である。左上腕骨では最大長(284)と自然長(282)が、左橈骨では最大長(241)が、左尺骨では最大長(255)が計測された。前腕示数は左上肢では85.46%である。 左大腿骨では最大長(423)と自然長(415)が、右大腿骨では最大長(422)と自然長(416)が、左脛骨では最大長(358)と自然長(355)が、左腓骨では最大長(347)が、右腓骨では最大長(348)が計測された。下腿示数は左下肢では85.54%である。前腕示数は左側では長型(80-X)に、また下腿示数も

長型(80-X)に分類される。2号人骨は、上肢では前腕骨が上腕骨よりも長く、また下肢では下腿骨が大腿骨よりも長いタイプに属する。

左上腕骨では最大長が西日本縄文男性のそれに比べ、0.2SD大、また自然長も0.4SD大である。左 橈骨では最大長が1.0SD大、また左尺骨でも1.0SD大である。前腕骨は西日本縄文男性のそれらよ りも長い。左大腿骨では最大長が0.6SD大、また自然長も0.3SD大である。右大腿骨では最大長が 0.4SD大、また自然長も0.2SD大である。左脛骨では最大長が1.2SD大、また自然長も1.1SD大であ る。左腓骨では最大長が1.2SD大、また右腓骨でも0.6SD大である。下腿骨も西日本縄文男性のそ れらよりも長い。2号人骨は西日本縄文男性と比較しても、上肢では前腕骨が上腕骨よりも長く、ま た下肢でも下腿骨が大腿骨よりも長いタイプに属する。

最大長を男性のためのアジイの回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨では153cm、左橈骨では163cm、左尺骨では162cm、大腿骨では左右共に159cm、左脛骨では162cm、また腓骨では左右共に161cmである。最大長を男性のためのピアツンの回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨では153cm、左橈骨では165cm、大腿骨では左右共に161cm、また左脛骨では164cmである。最大長を男性のためのトロッター/グレイサーの回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨では159cm、左橈骨では167cm、左尺骨では166cm、大腿骨では左右共に163cm、また腓骨では左右共に164cmである。自然長を男性のためのトロッター/グレイサーの回帰式に代入し得られる身長は左脛骨では166cmである。2号人骨遺物は高い前腕と下腿示数を、また西日本縄文男性に比べても高い前腕と下腿示数をもつので、身長は上腕骨と大腿骨長に基づくと、フジイ式では153/159cm、ピアツン式では153/161cm、またトロッター/グレイサー式では159/163cmである。生前身長は多分150cm台の後半であろう。

脳頭蓋 脳頭蓋は頭蓋底の一部を破損するが、ほぼ復元された(写真2bと2c)。上面観では最大長(185)、前頭弧(128)、頭頂弧(131)、前頭幅(106)、最大幅(146)、冠状弧(338)、水平周(531)、長幅示数(78.92)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.0SD小、最大幅は0.2SD大、また水平弧も0.1SD大である。長幅示数は0.1SD大で、カールソの中型(75-80)に分類される。上面観輪郭は西日本縄文男性のそれに近い。前頭弧は1.0SD大であるが、頭頂弧は-0.1SD小である。頭頂骨は西日本縄文男性のそれに近いが、前頭鱗は長い。前頭幅は1.7SD大、また冠状弧も2.1SD大である。前頭鱗は西日本縄文男性のそれよりも巾広く、また外側への膨らみも強いが、後眼窩狭窄は弱い。前頭鱗は緩かな曲線の張り出しであるが、後頭鱗は尖る傾向にある。頭頂結節の膨隆は強い。上面観輪郭はゼルジの五角形に分類される。

側面観では最大長(185)、グラベラ・ラムダ長(179)、前頭弧(128)、前頭弦(112)、頭頂弧(131)、頭頂弦(117)、底長(101)、バジオン・ブレグマ高(135)、長高示数(72.97)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.0SD小、グラベラ・ラムダ長は-0.3SD小、また底長も-0.4SD小であるが、バジオン・プレグマ高は0.0SD大である。長高示数も0.2SD大で、中型(70-75)に分類される。側面観輪郭も西日本縄文男性のそれに近い。頭頂弧は-0.1SD小であるが、頭頂弦は0.0SD大である。前頭弧は1.0SD大で、また前頭弦も0.7SD大である。頭頂骨は長さ、弯曲共に西日本縄文男性のそれに近いが、前頭鱗は長く、弯曲も強い。側頭鱗は平坦であるが、側頭窩は僅かに膨隆する。頭頂結

節の膨隆は強い。頭頂骨の後方への落ち込みは強く、また後頭鱗の前方への潜り込みも強い。側面 観輪郭は楕円形に近い。左プテリオンには15X10㎜大の縫合骨が、また右アステリオンには横後頭縫合の遺残 も存在する。

後面観では最大幅(146)、両耳幅(119)、バジオン・プレグマ高(135)、冠状弧(338)、幅高示数(92.47)が計測された。最大幅は西日本縄文男性のそれに比べ、0.2SD大、またバジオン・プレグマ高も0.0SD大である。幅高示数は-0.0SD小であるが、中型(92-98)に分類される。後面観輪郭も西日本縄文男性のそれに近い。頭蓋底幅は-1.3SD小であるが、冠状弧は2.1SD大である。側頭窩は僅かに膨隆する。頭頂結節の膨隆は強い。頭蓋冠は弱いが、切り妻状である。後面観輪郭はハバラーの砲弾状に分類される。外後頭隆起は結節稜状で、僅かに下垂する。右アステリオンには横後頭縫合の遺残が存在する。

顔面頭蓋 顔面頭蓋は右上顎骨を破損するが、ほぼ復元された(写真2b)。正面観では顔高(119)、上顔高(67)、前頭幅(106)、上顔幅(108)、頬骨弓幅(135)、下顎角幅(96)、コルマン全顔面示数(86.67)、コルマン上顔面示数(49.63)が計測された。顔高は西日本縄文男性のそれに比べ、0.6SD大であるが、上顔高は-0.5SD小である。全顔面は西日本縄文男性のそれよりも高いが、上顔面は低い。前頭幅は1.7SD大であるが、上顔幅は-0.2SD小、頬骨弓幅は-1.5SD小、また下顎角幅も-1.6SD小である。コルマン全顔面示数は1.4SD大であるが、中型(85-90)に分類される。上顔面示数は0.7SD大で、広型(45-50)に分類される。顔面は西日本縄文男性のそれよりも全体的に細面である。前頭鱗は巾広く、また後眼窩狭窄も弱い。頬骨弓の張り出しは弱い。頬骨弓より上顎骨への輪郭は深い『くの字』状の切痕で、犬歯窩は浅い。下顎角は狭いが、外翻は強い。歯並びは良好で、また咬合は僅かに鋏子状である。正面観輪郭は長方形に近い。

正面観では上顔高(67)、鼻高(50)、眼窩高(31)、上顔幅(108)、中顔幅(95)、鼻根幅(22)、鼻根弧(27)、鼻幅(31)、眼窩幅(43)、ウィルヒョウ上顔面示数(70.53)、鼻根隆起示数(122.73)、鼻示数(62.0)、眼窩示数(72.09)が計測された。上顔高は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.5SD小、また中顔幅も-1.5SD小である。ウィルヒョウ上顔面示数は1.1SD大で、低型(65-75)に分類される。顔面は西日本縄文男性のそれよりも細面である。鼻高は0.7SD大であるが、眼窩高は-1.3SD小である。上顔幅は-0.2SD小、また眼窩幅も-0.3SD小であるが、鼻根幅は1.3SD大である。中顔幅は-1.5SD小であるが、鼻幅は2.0SD大である。鼻示数は1.5SD大であるが、眼窩示数は-1.2SD小である。鼻部は過低型(58-X)に、また眼窩は低型(X-76)に分類される。鼻腔の外側への拡がりは西日本縄文男性のそれよりも弱いが、鼻根と梨状口は広い。眼窩は西日本縄文男性のそれよりも低い。眼窩は外下がりの長方形である。

側面観では顔高(119)、上顔高(67)、底長(101)、顔長(103)、頭蓋底示数(101.98)が計測された。顔高は西日本縄文男性のそれに比べ、0.6SD大、また顔長も0.2SD大であるが、底長は-0.4SD小、また上顔高も-0.5SD小である。頭蓋底示数は0.5SD大で、中顎型(98-103)に分類される。突顎性は西日本縄文男性のそれよりも強い。上顔では眉間の隆起が、また鼻根と鼻骨の隆起が強い。サジンが凹は深い。中顔では上顎の張り出しが、また歯槽の前突も強い。下顎では角前切痕が殆ど認め

られないが、朴がイ結節の隆起は強い。歯並びは良好で、また咬合は僅かに鋏子状である。

四肢骨格 上肢では上腕骨、橈骨、尺骨が、また下肢でも大腿骨、脛骨、腓骨が良好な状態で残る(写真2d-2i)。左上腕骨は近位端の一部を破損するが、残存状態は良好である。右上腕骨には近位側1/3に骨折痕がある。左橈骨は橈骨頭の一部を破損し、また右橈骨では中間位の約2/3が残るが、残存状態は良好である。左尺骨はほぼ完全に残る。右尺骨頭は骨折により圧平、外屈する。大腿骨、脛骨、腓骨は左右共に近位と遠位端の一部を破損するが、残存状態は良好である。

上腕骨 上腕骨では左側の最大長(284)、自然長(282)、頭垂直径(46)、最小周(61)、頑健示数(21.48)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、0.2SD大、また自然長も0.4SD大であるが、最小周は-1.2SD小で、また頑健示数も-1.5SD小である。上腕骨長は西日本縄文男性のそれに近いが、細い。自然位での内転性は弱いが、外弯性は強い。遠位の内捻転性は弱いが、近位のそれは強い。近位の後屈性と遠位の前屈性は普通である。上腕骨頭では垂直径が0.8SD大であるが、輪郭が縦長である。近位側の1/4では断面輪郭が三角形に近い。前内側面では大結節稜、小結節稜、結節間溝が強い骨隆起を示すが、外側面と後内側面は弱い凸面である。後外側縁は明瞭であるが、後内側縁は不明瞭である。大胸筋の停止は強い粗な凸稜で、また大円筋の停止も強い骨隆起である。結節間溝は巾広く浅く、また広背筋の停止筋線も不明瞭であるが、大胸筋、大円筋、広背筋の停止による骨隆起は著しい。後面では上腕三頭筋外側頭の起始線が鋭い。

中間位では左側の周径(68)、最大径(22)、最小径(19)、断面示数(86.36)が計測された。中間位では周径が西日本縄文男性のそれに比べ、-0.4SD小、また最大径も-1.3SD小であるが、最小径は0.8SD大、また断面示数も2.0SD大である。中間位は通常と異なり、三角筋粗面の外れにあるので、小さい。断面輪郭は楕円形に近い。最大径は前縁と後内側縁の間で、また最小径は前内側面と後外側面の間で計測された。三角筋粗面の隆起は強い。三角筋粗面には前稜、2条の中間稜、後外側稜の4本の縦稜が走る。三角筋粗面は縦稜と縦稜の間では溝状である。後外側稜は上腕三頭筋外側頭の起始であるが、粗な帯状である。前内側面では烏口腕筋の停止痕が明瞭であるが、後外側面では後外側縁と橈骨神経溝が不明瞭である。後面では上腕三頭筋内側頭の起始稜が弱い。

遠位では左右共に最小周(61)が計測された。遠位では最小周が西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.2SD小、また右側でも-1.5SD小である。断面輪郭は円みを帯びた三角形である。前内側面には上腕筋の起始痕が後内側縁の近くに明瞭である。後面では後外側と内側縁が鋭く、上腕三頭筋内側頭の起始面は弱い凸である。

上腕骨顆では左側の幅径(54)、滑車前後径(24)、断面示数(44.4)と右側の幅径(55)、滑車前後径(23)、断面示数(41.82)が計測された。遠位端幅は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.1SD小、また右側でも-0.8SD小である。前後径も左側では-0.8SD小、また右側でも-1.2SD小である。上腕骨顆は左右共に西日本縄文男性のそれらよりも小さい。鈎突窩と肘頭窩の開口はない。

橈骨 橈骨では左側の最大長(241)、機能長(228)、頭幅(21)、最小周(43)、頑健示数(18.86)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、1.0SD大、また機能長も1.2SD大であるが、最小周は-0.6SD小、また頑健示数も-1.1SD小である。橈骨は西日本縄文男性のそれよりも長いが、

細い。外弯性は明瞭である。橈骨頭はほぼ円形である。橈骨粗面の隆起は強く、上腕二頭筋の停止面はほぼ平坦である。回外筋の停止面は平滑である。前縁では浅指屈筋橈骨頭の起始縁が明瞭である。

近位では左側の矢状径(11)、横径(18)、断面示数(61.11)と右側の矢状径(12)、横径(18)、断面示数(66.67)が計測された。矢状径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.2SD小、また右側でも-0.4SD小であるが、横径は左側では0.9SD大、また右側でも0.6SD大である。断面示数は左側では-1.6SD小、また右側でも-0.9SD小である。近位は西日本縄文男性のそれよりも薄く巾広く、扁平である。断面輪郭はほぼ円弧状であるが、前後面は共に凹である。長母指屈筋と長母指外転筋の起始は共に凹面である。骨間縁の張り出しは強いが、後縁は不明瞭である。

中間位では左側の周径(45)、矢状径(12)、横径(16)、断面示数(75.0)が、また遠位では左側の最小周(43)と右側の最小周(44)が計測された。中間位は最大長の二分により決定されたが、近位は中間位よりも約30mm近位に、また遠位は中間位よりも約26mm遠位にある。断面輪郭は中間位では円弧状であるが、前後面は共に軽い凹面である。長母指屈筋の起始面は狭まるが、中間位でも軽い凹面である。長母指外転筋の起始面は中間位では最も広いが、ほぼ平坦である。長母指外転筋と短母指伸筋の起始境界は不明瞭である。円回内筋粗面は狭い紡錘状である。骨間縁は鋭い。遠位では最小周が左側では-0.6SD小、また右側でも-0.5SD小である。断面輪郭はほぼ円弧状である。長母指外転筋と短母指伸筋の走行痕は不明瞭である。骨間縁の括れは強いが、骨間縁は鋭い。

遠位端では左側の幅径(31)が計測された。幅径は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.5SD小である。遠位端は西日本縄文男性のそれよりも狭い。前面には方形回内筋の停止痕が、また後面では背側結節が明瞭である。背側結節内側では長母指伸筋腱溝が明瞭で、また総指伸筋と示指伸筋腱溝も広い。

尺骨 尺骨では左側の最大長(255)、機能長(229)、最小周(39)、頑健示数(17.03)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、1.0SD大、機能長は1.0SD大、また最小周も0.0SD大であるが、頑健示数は-0.6SD小である。尺骨は西日本縄文男性のそれよりも長いが、細い。近位の後弯性は弱いが、遠位の内弯性は普通である。遠位の括れは強い。

肘頭では左側の高径(34)、幅径(30)、前後径(33)、矢状断示数(113.33)、横断示数(110.0)と右側の幅径(29)が計測された。肘頭は巾広いが、低い。鈎状突起の張り出しは普通である。滑車切痕では中間稜が明瞭である。上腕三頭筋の停止面は平滑であるが、尖端には粗な陥凹がある。尺骨粗面では外側稜と内側稜が上腕筋停止をほぼ囲み、紡錘状の陥凹である。回外筋稜は左右共に強く、鋭い稜である。左側では回外筋稜が橈骨切痕後稜に始まり、後中間稜と骨間縁の両方に続くが、右側では回外筋稜が橈骨切痕後稜に始まり、後中間稜に続く。左側では尺骨粗面外側稜より骨間縁への流れが非常に弱いが、右側では明瞭である。

中間位では左側の矢状径(14)、横径(16)、断面示数(87.5)と右側の矢状径(14)、横径(15)、断面示数(93.33)が、遠位では左側の最小周(39)と右側の最小周(36)が、遠位端では左側の最大径(16)が計測された。中間位は一般に骨間縁の最突部と定められているので、ここでは最大長の二分

による真の中間位と比較された。骨間縁の最突部は真の中間位の約16mm近位にある。矢状径は西日本縄文男性のそれに比べ、左右共に-0.1SD小、横径は左側では-0.5SD小、また右側でも-1.8SD小であるが、断面示数は左側では0.2SD大、また右側でも0.9SD大である。中間位は西日本縄文男性のそれよりも狭い。断面輪郭はほぼ三角形である。前面は深指屈筋の起始であるが、弱い凹である。後面には中間稜が左右共に目立つ。中間稜は近位側の1/4に始まり、遠位端まで明瞭である。後外側部では長母指外転筋、長母指伸筋、示指伸筋の起始境界が明瞭である。長母指外転筋の起始はほぼ中間位に終わる。長母指外転筋の起始面は狭い。長母指伸筋の起始面は近位側の約1/3に始まり、遠位側の約1/3に終わるが、細長い指圧痕状である。示指伸筋の起始面は細長い溝状である。骨間縁は左右共に肥厚し、鈍縁である。尺側手根伸筋面は平坦である。遠位では最小周が左側では0.0SD大であるが、右側では-1.3SD小である。遠位では断面輪郭が丸みを帯びた三角形である。括れと骨間縁は明瞭である。方形回内筋の起始稜は左右共に強い縦稜結節である。方形回内筋の起始面の陥凹は深い。尺骨頭では最大径が-0.8SD小である。尺骨頭はほぼ半円形で、茎状突起は太く短い。

大腿骨 大腿骨では左側の最大長(423)、自然長(415)、遠位周(84)、頑健示数(20.24)と右側の最大長(422)、自然長(416)、遠位周(86)、頑健示数(20.67)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では0.6SD大、また右側でも0.4SD大、また自然長も左側では0.3SD大、また右側でも0.2SD大であるが、遠位周は左側では-0.6SD小、また右側でも-0.3SD小である。頑健示数は左側では-1.2SD小、また右側でも-0.5SD小である。大腿骨は西日本縄文男性の長さに近いが、細い。大腿骨はほぼ真っ直ぐに伸び、また内転性、前弯性、内捻転性も普通である。

近位端では左側の幅径(78)と右側の幅径(75)が、また大腿骨頭では左側の横径(45)と右側の周径(141)、垂直径(44)、横径(44)、断面示数(100.0)が計測された。近位端幅は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.5SD小、また右側でも-2.1SD小である。近位端は西日本縄文男性のそれよりも狭い。頭周は右側では-0.6SD小、垂直径は-0.7SD小、また横径も-0.5SD小であるが、断面示数は0.6SD大である。大腿骨頭は西日本縄文男性のそれよりも小さいが、断面輪郭はほぼ円形である。骨頚は短いが、屈曲は普通である。頚断面輪郭は前後に薄い卵円形である。大転子は大きく、また小転子も太く長い。転子間線は途切れることなく、粗線の内側唇に続く。

近位側の1/3では左側の矢状径(25)、横径(28)、断面示数(89.29)と右側の矢状径(25)、横径(29)、断面示数(86.21)が計測された。矢状径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では0.2SD大、また右側でも0.5SD大であるが、横径は左側では-1.0SD小、また右側でも-0.5SD小である。断面示数は左側では1.3SD大、また右側でも1.0SD大である。断面輪郭は卵円形で、左右共に中型(85-100)に分類される。外側面の張り出しは明瞭である。大殿筋粗面は巾広く、底にはアンカリング小陥凹が形成される。粗線では内外側唇が稜状で、また中間面が弱い凹である。

中間位では左側の周径(82)、矢状径(28)、横径(24)、断面示数(116.67)と右側の周径(84)、矢状径(28)、横径(24)、断面示数(116.67)が、また遠位では左側の周径(84)、矢状径(27)、横径(23)、断面示数(117.39)と右側の周径(86)、矢状径(28)、横径(25)、断面示数(112.0)が計測された。中間位は最大長の二分により決定された。断面示数は左右共に厚型(100-X)に分類される。

断面輪郭は前後に長い栗の実状である。後内側面はほぼ平坦であるが、後外側面は凹面である。前面は凸面である。粗線では内側唇が外側唇よりも強く鋭く、また中間面が凹である。遠位は粗線の最突部により決定されたが、中間位よりも左側では約19㎜遠位に、また右側では約32㎜遠位にある。矢状径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.3SD小、また右側でも-0.8SD小、横径は左側では-1.5SD小、また右側でも-0.4SD小である。断面示数は左側では0.4SD大であるが、右側では-0.4SD小である。断面輪郭は前後に長い栗の実状で、厚型(100-X)である。遠位でも後内側面が平坦で、後外側面が凹である。粗線では内側唇が外側唇よりも強く、また中間面も弱い凹である。

大腿骨顆では左側の幅径(81)、前後径(58)、断面示数(71.61)と右側の幅径(79)、前後径(60)、断面示数(75.95)が計測された。遠位端幅は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では0.4SD大であるが、右側では-0.2SD小である。前後径は左側では-0.6SD小であるが、右側では0.1SD大である。断面示数は左側では-1.3SD小であるが、右側では0.0SDである。遠位端は西日本縄文男性のそれに近い。断面輪郭は内方に傾斜の台形である。膝窩面では大内転筋の停止が結節状である。

脛骨 脛骨では左側の最大長(358)、機能長(355)、最小周(78)、頑健示数(21.97)が、脛骨顆では右側の幅径(72)が、脛骨粗面位では左側の矢状径(41)、横径(39)、断面示数(95.12)と右側の矢状径(39)、横径(33)、断面示数(84.62)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、1.1SD大、機能長は1.2SD大、また最小周も0.2SD大であるが、頑健示数は-0.8SD小である。脛骨は西日本縄文男性のそれよりも長いが、細い。脛骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、前弯性は強い。脛骨では前縁の骨肥厚が左右共に見られる。近位端幅は-0.4SD小である。近位端は西日本縄文男性のそれよりも狭い。脛骨粗面位では矢状径が左側では-0.5SD小、また右側でも-0.8SD小である。横径は左側では0.3SD大であるが、右側では-0.9SD小である。脛骨顆には内捻転性が僅かに認められる。断面輪郭は外方に傾斜の三角形である。脛骨粗面は双峰性の隆起である。

近位では左側の周径(93)、矢状径(35)、横径(23)、断面示数(65.71)と右側の周径(95)、矢状径(37)、横径(23)、断面示数(62.16)が計測された。近位は栄養孔の位置により決定されるが、左側では最大長の二分による中間位の約47mm近位にある。周径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では0.0SD大、また右側でも0.3SD大、横径は左側では0.5SD大、また右側でも0.3SD大である。矢状径は左側では-0.2SD小であるが、右側では0.4SD大である。断面示数は左側では0.6SD大であるが、右側では-0.1SD小である。近位は西日本縄文男性のそれの大きさに近い。断面輪郭は左右共に前後に長い扁平な菱形であるが、中型(63-70)に分類される。栄養孔は後外側部のほぼ中間にある。前外側面は弱い凹である。後面は強い山形である。垂直稜は左右共に鋭く、またヒラメ筋線は強い稜である。後外側部には中間線がさらに形成されるので、後脛骨筋の起始面は弱い山形である。長指屈筋の起始面は平坦である。前脛骨筋の起始面は浅い凹である。

中間位では左側の周径(88)、矢状径(33)、横径(21)、断面示数(63.64)が計測された。中間位は最大長の二分により決定された。周径は西日本縄文男性のそれに比べ、1.0SD大、矢状径は0.4SD大、横径は0.8SD大、また断面示数も0.4SD大である。中間位は西日本縄文男性のそれよりも大きい。断面輪郭は前後に長い扁平な菱形であるが、扁平型に近い中型(63-70)に分類される。前外側

面は弱い凹で、また後面も山形である。垂直稜は中間位にも存在するが、後外側部の中間線は既に 消失する。後脛骨筋と長指伸筋の起始面はほぼ平坦である。前脛骨筋の起始面は浅い凹である。

遠位では左側の最小周(78)と右側の最小周(76)が、遠位端では左側の前後径(35)が計測された。 前縁の骨肥厚は遠位には及んでいない。周径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では0.2SD大で あるが、右側では-0.4SD小である。遠位は西日本縄文男性のそれらの大きさに近い。断面輪郭は丸 みを帯びた三角形である。遠位端では前後径が-0.9SD小である。遠位端では距腿関節の外旋性が殆 ど認められない。断面輪郭はほぼ五角形である。腓骨切痕は浅い。後面では後脛骨筋腱の内果溝が 明瞭である。

腓骨 腓骨では左側の最大長(347)、頑健示数(9.51)と右側の最大長(348)、頑健示数(9.48)が、腓骨頭では右側の幅径(26)が、腓骨頚では左右共に最小周(33)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では1.2SD大、また右側でも0.6SD大であるが、最小周は左右共に-1.6SD小である。頑健示数も左側では-2.4SD小、また右側でも-1.9SD小である。腓骨は西日本縄文男性のそれよりも長いが、腓骨頚は細い。腓骨はほぼ真っ直ぐに伸びる。腓骨頚では断面輪郭がほぼ菱形である。内側面はない。後内側部は右側では既にあるが、左側にはない。後外側部は凸面で、ヒラメ筋の起始線も明瞭である。外側面は平坦である。

中間位では左側の周径(43)、最大径(15)、最小径(11)、断面示数(73.33)と右側の周径(44)、最大径(15)、最小径(11)、断面示数(73.33)が計測された。中間位は最大長の二分により決定された。周径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.5SD小、また右側でも-1.9SD小、最大径は左側では-1.5SD小、また右側でも-2.0SD小、また最小径も左側では-0.5SD小、また右側でも-0.4SD小である。中間位は西日本縄文男性のそれよりも細い。最大径は前縁と後外側縁の間に、また最小径は外側面と後内側稜の間にある。断面輪郭は台形に近い四角形である。内側面は巾広く平坦であるが、前内側を向く。後内側部は中間位でも存在するが、後脛骨筋の起始面はほぼ平坦である。後内側部には近位側の1/4に斜走稜が左右共に見られるが、弱い。後脛骨筋の起始面は近位側1/4では斜走稜により凸凹である。後外側部には長母指屈筋が起始するが、弱い凸面である。外側面には短腓骨筋が起始するが、強い褶曲面である。

遠位側の1/4では左右共に最小周(34)が、遠位端では左側の前後径(25)と右側の幅径(18)、前後径(23)、断面示数(127.78)が計測された。遠位では周径が西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.6SD小、また右側でも-1.5SD小である。遠位は西日本縄文男性のそれよりも細い。断面輪郭は扁平な歪な菱形である。内側面は狭いが、存在する。後内側部は既に消失している。後外側部と外側面も弱い凸である。遠位端では断面輪郭がほぼ三角形である。外果関節面は『くの字』状である。外果窩は深い。

2b号人骨

出自 人骨遺物は平成3年9月に、2号人骨と共に2号土壙墓より出土した。2号人骨は不整方形の土壙墓に側臥屈位で埋葬されていたが、2b号人骨は2号人骨のほぼ下半身の上に存在した。2号人骨は混貝土層より掘り込まれ、また里木I式土器を伴うので、縄文時代前期の終わり頃(約3000B.C)よ

りも以前と推定されているが、2b号人骨は2号人骨の埋葬時に集骨されたらしい(写真2a)。人骨遺物は縄文時代前期の終わり頃よりも、また2号人骨の埋葬時よりも以前と推定されている。

残存状態 人骨遺物は約300個よりなる焼骨、または火葬骨である。焼骨の殆どは頭部、上肢、下肢の骨片である。頭蓋骨は300個中の約50個を、また四肢骨は残りの250個余りを占める。頭蓋骨では下顎骨、頬骨、前頭骨、側頭骨の一部が、上肢骨では鎖骨、肩甲骨、尺骨、手根骨の一部が、また下肢骨では大腿骨、脛骨、腓骨、足根骨が確認された。2号人骨に存在し、また2b人骨にも存在する頭蓋骨は側頭骨では側頭鱗、左頬骨では前頭突起、右頬骨では前頭突起、下顎骨では下顎体の左側の半分、また四肢骨は左尺骨では肘頭、右尺骨では尺骨頭、右腓骨では外果である。同時に、側頭鱗、頬骨前頭突起、下顎体の左半分、尺骨肘頭、尺骨頭、腓骨外果は約300個よりなる2b人骨ではそれら以外には確認されない。頬骨前頭突起、下顎体、尺骨肘頭、尺骨頭、腓骨外果などは2号人骨のそれらに比べると小さく、2b号人骨と2号人骨とが別個体であることに相違ないが、1個体に焼骨のすべてが由来するかは明らかでない。2b号人骨は2号人骨と共に兵庫医科大学の骨格標本箱H83に保管されている。

年齢 下顎歯槽には3本の大臼歯の釘植痕が残る。成長骨端線は橈骨頭、尺骨肘頭、尺骨頭には、また腓骨外果にも存在しない。2b人骨は20歳以降の成人である。

3号人骨

出自 人骨遺物は平成3年9月に、船倉縄文貝塚の3号土壙墓より出土した。3号土壙墓は長楕円形で、埋葬位は背中を下にした、仰臥屈位である。股関節と膝関節は強い屈曲で、また左肘関節も強い屈曲であるが、右肘関節の屈曲は弱い。頚部の前屈は強い(写真3a)。船倉貝塚調査区では旧耕作土層、撹乱土層、貝殻土層、混貝土層、褐色土層、基盤土層の6層が識別されている。3号土壙墓は混貝土層により被われるが、貝殻の混入はない。3号土壙墓は伴出土器をもたないが、褐色土層より掘り込まれるので、縄文時代前期の終わり頃(約3000B.C)よりも以前と推定されている。

残存状態 人骨遺物には良好な頭蓋と四肢骨が残る。脳頭蓋は眉間を、また左側の側頭窩と項平面の一部を破損するが、ほぼ復元された。顔面頭蓋も鼻根と左上顎骨の一部を破損するが、ほぼ復元された(写真3bと3c)。上顎には左側に7歯が、また右側には全8歯が残る。左上顎では第2と第3大臼歯のための歯槽が破損するが、第2と第3大臼歯は残る。第1大臼歯は歯槽も破損するが、存在もしない。下顎には左側に全8歯が、また右側には6歯が残る。下顎歯槽には右側の中切歯と側切歯のための歯根痕が残るが、中切歯と側切歯はない。中切歯と側切歯は生前に離脱したのではなく、紛失したものと思われる。椎骨では5個の頚椎が残る。上肢骨格では上腕骨、橈骨、尺骨、手根骨が、また下肢骨格では寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨が残る(写真3d-3h)。手根骨では右側の有頭骨が確認された。上腕骨、橈骨、尺骨は左右共に近位と遠位端を破損するが、残存状態は良好である。寛骨には寛骨臼の一部が左右共に残る。大腿骨、脛骨、腓骨は左右共に近位と遠位端の一部を破損するが、残存状態は良好である。人骨遺物は兵庫医科大学の骨格標本箱H86に保管されている。

年齢 人骨遺物には良好な頭蓋と四肢骨が残る。頭蓋では蝶後頭軟骨結合が完全に化骨し、また 上下顎でも第3大臼歯が完全に萌出・咬合する。上顎には左側に7歯が、また右側には全8歯が残 る。上顎には第1大臼歯がないが、第2と第3大臼歯が残る。大臼歯は右第1では全咬合面の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの5+度の強い咬耗である。第2大臼歯も左右共に全咬合面の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの5+度の強い咬耗である。大臼歯は左第3では咬合面の近位半の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの5度の咬耗であるが、右側では頬側の近位の象牙質を露出し、3度の咬耗である。大臼歯はいずれも強い咬耗である。前歯の咬耗もそれ以上に強いが、咬耗面はほぼ水平である。

下顎には左側に全8歯が、また右側にも6歯が残る。下顎右側では中切歯と側切歯が紛失する。大臼歯は左第1では舌側の近位、頬側の近位と遠位、舌側の遠位に、馬蹄形の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの4+度の強い咬耗である。右側では頬側と舌側の近位に棒状の象牙質を、また遠位側の頬側、中間、舌側に針棒大の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの4度の咬耗である。大臼歯は左第2ではエナメル質が咬合面の中央に残るが、輪状の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの5度の強い咬耗である。右側でもエナメル質が咬合面の中間位に線状に残るが、ほぼU字状の象牙質を露出し、プロス゚ウェルの5度の強い咬耗である。第3大臼歯は左右共に全咬合面のエナメル質を咬耗し、プロス゚ウェルの2度である。大臼歯は第3を除き、いずれも強い咬耗である。前歯はそれ以上に強い咬耗であるが、咬耗面はほぼ水平である。歯並びは良好で、また咬合は鉗子状である。人骨遺物は40歳代、あるいはそれ以降の熟年期に相当するであろう。

性別 頭蓋は眉間、鼻根と左上顎骨の一部を、また左側の側頭窩と項平面の一部を破損するが、 はぼ復元されている(写真3bと3c)。頭蓋では前頭鱗の立ち上がりが強いが、女性に見られるほどの 立ち上がりではない。前頭結節は左右共に明瞭である。眉間は破損するが、眉弓の隆起は強い。眼 窩上縁は厚く丸い。頭頂結節の膨隆は弱い。項平面は広く、膨隆するが、凹凸は強い。外後頭隆起 は結節状である。上項線は乳様突起まで明瞭で、内側半は特に強い。下項線もほぼ全長にわたり明 瞭である。最上項線は形成されないが、外後頭隆起の上方には帽状腱膜の起始痕と思われる粗面が 存在する。側頭骨では乳突上稜が強い稜結節状で、乳突上溝も明瞭である。乳様突起は外耳孔より 先端の長さでは約29mmと、非常に長く太い。人骨遺物は多分男性であろう。

生前身長 上肢では上腕骨、橈骨、尺骨が近位と遠位端を、また下肢でも大腿骨、脛骨、腓骨が近位と遠位端を破損するので、正確な身長は推定できない。身長推定は左側の全四肢骨体と2号人骨のそれらとの比較法に基づいた。

2号人骨は左上腕骨では最大長(284)、左橈骨では最大長(241)、左尺骨では最大長(255)、左大腿骨では最大長(423)、左脛骨では最大長(358)、左腓骨では最大長(347)が計測されている。左上腕骨は大結節稜より鈎突窩までの長さでは2号人骨のそれよりも僅かに大きい。左橈骨は橈骨粗面より体遠位までの長さでは2号人骨のそれよりも僅かに大きい。左尺骨は鈎状突起より体遠位までの長さでは2号人骨のそれにほぼ等しい。左大腿骨は小転子より膝窩面までの長さでは2号人骨のそれよりも、約20m程大きい。左脛骨は脛骨粗面より体遠位までの長さでは2号人骨のそれよりも、約20m程大きい。左腓骨も体近位より体遠位までの長さでは2号人骨のそれよりも、約20m程大きい。

推定最大長を男性のための7ジイの回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨、橈骨、尺骨が2号人骨のそれらとほぼ等しいので、約153-163 cmで、また左大腿骨、脛骨、腓骨が2号人骨のそれらよりも

約20mm程長いので、約164-167 cmである。推定最大長を男性のためのピアソンの回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨と橈骨が2号人骨のそれらとほぼ等しいので、約153/165 cmで、また左大腿骨と脛骨が2号人骨のそれらよりも約20mm程長いので、約165/168 cmである。推定最大長を男性のためのトロッター/グレイサーの回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨、橈骨、尺骨が2号人骨のそれらとほぼ等しいので、約159-167 cmで、また左大腿骨と腓骨が2号人骨のそれらよりも約20mm程長いので、約168/169 cmである。推定身長は不正確であるが、フジイ式では約153-167 cm、ピアソン式では約153-168 cm、またトロッター/グレイサー式では約159-169 cmである。生前身長は多分160 cm前後であろう。2号人骨は西日本縄文男性のそれよりも大きい前腕と下腿示数をもち、上肢では前腕骨が上腕骨よりも長く、また下肢でも下腿骨が大腿骨よりも長いタイプであったが、同様に、3号人骨も前腕骨が上腕骨よりも長く、また下腿骨が大腿骨よりも長いタイプであったが、同様に、3号人骨も前腕骨が上腕骨よりも長く、また下腿骨が大腿骨よりも長いタイプであったが、同様に、3号人骨も前腕骨が上腕骨よりも長く、また下腿骨が大腿骨よりも長いタイプに相当するものと思われる。

脳頭蓋 脳頭蓋は眉間を、また左側の側頭窩と項平面の一部を破損するが、ほぼ復元されている (写真3bと3c)。上面観では頭頂弧(129)、後頭弧(124)、前頭幅(95)、最大幅(142)、冠状弧(336) が計測された。前頭幅は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.4SD小、また最大幅も-0.9SD小である。 頭頂弧は-0.4SD小であるが、後頭弧は0.6SD大、また冠状弧も1.8SD大である。 前頭幅は西日本縄 文男性のそれに近いが、最大幅は狭い。 頭頂骨も西日本縄文男性のそれに近いが、後頭骨は長い。 前頭鱗では強い後眼窩狭窄であるが、外側へは強く膨らむ。 前頭鱗は緩かな曲線の張り出しであるが、後頭鱗は尖る傾向にある。 頭頂結節の膨隆は弱い。上面観輪郭はせいの卵円形に分類される。

側面観では頭頂弧(129)、頭頂弦(116)、後頭弧(124)、後頭弦(106)、バジオン・プレグマ高(145)が計測された。バジオン・プレグマ高は西日本縄文男性のそれに比べ、2.1SD大である。頭頂弧は-0.4SD小、また頭頂弦も-0.2SD小であるが、後頭弧は0.6SD大、また後頭弦も1.3SD大である。頭高は西日本縄文男性のそれよりも大きい。頭頂骨は長さと弯曲では西日本縄文男性のそれに近いが、後頭鱗は長く高い。側頭鱗は平坦であるが、側頭窩は僅かに膨隆する。頭頂結節の膨隆は弱い。頭頂骨の後方への落ち込みは強く、また後頭鱗の前方への潜り込みも強い。側面観輪郭は楕円形に近い。右アステリオンには15mm大の三角形の縫合骨が、また14mm長の横後頭縫合の遺残も存在する。

後面観では最大幅(142)、両耳幅(121)、バジオン・ブレグマ高(145)、冠状弧(336)、幅高示数(102.11)が計測された。最大幅は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.9SD小であるが、バジオン・プレグマ高は2.1SD大である。幅高示数は2.0SD大で、高型(98-X)に分類される。後面観輪郭は西日本縄文男性のそれよりも高く狭い。頭蓋底幅は-0.9SD小であるが、冠状弧は1.8SD大である。側頭窩は僅かに膨隆する。頭頂結節の膨隆も弱い。頭蓋冠は弓状で、後面観輪郭はハバラ-の家屋状に分類される。人字縫合には多くの縫合骨が形成され、また右アステリオンには14㎜長の横後頭縫合の遺残も見られる。

顔面頭蓋 顔面頭蓋は鼻根と左上顎骨の一部を破損するが、ほぼ復元された(写真3 b)。正面観では前頭幅(95)、上顔幅(103)、頬骨弓幅(136)、中顔幅(101)、鼻幅(24)、下顎角幅(99)が、また側面観では顔長(95)が計測された。前頭幅は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.4SD小、上顔幅は-2.0SD小、頬骨弓幅は-1.3SD小、また下顎角幅も-1.1SD小である。顔面は西日本縄文男性のそれ

よりも狭い。前頭鱗では後眼窩狭窄が強い。頬骨弓の張り出しは強い。正面観輪郭はほぼ卵円形である。眼窩は外下がりであるが、方形である。中顔幅は-0.5SD小、また鼻幅も-1.6SD小である。鼻腔の外側への拡がりは弱く、また梨状口も狭い。頬骨弓より上顎骨への輪郭は深い『くの字』状の切痕で、犬歯窩は浅い。下顎角は狭いが、外翻は左右で異なり、右側が左側よりも強い。歯並びは良好で、また咬合は鉗子状である。顔長は-1.8SD小である。中顔では上顎の張り出しが、また歯槽の突顎性も弱い。下顎では角前切痕は殆ど認められない。

四肢骨格 上肢では上腕骨、橈骨、尺骨が、また下肢では大腿骨、脛骨、腓骨が左右共に近位と遠位端を破損するが、良好な状態で残る(写真3d-3h)。

上腕骨 上腕骨では左側の最小周(62)と右側の最小周(63)が計測された。外弯性は僅かに認められる。近位の後屈性と遠位の前屈性はほぼ普通である。近位側の1/4では断面輪郭が三角形に近い。前内側面では大結節稜、小結節稜、結節間溝が骨隆起を示すが、外側と後内側面は弱い凸面である。後外側と後内側縁は共に明瞭である。大胸筋停止は強い粗な凸稜である。大円筋の停止はアンカリング陥凹である。結節間溝は巾広く浅く、また広背筋の停止筋線も不明瞭であるが、大胸筋、大円筋、広背筋の停止による骨隆起は明瞭である。後面では上腕三頭筋外側頭の起始線が不明瞭である。三角筋粗面位では断面輪郭が不整形な台形である。三角筋粗面は弱い隆起である。三角筋粗面では前稜と後外側稜が明瞭である。後外側稜は粗な帯状である。前内側面では烏口腕筋の停止痕が明瞭である。後外側面では後外側縁と橈骨神経溝が不明瞭である。後面では上腕三頭筋内側頭の起始稜が弱い。遠位では最小周が西日本縄文男性のそれに比べ、左右共に-0.9SD小である。遠位は西日本縄文男性のそれよりも細い。断面輪郭は円みを帯びた三角形である。後面では後外側縁が鋭いが、後内側縁は丸い。上腕三頭筋内側頭の起始は弱い凸面である。

橈骨 橈骨は近位では左側の矢状径(11)、横径(16)、断面示数(75.0)が、また遠位では左側の最小周(43)が計測された。外弯性は明瞭である。橈骨粗面の隆起は強い。上腕二頭筋の停止面はほぼ平坦である。回外筋の停止面は巾広く、また中間線も明瞭である。前縁では浅指屈筋橈骨頭の起始縁が明瞭である。近位では矢状径が西日本縄文男性のそれと等しい0.0SDであるが、横径は-0.7SD小である。断面示数は0.6SD大である。近位は狭い。断面輪郭は左右共にほぼ円弧状であるが、前後面が共に凹面である。長母指屈筋と長母指外転筋の起始面は共に凹面である。骨間縁の張り出しは弱い。前縁と後縁は共に丸い。外側面では円回内筋の停止筋線が斜走する。円回内筋粗面位では断面輪郭が円弧状であるが、前後面は未だに軽い凹面である。長母指屈筋の起始面は狭まるが、長母指外転筋の起始面は最も巾広く、褶曲し、また後縁を不明瞭にしている。長母指外転筋と短母指伸筋の起始境界は明瞭である。円回内筋粗面は狭い紡錘状である。骨間縁は鋭い。遠位では最小周が-0.6SD小である。遠位は細い。断面輪郭はほぼ円弧状である。骨間縁の括れは弱いが、鋭い。後面では長母指外転筋と短母指伸筋の走行痕が明瞭である。

尺骨 尺骨は中間位では左側の矢状径(14)、横径(15)、断面示数(93.33)と右側の矢状径(14)、横径(12)、断面示数(116.67)が、また遠位では左側の最小周(34)と右側の最小周(35)が計測された。近位の後弯性と遠位の内弯性はほぼ普通である。尺骨粗面では外側稜と内側稜が上腕筋の停止

面をほぼ囲み、縦長の三角形の陥凹である。回外筋稜は左右共に強く、鋭い稜である。回外筋稜は 橈骨切痕後稜に始まり、後中間稜と骨間縁の両方に続く。尺骨粗面外側稜より骨間縁への流れは左 右共に弱いが、明瞭である。中間位は骨間縁の張り出しにより決定されたが、矢状径は西日本縄文 男性のそれに比べ、左右共に-0.1SD小であるが、横径は左側では-1.2SD小、右側では-4.8SD小で ある。断面示数は左側では0.8SD大であるが、右側では3.3SD大である。中間位は左右共に細いが、 右横径は極端である。断面輪郭は左側ではほぼ三角形であるが、右側では特異な栗の実状である。 後面では中間稜が左右共に明瞭である。中間稜は近位側の1/4に始まり、遠位端まで明瞭である。深 指屈筋の起始面は左側ではほぼ平坦であるが、右側は狭い凸面である。後外側部では長母指外転筋 と長母指伸筋の起始境界が明瞭であるが、長母指伸筋と示指伸筋の起始境界は不明瞭である。長母 指外転筋の起始面は広い指状圧痕である。長母指伸筋の起始面はほぼ中間位に始まり、深い指状圧 痕である。示指伸筋の起始面は左右共に溝状である。骨間縁は左右共に鈍縁である。遠位では最小 周が左側では-2.4SD小、また右側でも-1.7SD小である。遠位も細い。断面輪郭は円形に近い。括れ は強く、また骨間縁も明瞭である。方形回内筋の起始稜は左右共に弱い。方形回内筋の起始面は粗 である。

大腿骨 大腿骨は近位では左側の矢状径(23)、横径(31)、断面示数(74.19)と右側の矢状径 (26)、横径(29)、断面示数(89.66)が、また遠位では左側の周径(83)、矢状径(29)、横径(24)、 断面示数(120.83)と右側の周径(88)、矢状径(30)、横径(24)、断面示数(125.0)が計測された。大 腿骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、内捻転性と前弯性は強い。近位では矢状径が西日本縄文男性のそ れに比べ、左側では-0.8SD小であるが、右側は1.4SD大である。横径は左側では0.6SD大であるが、 右側は-0.5SD小である。断面示数は左側では-1.5SD小であるが、右側は1.5SD大である。断面示数 は左側では過扁平型(X-75)に分類されるが、右側は中型(85-100)に分類される。断面輪郭は左右 共に楕円形であるが、右側では粗線外側唇が強い稜状である。外側面の張り出しは左右共に強いが、 左側では前面が軽く陥凹する。大殿筋粗面は左右共に溝状ではないが、粗線外側唇は強い稜で、ま た内側唇も明瞭である。粗線中間面は左右共に巾広く、平坦である。遠位は粗線の最凸部により決 定されたが、最大長の二分による中間位に近い。周径は左側では-0.8SD小であるが、右側は0.5SD 大である。矢状径は左側では0.0SD大、また右側も0.5SD大であるが、横径は左側では-0.9SD小、 また右側でも-1.2SD小である。断面示数は左側では0.9SD大、また右側も1.5SD大である。断面示 数は左右共に西日本縄文男性のそれよりも厚型(100-X)に分類される。断面輪郭は前後に長い栗の 実状である。後内側面は左側では平坦であるが、右側は凹面である。後外側面は左右共に凹面であ る。前面は弱い凸面である。粗線は左側では狭く、また中間面も凸であるが、右側では内側唇と外 側唇が強い稜で、また中間面も凹である。

脛骨 脛骨は粗面位では左側の矢状径(41)、横径(38)、断面示数(92.68)と右側の矢状径(42)が、近位では左側の周径(87)、矢状径(35)、横径(23)、断面示数(65.71)と右側の周径(90)、矢状径(34)、横径(23)、断面示数(67.65)が、遠位では左側の最小周(70)と右側の最小周(72)が計測された。脛骨はほぼ真っ直ぐに伸び、また前弯性も普通である。粗面位では矢状径が西日本縄文男性

のそれに比べ、左側では-0.5SD小であるが、横径は0.1SD大、また断面示数も0.6SD大である。断面輪郭は内外に扁平な三角形である。脛骨粗面は単峰性の隆起である。近位では周径が左側では-1.1SD小、また右側でも-0.5SD小、矢状径は左側では-0.2SD小、また右側でも-0.7SD小である。横径は左側では0.5SD大、また右側でも0.3SD大、断面示数は左側では0.6SD大、また右側でも1.2SD大である。近位は小さいが、僅かに広い。断面輪郭は左右共に前後に長く、内外に扁平な三角形であるが、中型(63-70)に分類される。栄養孔は左右共に後外側部の中間稜の近くにある。前内側面は弱い凸であるが、前外側面は強い褶曲である。後面は凸面である。ヒラメ筋線は左側では強い凸稜状であるが、右側では粗線状である。垂直稜は左側では線状であるが、右側は強い稜である。後脛骨筋の起始面は弱い凸であるが、長指伸筋の起始面はほぼ平坦である。前脛骨筋の起始は深い凹面である。遠位では周径が左側では-1.9SD小、また右側でも-1.2SD小である。遠位は左右共に細い。断面輪郭は左右共に内外に扁平な三角形である。

腓骨 腓骨は近位では左側の最小周(37)と右側の最小周(35)が、また遠位では左右共に最小周(39)が計測された。腓骨は左右共に僅かに外弯する。腓骨頚では最小周が西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-0.5SD小、また右側でも-1.0SD小である。腓骨頚は左右共に細い。断面輪郭は左側では卵円形であるが、右側はほぼ菱形である。内側面は左右共にない。後内側部は左側にはないが、右側には存在する。後外側部は左側では強い凸面であるが、右側では弱い。ヒラメ筋の起始線は左側ではアン加ンが陥凹である。外側面は左右共にあり、弱い凸面である。中間位は最大長の二分により決定されるので、正確ではないが、断面輪郭は左右共にほぼレル状である。最大径は前縁と後外側縁の間に、また最小径は外側面と後内側稜の間にある。内側面は左右共に非常に狭く、しかも内側を向く。後内側部は深い凹面である。後内側部には通常、近位側の1/4に斜走稜があるが、斜走稜は左側のみに認められる。後外側部は左右共にほぼ平坦である。外側面は強い褶曲である。遠位では最小周が左側では-0.3SD小、また右側でも-0.4SD小である。遠位も細い。断面輪郭は内外に扁平な半楕円形である。後内側部は既に存在しない。後外側部と外側面は弱い凸面である。

おわりに

船倉貝塚は平成3年7月、羽島・四十瀬線の都市計画道路建設工事の際に発見された。考古学調査により多量の縄文時代の考古学遺物と共に、9月には4例の人骨が出土した。以下、1号人骨、2号人骨、2号人骨、3号人骨とそれぞれに命名されたが、1号人骨は1号土壙墓より、2号と2b号人骨は2号土壙墓より、3号人骨は3号土壙墓より出土した。考古学調査では旧耕作土層、撹乱土層、貝殻土層、混貝土層、褐色土層、基盤土層の6層が識別されたが、1号土壙墓は貝殻土層よりの、2号土壙墓は混貝土層よりの、3号土壙墓は褐色土層よりの掘り込みであった。1号土壙墓は3基中では最も新しいが、里木I式土器を伴うので、縄文時代前期の終わり頃(約3000B.C)と推定されている。3号土壙墓は最も古い褐色土層よりの掘り込みで、また貝殻の混入と伴出土器もない。混貝土層と褐色土層の堆積形成にどのくらいの期間を要するかであるが、3号土壙墓は、あるいは3号人骨は縄文時代前期の何処まで遡れるかが次の課題である(1)。

1号土壙墓は不整円形で、1号女性は仰臥位の埋葬姿勢である。股関節は伸展しているが、膝関節

と肘関節の状態は不明。頚部の前屈は強い。2号土壙墓は不整方形で、2号男性は左側臥屈位の埋葬姿勢である。股関節と膝関節は強く屈するが、右肘関節の屈曲は弱い。頚部の前屈は強い。3号土壙墓は長楕円形で、3号男性は仰臥屈位の埋葬姿勢である。股関節と膝関節の屈曲は強い。左肘関節は強く屈するが、右側は弱い。頚部の前屈は強い。2b号人骨は2号男性の埋葬の際に集骨されたようであるが、火を浴びたのか、あるいは火葬されたのかは定かでない。1号女性は最新の埋葬で、3号男性は最古の埋葬であるが、埋葬時期、埋葬姿勢共に異なる。これらの相異が埋葬儀礼の時代的変遷なのか、あるいは埋葬儀礼の確立過程にあるのかは次に残されるべき問題である。

1号女性には上顎に全16歯が、下顎には左右に6歯づつが残る。下顎左側では第3大臼歯は萌出していないが、第1小臼歯は生前離脱である。下顎右側では犬歯と側切歯が生前離脱である。2号と3号男性には生前離脱の形跡は存在しない。1号女性は下顎左側の第1小臼歯と右側の犬歯と側切歯を生前離脱すると共に、右中切歯より左犬歯までの4歯が共に遠位移動している。右中切歯は正中矢状面よりも左側にある。1号女性は30歳代の後半に死亡したと推測されている。右中切歯より左犬歯までの4歯の遠位移動にどのくらいの期間を要するかは明らかでないが、左第1小臼歯の生前離脱はかなり以前と推測される。1号女性の埋葬は船倉貝塚では最も新しいが、縄文時代前期の終わり頃と推定されている。第1小臼歯の抜歯例は過去に殆ど見られないが、1号女性の下顎左第1小臼歯の生前離脱が抜歯儀礼の始まりに相当するのかは次に残されるべき問題である。

1号女性には上顎に全16歯が、また下顎には左右に6歯づつが残る。2号男性には上下顎に全32歯が残る。3号男性には上顎に15歯が、また下顎には14歯が残る。1号女性は下顎では良好な歯並びであるとは言えないが、2号と3号男性は上下顎共に良好な歯並びである。1号女性では下顎左側の第3大臼歯が未萌出であると共に、他の3本の第3大臼歯も小臼歯様の萎縮歯である。2号と3号男性には大臼歯の萎縮は見られない。1号女性の埋葬は船倉貝塚では最も新しいが、縄文時代前期の終わり頃と推定されている。船倉貝塚縄文前期人骨には女性ではあるが、顎骨の退縮傾向が既に現われているようである。

1号女性には上顎に全16歯が、また下顎には左右に6歯づつが残る。2号男性には上下顎に全32歯が残る。3号男性には上顎に15歯が、また下顎に14歯が残る。1号女性は下顎では良好な歯並びであるとは言えないが、鉗子状の咬合である。2号男性は上下顎共に良好な歯並びであるが、僅かに鋏子状である。3号男性も上下顎共に良好な歯並びであると共に、鉗子状である。咬合面は男女性の、また前後歯の区別もなくほぼ水平である。後歯の咬耗も強いが、前歯はそれ以上に強い。狩猟採集を生業とする縄文時代にはある特定の前歯を特殊な目的に多用する場合があるが、前歯はいずれの個体もほぼ均等に咬耗している。船倉貝塚縄文前期人骨では特定の前歯でなく、前歯全体をある目的に多用する慣習があったようである。

2号男性は30歳代の前半の年齢であるが、右上肢に骨折痕が残る。上腕骨では近位側の1/3が内後方に屈し、また前腕でも尺骨頭が変形する。2号男性は生前に、多分10-20歳代であろうが、上腕骨と尺骨を同時骨折し、その後、骨折は上腕骨では内後屈状態で、また尺骨頭でも圧平、外屈状態で自然治癒したものと思われる。骨折の自然治癒と機能回復には通常2-3ヶ月が必要である。骨折の自

然治癒と機能回復期をどのように暮らしたかであるが、誰かの介添えのもとに、生活したことは確かであろう。

船倉貝塚縄文人骨は西日本縄文人骨の中で、特長把握を試みられた。ヒトには例外なく、身体形質に大きな変異が存在する。身長などはその典型であるが、身体形質には変異があり、左右差、個人差、性差、地域差、集団差、時代差などが必ずある。船倉貝塚縄文人骨は1例の女性と2例の男性よりなるが、少数である。船倉貝塚縄文人骨の特長把握は西日本縄文人骨の大きい変異の中で試みられたが、単に個人差の検出に、また単なる個人識別に過ぎない。それ故に、ここでは船倉貝塚縄文人骨の特記事項を個人毎に記載するに留める。

西日本縄文人骨には岡山県津雲貝塚出土人骨が主に含まれるが、その他に、福岡県永犬丸Einomaru 貝塚、上八Kojo 貝塚、木月Kitsuki 貝塚、山鹿Yamaga 貝塚出土人骨も含まれる。福岡県の全貝塚は縄文時代の後期と、また岡山県津雲貝塚は後晩期と推定されている。従って、船倉貝塚縄文人骨は縄文時代の前期と推定されているので、西日本縄文人骨と言う比較資料は船倉貝塚縄文人骨の後の時代のものである。西日本縄文後期人骨には27例の男性と26例の女性頭蓋が、25例の男性と22例の女性上腕骨が、22例の男性と21例の女性橈骨が、25例の男性と17例の女性尺骨が、22例の男性と27例の女性大腿骨が、16例の男性と18例の女性脛骨が、14例の男性と11例の女性腓骨が含まれている。

SD得点は船倉貝塚縄文前期人骨の特長把握に用いられた。SD得点は船倉貝塚縄文前期人骨計測値より西日本縄文後期人骨平均値を減算し、その後、西日本縄文後期人骨標準偏差により除算したものである。人骨計測値はどの身体形質に於いても正規分布するので、-1.0SD得点以上で、また+1.0SD得点以下には西日本縄文後期人骨計測値の68%が含まれる。残りの16%づつは-1.0SD得点以下に、または+1.0SD得点以上に入る。従って、-1.0SD得点以下または+1.0SD得点以上を得た船倉貝塚縄文前期人骨計測値は西日本縄文後期人骨の16%に相当するほどに特異であることを示唆する。

1号女性は30歳代の後半の年齢である。生前身長は上腕骨、大腿骨の一部と2号男性のそれらとの比較法に基づいたが、150cm前後と推定された。生前身長は西日本縄文後期女性のそれに近い。脳頭蓋は後頭部のみであるが、上面観輪郭はゼルジの五角形に、また側面観輪郭は菱形に似る。後頭鱗は尖る傾向にある。後面観輪郭はハバラーの家屋状である。側頭窩は膨隆する。脳頭蓋は頭蓋底では西日本縄文後期女性のそれよりも狭い。その他に、前頭鱗には前頭縫合が、また後頭鱗には横後頭縫合が残り、同時に、後頭平面はインカ骨により3分割される。

1号女性には右上腕骨が良好な状態で残る。上腕骨では外弯性が強く、また遠位の前屈性も強い。 上腕骨では三角筋粗面の隆起が特異である。三角筋粗面では前凸稜、1条の中間稜、後外側凸稜の3 本の縦稜が走り、巾広い樋状である。後外側面には後外側縁と橈骨神経溝が明瞭である。上腕骨は 西日本縄文後期女性のそれよりも太い。上腕は筋骨逞しく、またしばしば外転させる必要のある状況にあったようである。

1号女性には左右の大腿骨が良好な状態で残る。大腿骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、内捻転性と前弯性は非常に強い。近位では断面輪郭が前後に扁平な楕円形で、過扁平型(X-75)であるが、遠位で

は断面輪郭が前後に長い『団栗の実』状で、厚型(100-X)である。近位では外側面が強く張り出し、大殿筋粗面がアンカリングし、また粗線外側唇も強い稜である。遠位では前面と後内側面がほぼ平坦で、後外側面が強い凹で、また粗線も強い凸稜である。粗線は内外側唇共に強く、また中間面も溝状である。大腿骨は近位では西日本縄文後期女性のそれよりも扁平で、また遠位では太く厚い。大腿は筋骨逞しく、下肢を酷使する必要のある状況にあったようである。同時に、大腿骨近位の扁平性と遠位の『団栗の実』状構造は津雲貝塚縄文後期人骨の大きな特長の一つである。

2号男性は30歳代の前半の年齢である。2号男性は生前に右上肢の上腕骨と尺骨を同時骨折したと言う病歴をもつ。上腕骨は内後屈状態で、また尺骨頭も圧平、外屈状態で、感染症にも罹患せずに、自然治癒したが、右上肢には運動性に不自由さが残ったであろう。生前身長は四肢骨の最大長に基づいたが、150cm台の後半と推定された。生前身長は西日本縄文後期男性のそれに近い。2号男性では左前腕示数と左下腿示数が得られた。前腕示数は橈骨最大長の上腕骨自然長に対する比で、また下腿示数は脛骨自然長の大腿骨自然長に対する比であるが、前腕示数は85.46%で、また下腿示数は85.54%である。前腕示数と下腿示数は共に長型(80-X)で、前腕は上腕よりも長く、また下腿は大腿よりも長い。生前身長は西日本縄文後期男性のそれに近いが、上肢と下肢のプロポーシわは西日本縄文後期男性のそれよりも、前腕と下腿が上腕と大腿よりも長いタイプに属する。

2号男性は後頭鱗の一部を破損するが、脳頭蓋は復元された。上面観輪郭はゼルジの五角形である。前頭鱗は緩かな曲線の張り出しで、また外側への膨らみも強い。後頭鱗は尖る傾向にある。長幅示数はカールソンの中型(75-80)である。側面観輪郭は楕円形である。前頭鱗は長く、弯曲も強い。頭頂骨は長さ、弯曲共に普通であるが、後方への落ち込みは強い。後頭鱗の潜り込みも強い。長高示数は中型(70-75)である。後面観輪郭は砲弾状で、また頭蓋冠は弱い切り妻状である。幅高示数は中型(92-98)である。脳頭蓋は西日本縄文後期男性のそれに酷似する。その他に、右アステリオンには横後頭縫合の遺残がある。

2号男性は右上顎骨を破損するが、顔面頭蓋はほぼ復元された。正面観輪郭は長方形に近い。前頭鱗は巾広いが、頬骨弓の張り出しは弱い。頬骨弓より上顎骨への輪郭は深い『くの字』状の切痕で、また下顎角も狭い。コルマン全顔面示数は中型(85-90)で、また上顔面示数は広型(45-50)である。眼窩は外下がりの長方形であるが、鼻根と梨状口は広い。鼻腔の外側への拡がりは弱い。眼窩示数は低型(X-76)で、鼻部は過低型(58-X)である。顔面頭蓋は西日本縄文後期男性のそれよりも細面で、眼窩は低く、鼻根と梨状口は広い。

2号男性は上肢では左上腕骨が良好な状態で残る。上腕骨は自然位の内転性では弱いが、外弯性は強い。内捻転性は遠位では弱いが、近位は強い。近位では断面輪郭が特異で、前内側面には大結節稜、小結節稜、結節間溝が共に強く骨隆起する。中間位では三角筋粗面の隆起も強い。三角筋粗面には前稜、2条の中間稜、後外側稜の4本の縦稜も走る。上腕骨は西日本縄文後期男性の長さに近いが、細い。上腕骨は筋骨逞しいが、上腕は細く華奢である。

2号男性は前腕では橈骨と尺骨が良好な状態で残る。橈骨では外弯性が明瞭である。尺骨では近位 の後弯性と遠位の内弯性がほぼ普通である。橈骨粗面は強い隆起で、また近位でも長母指屈筋と長 母指外転筋の起始面が共に凹である。尺骨粗面は紡錘状の陥凹で、回外筋稜も強く鋭い。後面では中間稜が近位側の1/4より遠位端まで明瞭である。後外側部では長母指外転筋、長母指伸筋、示指伸筋の起始境界が明瞭で、長母指外転筋の起始は狭く、長母指伸筋の起始は細長い指状圧痕で、また示指伸筋の起始も溝状である。方形回内筋の起始稜は強く、起始陥凹も深い。橈骨と尺骨は西日本縄文後期男性のそれらよりも長いが、細い。前腕骨は筋骨逞しいが、前腕は長く細く華奢である。

2号男性は下肢では大腿骨が良好な状態で残る。大腿骨はほぼ真っ直ぐに伸び、また内転性、前弯性、内捻転性も普通である。近位では断面輪郭が卵円形で、中型(85-100)であるが、外側面の張り出しは明瞭で、また大殿筋粗面も巾広いアンカリングである。粗線内外側唇も稜状で、また中間面も凹である。中間位と遠位では断面輪郭が前後に長い『団栗の実』状で、共に厚型(100-X)である。後内側面はほぼ平坦で、後外側面は凹である。粗線では内側唇が外側唇よりも強いが、中間面は溝状である。大腿骨は西日本縄文後期男性の長さに近いが、細い。大腿骨は筋骨逞しいが、大腿は細く華奢である。大腿骨中間位と遠位の『団栗の実』状構造は津雲貝塚縄文後期人骨の大きな特長の一つである。

2号男性は下腿では脛骨と腓骨が良好な状態で残る。脛骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、前弯性は強い。前縁には骨肥厚が左右共にある。前縁の骨肥厚の原因は不明であるが、打ち身などの機械的な ストレスも成因になり得る。近位では断面輪郭が内外に扁平な菱形である。後面では垂直稜が鋭く、またヒラメ筋線も強い。後外側部には中間線も形成される。腓骨は中間位では断面輪郭が台形に近い。 内側面は巾広く平坦で、後内側部はほぼ平坦で、後外側部は弱い凸面で、外側面は強い褶曲である。 脛骨と腓骨は西日本縄文後期男性のそれらよりも長いが、細い。下腿骨は筋骨逞しいが、下腿は長く細く華奢である。脛骨近位の内外に扁平な菱形構造は津雲貝塚縄文後期人骨の大きな特長の一つである。

3号男性は40歳代、あるいはそれ以降の年齢と推定された。生前身長は左側の四肢骨の一部と2号男性のそれらとの比較法に基づいたが、160cm前後と推定された。生前身長は西日本縄文後期男性のそれに近い。

3号男性は眉間を破損するが、脳頭蓋はほぼ復元された。上面観輪郭はゼルジの卵円形である。前頭鱗は緩かな曲線の張り出しで、また外側への膨らみも強い。後頭鱗は尖る傾向にある。側面観輪郭は楕円形に近い。頭頂骨は長さ、弯曲共に普通であるが、後方への落ち込みは強い。後頭鱗は長く、後頭鱗の前方への潜り込みも強い。後面観輪郭はハм゙ラーの家屋状である。頭蓋冠は弓状で、側頭窩は僅かに膨隆する。幅高示数は高型(98-X)である。脳頭蓋は西日本縄文男性のそれよりも狭く高い。その他に、右アステリオンには横後頭縫合の遺残がある。船倉貝塚縄文前期頭蓋は僅か3例に過ぎないが、3例中のすべてに横後頭縫合の遺残があり、非常に奇異な現象も見られる。

3号男性は鼻根と左上顎骨の一部を破損するが、顔面頭蓋はほぼ復元された。正面観輪郭はほぼ卵円形に近い。前頭鱗は狭いが、頬骨弓の張り出しは強い。頬骨弓より上顎骨への輪郭は深い『くの字』状の切痕で、また下顎角も狭い。鼻腔の外側への拡がりは弱く、また梨状口も狭い。眼窩は外下がりの方形である。顔面頭蓋は西日本縄文後期男性よりも細面である。

3号男性は上肢では上腕骨が良好な状態で残る。近位の後屈性と遠位の前屈性はほぼ普通である。近位では断面輪郭が特異で、前内側面には大結節稜、小結節稜、結節間溝が共に骨隆起する。大胸筋の停止は強い粗な凸稜であるが、大円筋の停止はアンカリングしている。三角筋粗面は明瞭な前稜と後外側稜であるが、隆起は弱い。上腕骨は西日本縄文後期男性のそれよりも細い。上腕骨は筋骨逞しいが、上腕は細く華奢である。船倉貝塚縄文前期男性上腕骨は僅か2例に過ぎないが、2例中のすべてに大結節稜、小結節稜、結節間溝に股がる骨隆起が形成されている。大結節稜、小結節稜、結節間溝に股がる骨隆起が形成されている。大結節稜、小結節稜、結節間溝に股がる骨隆起を船倉貝塚縄文前期男性上腕骨の特長であると言うことは出来ないが、船倉貝塚縄文前期男性は上腕をしばしば内転・内外旋させる必要のある状況にあったことは確かである。

3号男性は前腕では橈骨と尺骨が良好な状態で残る。橈骨では外弯性が明瞭である。尺骨では近位の後弯性と遠位の内弯性がほぼ普通である。橈骨粗面は強い隆起で、また近位でも断面輪郭が特異で、長母指屈筋と長母指外転筋の起始が共に凹面である。後面では長母指外転筋と短母指伸筋の起始境界が、また走行痕が明瞭である。尺骨粗面は縦長の三角形の陥凹で、回外筋稜も強く鋭い。中間位では断面輪郭が左右で異なり、左側では通常の三角形であるが、右側は特異な『栗の実』状である。深指屈筋の起始は左側ではほぼ平坦であるが、右側は狭い凸である。後面では中間稜が近位側の1/4に始まり、遠位端まで明瞭である。後外側部では長母指外転筋、長母指伸筋、示指伸筋の起始境界が明瞭である。長母指外転筋の起始は広い指状圧痕で、長母指伸筋の起始は深い指状圧痕で、また示指伸筋の起始も溝状である。橈骨と尺骨は西日本縄文後期男性のそれらよりも細い。前腕骨は筋骨逞しく、また前腕は華奢であるが、右尺骨には極端な機械的なストレスが掛けられていたようである。

3号男性は下肢では大腿骨が良好な状態で残る。大腿骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、内捻転性と前弯性は共に強い。近位では断面輪郭が左右共に楕円形であるが、左側では過扁平型(X-75)に、また右側は中型(85-100)に分類された。外側面の張り出しは左右共に強いが、左側では前面が軽く陥凹し、右側では粗線外側唇が強い稜である。大殿筋粗面は溝状ではないが、粗線外側唇が強い稜であるので、巾広い。粗線中間面は巾広く、平坦である。遠位では断面輪郭が前後に長い『団栗の実』状で、また左右共に厚型(100-X)である。後内側面は左側では平坦であるが、右側は凹である。後外側面は左右共に凹である。粗線は左側では狭く、また中間面も凸であるが、右側では内側唇と外側唇が強い稜で、また中間面は凹である。大腿骨は西日本縄文後期男性の太さに近いが、左右で異なる。大腿骨は筋骨逞しく見えるが、右側にはより強い機械的なストレスが掛けられていたようである。船倉貝塚縄文前期大腿骨は僅か3例に過ぎないが、3例中のすべてに大腿骨近位の扁平性と中間位または遠位の『団栗の実』状構造が形成されている。大腿骨近位の扁平性と中間位または遠位の『団栗の実』状構造が形成されている。大腿骨近位の扁平性と中間位または遠位の『団栗の実』状構造は津雲貝塚縄文後期人骨の大きな特長の一つであるので、縄文時代の前期にそれらの構造は既に確立されていたと思われる。

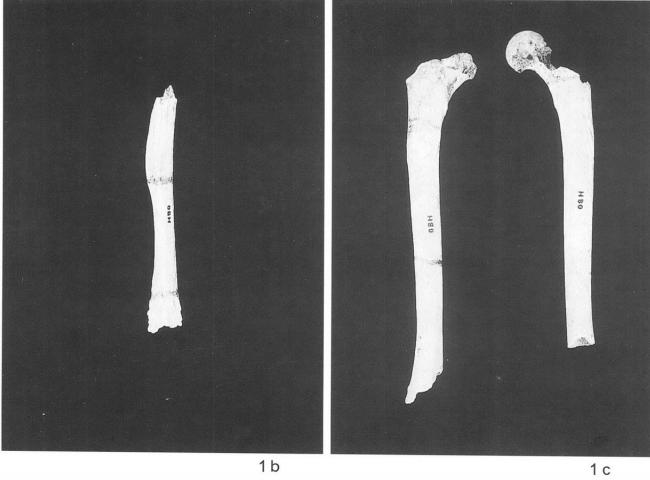
3号男性は下腿では脛骨と腓骨が良好な状態で残る。脛骨はほぼ真っ直ぐに伸び、また前弯性も普通である。近位では断面輪郭が内外に扁平な三角形であるが、左右共に中型(63-70)に分類された。前外側面は強い褶曲であるが、後面は凸である。ヒラメ筋線は左側では強い凸稜であるが、右側で

は線状である。垂直稜は左側では線状であるが、右側は鋭稜である。腓骨は中間位では断面輪郭が特異で、左右共にほぼレール状である。内側面は非常に狭く内側に傾斜し、後内側部は深い凹面で、外側面は強い褶曲である。後外側部はほぼ平坦である。近位ではヒラメ筋の起始線が左側のみであるが、アンカリングしている。脛骨と腓骨は西日本縄文後期男性のそれらよりも細い。下腿骨は筋骨逞しいが、下腿は細く華奢である。船倉貝塚縄文前期下腿骨は僅か2例に過ぎないが、2例中のすべてに脛骨近位の内外に扁平な菱形構造が見られている。脛骨近位の内外に扁平な菱形構造は津雲貝塚縄文後期人骨の大きな特長の一つであるので、縄文時代の前期にその構造は既に確立されていたと思われる。同時に、船倉貝塚縄文前期人骨は上肢と下肢を酷使する必要のある状況にあったことは確かである。

最後に、本資料を観察調査する機会を与えて頂いた倉敷市教育委員会埋蔵文化財センターの福本明、小野雅明先生に感謝の意を表したい。なお、この報告書を記載する際し、参照した参考文献は 形質人類学関係の諸本にはどこでも多用されているので、割愛した。

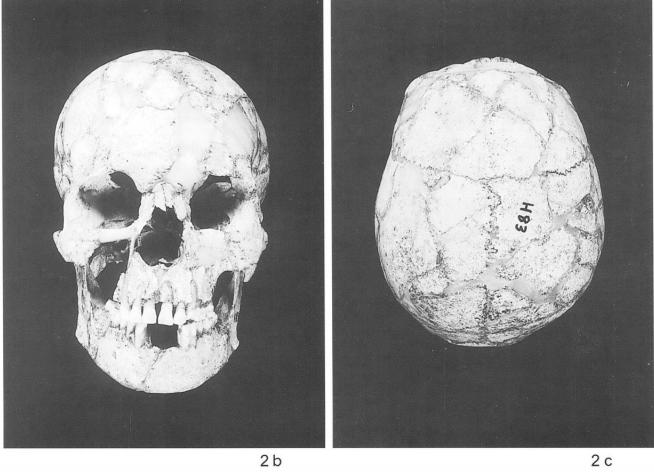
註(1)3基の土壙墓の新旧関係については、発掘調査の時点で3号・2号・1号の順に構築されたという認識があったが、1号土壙墓と2号土壙墓に関しては、土層断面の再検討の結果、順序を明確にすることは困難であるという結論に達した。3号土壙墓については、1号・2号土壙墓に先行するとの見解に変更はない。(小野)

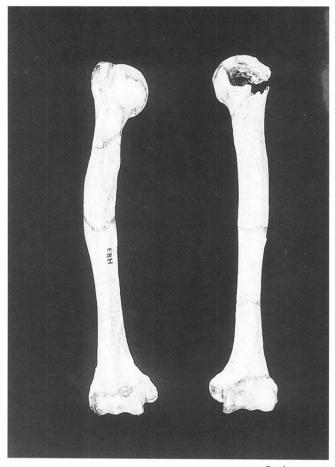


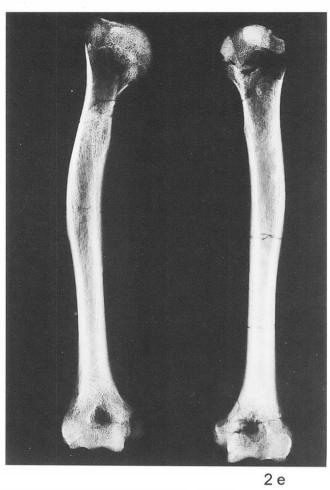


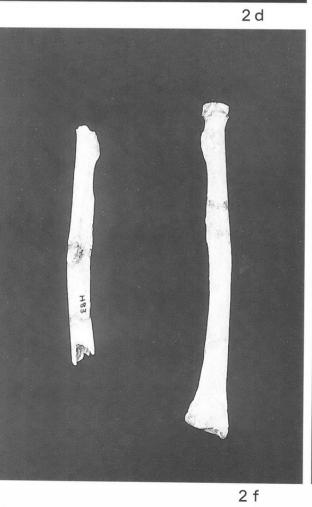


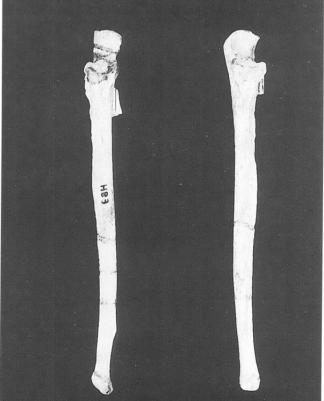




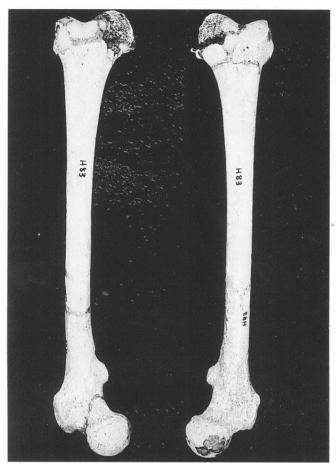








2 g

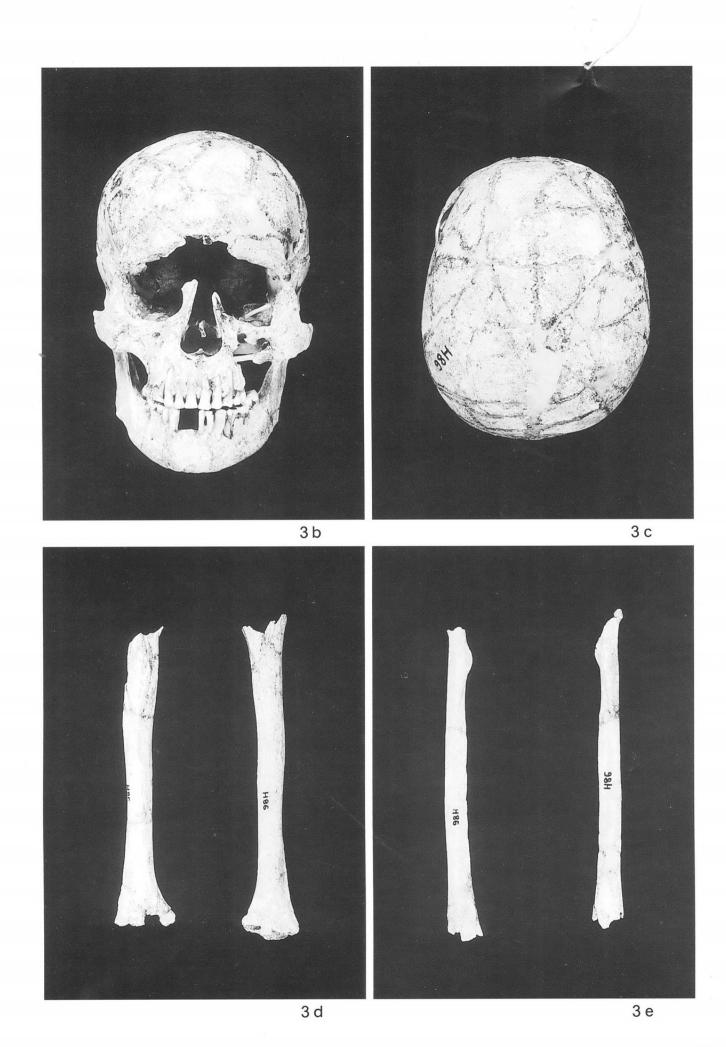


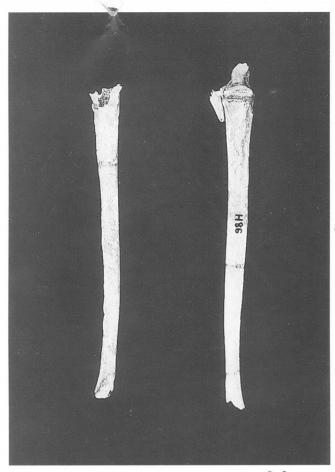


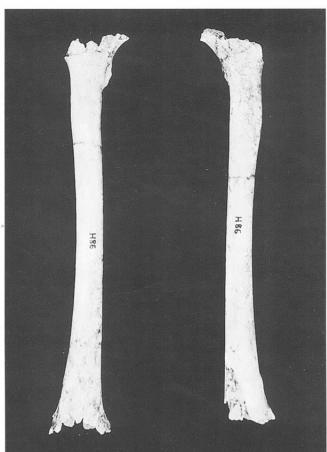
2 h 2 i



3 a

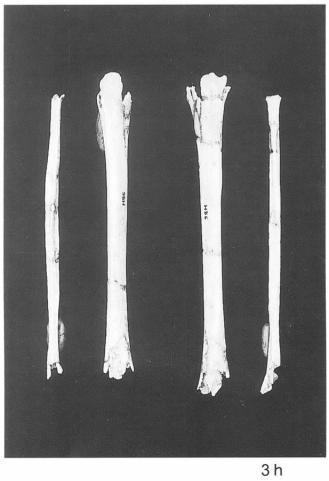






3g

3 f



付論2

倉敷市船倉貝塚出土の節足、脊椎動物遺体

早稲田大学考古学資料室 金子浩昌

はじめに

船倉貝塚は、平成3(1991)年、倉敷市街幹線道路の整備工事の際に新たに発見された縄文時代の 貝塚である。同工事に伴い発掘調査が行われ、併せて動物遺体についても採集、検出が試みられ、 多くの資料が得られた。岡山県下の遺跡出土の動物遺体の調査をおこなっていた筆者は、この資料 を調査する機会をもち、報告することとなった。この間にあって倉敷埋蔵文化財センターの福本 明氏、小野雅明氏には大変お世話になり、報告書作成にも協力いただいた。厚く御礼申し上げる次 第である。

今回報告する資料は、①貝層発掘中に取り上げられた縄文時代前期から後期の大型獣を中心とした資料。②前期の土壙墓から出土した資料。③主に前期の遺物を出土した貝層(Jグリッド)を水洗選別し、検出された資料である。

I. 動物遺体種名表

節足動物門 Phylum AF	RTHROPODA	カレイ目	Order Pleuronectiformes
甲殼綱	Class CRASTACEA	ヒラメ科	Family Bothidae
	類)Decapoda Brachyura	ヒラメ	Paralichthys olivaceus
属・種不明	Gen.et sp.indet.	フグ目	Order Tetraodontiformes
	ERTEBRATE	フグ科	Family Tetraodontidae
軟骨魚綱	Class CHONDRICHTHYES	属・種不明	Gen.et sp.indet.
サメ目	Order Lamniformes	カワハギ科	Family Monacanthidae
ッパロ メジロザメ科	Family Charcharhinidae	属・種不明	Gen.et sp.indet.
科不明	Family indet.	両生綱	Class AMPHIBIA
エイ目	Order Rajiformes	無尾目	Order Anura
トビエイ科	Family Myliobatididae	科不明	Family indet.
トビエイ	Myliobatis tobijei	爬虫綱	Class REPTILIA
マダラトビエイ	Aetobatus narinari	カメ目	Order Testudines
属・種不明	Gen.et sp.indet.	科不明	Family indet.
硬骨魚綱	Class OSTEICHTHYES	鳥綱	Class AVES
ニシン目	Order Clupeiformes	目不明	Order indet.
ニシン科	Family Clupeidea	哺乳綱	Class MAMMALIA
ヒラ	Ilisha elongata	齧歯目	Order Rodentia
スズキ目	Order Periciformes	ネズミ科	Family Muridae
ボラ科	Family Mugilida	属・種不明	Gen.et sp.indet.
ボラ	Mugil Cephalus	食肉目	Order Carnivora
カマス科	Family Sphyraenidae	イヌ科	Family Canidae
属・種不明	Gen.et sp.indet.	イヌ	Canis familiaris
スズキ科	Family Percichthyidae	タヌキ	Nyctereutes procyonoides
スズキ	Lateolabrax japonicus	イタチ科	Family Mustelidae
タイ科	Family Sparidae	アナグマ	Meles meles
マダイ	Pagrus major	偶蹄目	Order Artiodactyla
クロダイ	Acanthopagrus schlegeli	イノシシ科	Family Suidae
属・種不明	Gen.et sp.indet.	イノシシ	Sus scrofa
ハタ科	Family Serranidae	シカ科	Family Cervidae
属・種不明	Gen.et sp.indet.	ニホンジカ	Cervus nippon
二ベ科	Family Sciaenidae	真猿亜目	Suborder Anthropoidea
ニベ	Nibea mitsukurii	オナガザル科	Family Cercopithecidae
		ニホンザル	Macaca fuscata

Ⅱ. 動物遺体について

1. 節足動物

力二類

鉗脚の破片のみが出土。

- 2. 脊椎動物
 - a. 魚類

サメ類

メジロザメ科の椎体

 $C4/6.4 \sim 6.5$ で椎体1点が出土。椎体234.8、椎体長15.3。これには特別の加工はみられなかった。

トビエイ

長い六角形の歯板が出土している。長径が16.5、13.0、11.0である。大きさが異なるので、別個体であろう。トビエイの歯板は、多数が並んで一つの顎になるが、原形を保って出土することはほとんどない。さほど硬くないので食べられてしまうのかもしれない。出土は多くないのが普通である。

マダラトビエイ

上下の歯板が出土している。検出された数は5点程で少なかった。トビエイ類の歯板は長方形の板が多数板状に連なって上下の顎骨内に作られているので、魚一個体でも多数があったはずである。ただ、個々の歯板は、脆い骨質のために破損し易く、発掘時に採集することが難しくなることが予想される。出土した歯板には完存する標本はなかったが、一個の歯板の幅は40.0位と推定される。 J9/5.4~5.5出土の上下の歯板は、ほぼ同程度の大きさに復元されるので、同一個体のものであった可能性もある。この歯板の大きさから推定される魚体の大きさは、幅60~70cmになるのではないかと思われる。

その他のエイ椎体

エイ類の椎体は多数検出されているが、そのうち椎体径12.0~14.2、椎体長7.0前後の大きさになる標本がある。上記したエイ類歯板をもつ個体よりもはるかに大きい個体の椎体である。この中には、トビエイ類の大型個体(体幅1.2 mになるような)の椎体も考えられるが、そうした歯板は検出されていないので、イトマキエイ属が考えられるかもしれない。

硬骨魚類

スズキ

歯骨1点。

ハタ類

前上顎骨1点。

クロダイ

出土した標本の数は特に多くないが、別の魚と比べれば顎骨が多く残されていた。しかし、ほと

んどの顎骨は破損し、原形を残す標本はなかった。一般に、タイ類の顎骨は骨質が厚く、完存した形で出土することが多い。本遺跡ではなぜこれほど破損しているのか、疑問になる点の一つである。 そのために顎骨の大きさを確認するのが難しいが、全長20.0前後が多かったのではないかと思われる。遊離したタイ類の歯が多数あったが、これもクロダイのものであっただろう。

マダイ

1号土壙墓の上層から歯骨を1点得ているのみである。歯骨全長50.0位になる。

ニベ

耳石が3点ある。周囲が破損して原形を止めないが、長径10数mmになるのであろう。

ボラ

椎体3点。

カマス類

歯2点:やや扁平で、湾曲した細く短い歯。

ヒラメ

歯1点:ヒラメ特有の細長い歯である。

フグ類

前上顎骨3点、歯骨1点。大型の前上顎骨全長40.0、小型のは10.0。丈夫な骨質をもつ顎骨故に保存されたことも考えられるが、フグ類を食用にする機会が多かったこともあったのであろう。

カワハギ類

背鰭第1棘:尖端を欠損する。全長30.0前後。

b. 両生類

カエル類

四肢骨1点、寛骨1点を検出したのみである。小型の種類である。

c. 爬虫類

カメ類

肋骨板片を僅かに検出しているのみである。

d. 鳥 類

骨片があったのみである。

e. 哺乳類

イヌ

前期の1号土壙墓から上腕骨1点があり、この地域の前期のイヌの確かな証拠として注目される。 ただ、不完全な上腕骨遠位骨端の小片であるので、大きさなどを知ることはできないが、おそらく 小型犬の大きさと思われる。

タヌキ

中型獣ではタヌキが多かった。C1、C2のほぼ同じ深さのところで歯牙、四肢骨片、J4、J6で歯牙と四肢骨片があり、 $1号土壙墓中にもあった。<math>J4/5.1\sim5.2$ 出土の左 M_1 の歯冠長12.4。他の M_1 は

破片であった。

イノシシ

大型獣としてはイノシシの遺骸が最も多く出土している。遺骸のなかで、歯牙、顎骨類は、1号土 壙墓からの出土が主体であった。歯牙の大きさは次のとおりである。

B4/6.4~6.5出土

右側頭頂骨片:縫合未骨化の若い個体。

1号土壙墓下層出土

右上顎骨: M²歯冠長×歯冠幅 21.1×18.5、M³?×21.2

右下顎骨 (dm₄~M₂)

歯冠長×歯冠幅

 $dm_4 19.4 \times 9.3$

 $M_1 18.0 \times 11.4$

 M_2 22.9 × 14.8

右下顎犬歯:縦に割っている。幅22.0

Dグリッド貝層出土

右側下顎骨(P4~M3)

歯冠長×歯冠幅

 $P_4 = 15.8 \times 10.2$

 $M_1 = 17.4 \times 11.0$

 M_2 21.1 × 14.1

 $M_3 \qquad 35.4 \times 16.4$

右側頬骨片1:幅38.0、厚さ15.0、大きな頭蓋であったことを思わせる。

左側第3中手骨:近位骨端のみを残す。近位骨端幅23.0

末節骨:足底面長32.0

L6/5.2~5.3出土

右側上腕骨:遠位骨端幅48.0±

C1/6.6~6.7出土

左側大腿骨:近位骨端幅60.0

ニホンジカ

C7/6.8~6.9出土

鹿角:切断面をもつ角幹片がある。叩き切りである。

北調査区貝層出土

鹿角:角座部分、落角、枝、幹部折れる。

C8/6.6~6.7出土

左側Mı

D5/6.4~6.5出土

右側M3:未咬耗歯

四肢骨

A7/6.6~6.7出土

左側大腿骨:骨体、両端に打ち割りと横位の切痕。骨体幅21.0

C14グリッド貝層

右側大腿骨:骨体のみ。骨体幅23.0

C17/6.7~6.8出土

右側脛骨:近位部、骨端外側に横位に付く短い切痕。骨体部端は打ち割り。近位骨端幅58.3

Cグリッド貝層出土

右側距骨:38.8×24.2、被熱で焦げ痕。

D1/6.5~6.6出土

右側中足骨:近位部、縦に割る。

1号土壙墓下層出土

右側中足骨:骨体~遠位骨端を残す。縦に割る。遠位骨端に横位の切痕。

J12/5.2~5.3出土

右側踵骨:遠位骨端を残すのみの破片であるが、距骨との関節面横径36.7、この踵骨の全長100.0を少し越える大きさであろう。

まとめにかえて

1. 船倉貝塚の哺乳類

本遺跡の哺乳類遺骸は、ネズミ類、タヌキ、イヌ、アナグマ、イノシシ、ニホンジカに限られ、しかも量的には中小獣ではタヌキが、大型獣ではイノシシが多かった。この地域の縄文前期~後期の貝塚の獣類相を知る貴重な資料であったと思われる。イノシシでは、若・成獣の個体があり、成獣では大型の個体が捕獲されていた。その大きさは、東日本の石器時代遺跡から出土する個体とも変わらないもので、この時代には、本州全域にこの程度の大きさの個体が生息していたのである。イノシシに比べると、シカの遺骸の検出はごく少なく、捕獲の少なかったことを推測させる。旧児島湾岸にある前期~中期の大橋貝塚、後期の矢部貝塚でも同じ傾向をみた。

ただ、本遺跡でのイノシシ、シカの全体的な量は少ないものであった。例えば、貝塚がはじまったのがほぼ同時期と考えられている磯の森貝塚の出土資料などと比べると、その少ないことが目立つ。これが遺跡による違いとすれば、その理由が問題となってくるであろう。この地域での動物遺体の在り方の調査例が少ないので、今は筆者の気づいた点を述べるに止めたい。なお、中小獣ではタヌキ、アナグマなどの遺骸は、イノシシ、シカとの比率からみるとむしろ多いかもしれない。これも本遺跡での特徴といえよう。

2. 船倉貝塚の魚類

魚類遺体については、上記③の資料に限られているためか中型魚類の遺体の検出は多くなかったと思う。しかし、クロダイを主体としたと考えられる。マダイはさらに少なく、内湾的な性格の強い漁労であった。この傾向は、広くこの地域一帯の石器時代漁労についていえることのようである。また、エイ類の多かったことも湾奥での漁労を推測させる。特に大型のエイ類のあることは特徴的であった。さらに、イワシ類の遺骸も検出され、こうした資源の多かったことが推測されたのである。

さらに、この地域の縄文遺跡での動物遺体の在り方を比較論考する事が今後の課題となろう。

魚類の出土量(1)

· 確 ·											kの垂飾1																4の垂飾4	kの垂飾1	
その他・備考											大型エイ椎体の垂飾1																大型エイ椎体の垂飾4	大型エイ椎体の垂飾1	
长 毘	離棘片(3)		0.01		0.08	0.16	0.28	0.04		0.19	60.0	1.42	0.74	0.15	0.31	0.35	0.55					0.22	0.25	0.17	0.32	0.39	0.45	1.01	0.42
フグ類	信 上職 Y N N N N N N N N N N N N N N N N N N																												
カワハギ類	治難	Н											\dashv			1												-	
カラメ																													
	血管間棘																												
	離離第 - 棘																												
	m L/R																												
クロダイ	綑																9												
·	大R																												
	前上顎 化												/1										1						
	職會															1													
マダイ	地區 地名																												
	臀鰭第一棘																												
タイ対	尾椎	П																											
	推 存																												
	摇	4	1			2	5	3	8	4	2		19	15	5	2						4	10	21	27	5	∞	∞	6
川ぞ	耳石		ī																										
へ 夕類	前上颚 5																												
KK#	歯骨 沢耳石												1/																
カマス類	摇						1										7												
ボラ	希 存																												
אר	尾椎																												
	裍췭																												
トガエイ	極板																	2											
	尾棘																												
エイ類	無 存		Ш				2			3	ļ				1	2	10				1	7	2			2	11		1
	摇														_	_							ļ	<u> </u>					
	超校		_				_						1				<u> </u>	_	_					_		<u> </u>	_		
メジロデメ対	## 存		\vdash		-	ļ	ļ	_	_					-			\vdash						_			_	_	L	_
サメ類	希 存	_		<u> </u>								-					_					<u> </u>		_		_			
田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田 田		$11/5.6\sim5.66$	5.5~5.6	$5.4 \sim 5.5$	$5.3 \sim 5.4$	$5.2 \sim 5.3$	5.1~5.2	5.0~5.1	$12/5.5\sim5.59$	$5.4 \sim 5.5$	5.3~5.4	$5.2 \sim 5.3$	$5.1 \sim 5.2$	5.0~5.1	J 3 / 5.5~5.64	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.12~5.2	$J4/5.6\sim5.64$	$2.5 \sim 5.6$	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	$5.1 \sim 5.2$	J 5 / 5.5~5.62	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3

魚類の出土量(2)

	<u> </u>																												Γ
そのも・舗老																													
- 第																													
40							i				ļ Ī																		
不思	離棘片(3)	2.59	0.58	0.18	0.34	2.14	98.0	80.0	0.61		0.09		80.0	0.22			0.23	0.04	0.33	0.12	0.09	0.04	0.04			0.30	0.46	0.03	0.13
レグ麒	福庫 号															ļ													
11 / 4/ #K	前上職 呎																												1/
カワハギ類	治體																												
アラメ	图																												
	自御譚 自御譚様									_	_																		
	警護策2様	<u> </u>				ļ					_	_	_		_						_				<u> </u>				L
	警職紙・様	_							_				_							_								Ш	\vdash
	四欄	_											_								_			L					
クロダイ	摇	<u> </u>			_								_		_						_					<u> </u>			_
	粗牵 号																												
	前上颚 5																												
	車 職		2																										
マダイ	翻 廊																												
	警護第一棘																												
タイ丼	尾椎																												
	新							_									L_												
	捆	39	16	2	2	2	2	<u> </u>	6		_	ļ	П	2	က	11	29	12	16	∞	2	9	21			25	6	20	21
リイ	本 中 日	_		_	_		ļ	ļ		ļ	ļ	<u> </u>	ļ	ļ	ļ							_		_					-
< 夕類	制工職 5	L																											
 	本 位	ļ		ļ				Ĺ		L	ļ																		_
	網 庫 🖁									<u> </u>												<u> </u>							_
カマス類	摇																												
ド ル	希 存			L				L.,																					_
カレ	尾椎	_							_							_						L			_				_
マダラトビエイ	超枝			-				ļ			ļ											4	_						-
〒 カH <i>ഺ</i>	and feet	13			_						_					<u> </u>	П		1		-	_	_		L				-
	推体 尾棘	2			2		3		2				2						က		~	വ		\vdash		4		4	H
エイ類	福	- "	-	_	7		٠,,	-	.7			-	7	_	-	-		H	(,,		.7	٠,	_			7		7	
	超校	-		-	Н	-					-	-			-		1				-								-
メジロザメ科	 																												
サメ類	希 存															r-4				L									
	L									2					<u> </u>	2				_					99				Γ
点		~5.2	5.1	~5.6	5.4~5.5	-5.4	-5.3	$5.1 \sim 5.2$	-5.1	$5.5 \sim 5.55$	-5.5	-5.4	$5.2 \sim 5.3$	-5.2	.5.1	5.6~5.75	$5.5 \sim 5.6$	-5.5	$5.3 \sim 5.4$	~5.7	-5.6	5.4~5.5	$5.3 \sim 5.4$	$5.23 \sim 5.3$	$J10/5.6\sim5.66$	$5.5 \sim 5.6$	5.5	$5.3 \sim 5.4$,5.3
五 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七		/ 5.1~5.2	5.0~5.1	/ 5.5~5.6	5.4~	5.3~	5.2~	5.1~	5.0~	5.5~	5.4~	5.3~	5.2~	5.1~	$5.0 \sim 5.1$	5.6~	5.5~	5.4~	5.3~	/ 5.6~5.7	5.5~	5.4~	5.3~	.23	/ 5.6	5.5~	5.4~	5.3~	5.2~
		15/		16/	-					/ L f		-			"	18/				/6f	-	-		2	10,	•			
<u> </u>		٦		5						J					L	<u> </u>				J			<u> </u>	Ш	J				

魚類の出土量(3)

																													П	
その他・備考															エイ椎体の垂飾1															
长 密	羅) Se	0.05			0.31	0.41						0.22		0.09	0.07		0.20	0.39	0.24	0.10		0.01	0.04	0.02	0.43		0.30	2.50	99.6
フグ類	指 衛	L/R L/R																		1/1	1/									1/
カワハギ類	細細																											П	က	H
カラメ	继																											П		П
	を と を を を を を を を を を を を を を を を し を し	7 模					1	1/																	/1					
クロダイ	粗電	L/R																	1/							1/				/1
	職會	L/R						1/												1					1/					
マダイ	粗疵	L/R																										Ц		
タイダ	相 有 所 相 翻翻第一	- 雄	1			12	22		3		3	12	7	11	14	1	1	19	59	17	19		8	3	2	27	16		2 1	27 1
リイ	耳石																													
ハタ類	前上顎	L'R																												
KK#	歯骨耳石	L/R 1													1				1		1									
カマス類	捆																				ļ.,									\vdash
ボラ	新 存			·	ļ																1		ļ			-	_			\vdash
<u>אר</u>	尾椎														_	-	-							-				\vdash	Щ	\vdash
	超板						-	ļ																						\vdash
→ カイノ	超板				_		-						1				_			ļ						2	_	H	Н	Н
エイ類	祖 年存 写模					2	2				1	1	3			က	1	4	3	D.	2				2		-1			6
メジロガメ丼	補存 超茂								1			1	1								2									
サメ類	希 存		ļ		<u> </u>																	-		\vdash		_				П
型 出 丑	* *		J 10 / 5.1~5.2	J 11 / 5.6~5.63	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~5.2	5.0~5.1	$112/5.5\sim5.6$	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~5.2	5.0~5.1	113 / 5.5~5.58	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~5.2	5.0~5.1	4.95~5.0	J 14 / 5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~5.2	5.0~5.1	C 1 / 6.9~6.96	6.9~8.9	6.7~6.8

魚類の出土量(4)

その他・備老				-																					発掘調査中に取り上げ	マダイ前顎骨片1		
长	鑑牍七99		000	0.08		0.14	60.0	0.11	0.36	0.51	1.97	0.26	90.0		0.29	0.50	0.24	89.0	1.13	0.55	0.39		0.09	0.21		6.17	2.0	0.88
フグ類		L/R L/R																								1/		/2
カワハギ類	岩 離	=		+				<u> </u>																				П
カラメ	捆																П	<u> </u>			ļ	ļ			-			
	臀鰭第一臀鰭第2																											
クロダイ	粗ლ	L/R L/R																								1/1		1
	事争		7																							1/1		
レダイ	超ლ	5																								/1		
タイ草	権体 建士 開推		31	3 4	3	21	2	∞	15	22	21	4	3	12	2	4	38	7	22	6	9		4	2		62 1		7
ロど	耳石															1												
へ 夕類	電工職	۲ :	7															-										
KK#	-	<u>ج</u>																										
カマス類	摇	_	\perp		_	Ш														_								
ボレ	新 存	_	\perp	_	_	Ш												L,								2		
אות אות	尾椎	-	4	-	 																			_				_
	歯板	\dashv	+	+	_										_					_					-			
→ カH∠	尾棘歯板																				1					8		1
エイ騏	超 題 サ	,	II							20	2						8	9	1 18	8	I					29		28
メジロザメ科	推体																								1			
サメ類	推体		٦																									
以出土田			65~66	6.4~6.5	6.3~6.4	6.19~6.3	C 2 / 6.9~6.96	6.9~8.9	8.9~2.9	6.6~6.7	6.5~6.6	$6.4 \sim 6.5$	6.3~6.4	$6.16 \sim 6.3$	C 3 / 6.9~6.96	6.9~8.9	6.7~6.8	6.6~6.7	$6.5 \sim 6.6$	$6.4 \sim 6.5$	$6.3 \sim 6.4$	$6.2 \sim 6.3$	$6.1 \sim 6.2$	$6.05 \sim 6.1$	C 4 / 6.4~6.5	1号土壙墓上層	1号土壙墓下層	2号土壙墓

動物遺体の出土量(1)

<u> </u>																									4											
その他・備老																	-								カエルL寛骨1・肢骨						-		タヌキLP4・肢骨 1			
獣骨片(g)								09.0	0.78								99.0	5.33				0.31	0.25	0.12	3.74 为				88.9	0.54			20.64 \$	2.19		
114																																				
かカ					-							LM1																	-							
イノシシ																				-									LP3・R大腿骨片							
47																										LM_2	-									
アナガマ												RM^1																								
タヌキ												,							LM_1					LM1									L下顎骨	前臼歯		
ネズミ類													-		審 1																					
トリ猫																					細片 1															
カメ類																																				
カニ類 カエル類 カメ類 トリ類 ネズミ類																									鉗脚7 椎体1											
力二類									鉗脚4		鉗脚4											9期		鉗脚4	鉗脚7	鉗脚8								3 開幕		
出土地点	$11/5.6\sim5.66$	5.5~5.6	$5.4 \sim 5.5$	$5.3 \sim 5.4$	5.2~5.3	$5.1 \sim 5.2$	5.0~5.1	$12/5.5\sim5.59$	5.4~5.5	5.3~5.4		$5.1 \sim 5.2$	5.0~5.1	$13/5.5\sim5.64$	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	$5.12 \sim 5.2$	$14/5.6\sim5.64$	$5.5 \sim 5.6$	5.4~5.5	$5.3 \sim 5.4$		$5.1 \sim 5.2$	J 5 / 5.5~5.62		5.3~5.4	5.2~5.3	$5.1 \sim 5.2$	$5.0 \sim 5.1$) 6 / 5.5~5.6	$5.4 \sim 5.5$	5.3~5.4	5.2~5.3	$5.1 \sim 5.2$	$5.0 \sim 5.1$

動物遺体の出土量(2)

その他・備考					•											-																-				
サル 獣骨片(g)					0.26		0.32	0.73		0.62	60.0	5.94						68.0						2.87	6.52	2.00	0.20	-			0.34		0.72		1.40	253
41																																				
シカ			角片2					角片 1											角片1				角片1								L踵骨					
47.99																	椎体1											4 R c								
1×																																				
アナガマ																																				
クヌキ																		RM1																		
カニ類 カエル類 カメ類 トリ類 ネズミ類			L下顎																														,			
頃トリ類																	ن																			
類カメ											2	& ro					甲板																			
頁力工ル							椎体1		7		不明5	椎骨3 肢骨5								1											1					<u> </u>
九二類									銋脚7											鉗脚1		~									鉗脚4					
出土地点	J 7 / 5.5~5.55	5.4~5.5	$5.3 \sim 5.4$	$5.2 \sim 5.3$	$5.1 \sim 5.2$	5.0~5.1	J 8 / 5.6~5.75	5.5~5.6	5.4~5.5	5.3~5.4	$19/5.6\sim5.7$	5.5~5.6	5.4~5.5	5.3~5.4	5.23~5.3	$J10/5.6\sim5.66$	$5.5 \sim 5.6$	5.4~5.5	$5.3 \sim 5.4$	5.2~5.3	$5.1 \sim 5.2$	$J11 / 5.6 \sim 5.63$	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	$5.1 \sim 5.2$	$5.0 \sim 5.1$	$J 12 / 5.5 \sim 5.6$	$5.4 \sim 5.5$	5.3~5.4	5.2~5.3	$5.1 \sim 5.2$	$5.0 \sim 5.1$	$J13 / 5.5 \sim 5.58$	$5.4 \sim 5.5$	53~54

動物遺体の出土量(3)

																												_					1	П	\neg
その他・備考														タヌキ?前臼歯歯根										獣類手・足根片 1											
サル 獣骨片(g)										0.73	1.73	7.33	12.05	0.90					1.58	3.23	4.79	5.44	0.26	0.03 獣		3.24	4.33	0.34	0.47	4.76	2.32	0.34		0.17	09:0
サル																					R I 1													_	
シカ													R寬骨臼片							角片1	L脛骨・中手骨片 2								-						
1155		L第4足根ほか										-	R大腿骨·R基節骨																					L M ₂	
17																																			
アナグマ																																			
キ ×を			ΓI¹																	切断2 前臼断2		L_{I_1} L_{M_1}													
ネズミ類						基節骨																													
トリ類																													雒片3						
カメ類																																			
カニ類 カエル類 カメ類 トリ類 ネズミ類									肢骨 1		-																								
力二類		鉗脚 2												鉗脚 5																					
出土地点	$113 / 5.2 \sim 5.3$	5.1~5.2	5.0~5.1	4.95~5.0	J 14 / 5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~5.2	5.0~5.1	C1/6.9~.696	6.9~8.9	6.7~6.8	2.9~9.9	$6.5\sim6.6$	$6.4 \sim 6.5$	$6.3 \sim 6.4$	6.19~6.3	C 2 / 6.9~6.96	6.9~8.9	6.7~6.8	2.9~9.9	6.5~6.6	6.4~6.5	6.3~6.4	6.16~6.3	C 3 / 6.9~6.96	6.9~8.9	6.7~6.8	2.9~9.9	6.5~6.6	6.4~6.5	6.3~6.4	6.2~6.3	6.1~6.2	$6.0 \sim 6.1$

動物遺体の出土量(4)

L大腿骨 "	"	1	(切断片) 1 "		"	u u	"	"	"R中足骨	n n	"	"	"	n			シカ?上腕骨		(大型トリ類脛	
L大腿骨		1	新 片)1							- 1		\dashv			" "	u u	"		管状垂節(7 骨製)2	
L大腿骨		1	新片) 1															43.22		
L大腿骨		1	斯 开) 1																	
ļ			角片 (切	1M1	下顎骨 (下縁部)	R大腿骨	R脛骨	距骨			RM³		角片1	R落角1 (角座部)	角枝1			角片(加工痕あり)		
	R I 1	R頭頂骨		L基節骨						R側頭骨		$R P_4 \cdot M_1 \cdot M_2 \cdot M_3$				R上腕骨		歯片・鼓室・肋骨片	上類骨: RM ^{2·3} 下類骨: LP ₄ ~ (M ₃) 遊離歯: LM ² ·R dm ₄ RM ¹ ·RM ² R (M ₃) L類白歯·R下類子 L頭頂骨·R類骨 L頭頂骨·R類骨 L頭頂骨·R類骨 L頭頂骨·R熱骨	
																			R 上腕骨	
																		I R P ⁴ K M I 新節骨		
																		豳 1		ΓI
1	\top	1																		
	\dashv	\downarrow	-						-	-	-						_			
	_																	13 路		針脚 16
	- 1	6.4~6.5	7 / 6.7~6.8	11 / 6.6~6.7	· ` '		17 / 6.7~6.8	区唯		2 / 6.5~6.6	5 / 6.4~6.5	玄混土貝層	2 / 6.6~6.7	調査区貝層	39 / 5.4~5.5	\sim 1	\sim 1	·	獲	土壙墓2
		/ 6.4∼6.5	3 / 6.4~6.5 1 / 6.4~6.5	3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8	B3/64~6.5 B4/64~6.5 C7/6.7~6.8 C8/6.6~6.7 C11/6.6~6.7	- - - - \		3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8	3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8 IT / 6.7~6.8	3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 5 / 6.8 17 / 6.7~6.8	3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 1 / 6.5~6.6	3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 5 / 6.4~6.5 5 / 6.4~6.5	3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 5 / 6.4~6.5 5 / 6.4~6.5 Z建士月層	3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 1 / 6.5~6.6 2 / 6.5~6.6 5 / 6.4~6.5 区框上頁層 2 / 6.6~6.7	3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 1 / 6.5~6.6 2 / 6.5~6.6 5 / 6.4~6.5 区提土貝層 2 / 6.6~6.7 調査区貝層	3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 CK唯 1 / 6.5~6.6 5 / 6.4~6.5 EX提上頁層 2 / 6.5~6.6 2 / 6.5~6.6 3 / 5.4~6.5 III / 6.7~6.8 III / 6.7~6.8 III / 6.7~6.8 III / 6.7~6.8 III / 6.5~6.6 III / 6.5~6.5 III / 6.5~6.6 III / 6.5~6 III / 6.5~6	3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 5 / 6.4~6.5 5 / 6.4~6.5 5 / 6.4~6.5 8 dirige	3 / 64~6.5 4 / 64~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8 CE 17 / 6.5~6.6 5 / 6.4~6.5 5 / 6.4~6.5 5 / 6.4~6.5 6 / 5.2~5.3 8 / 5.2~5.3	3 / 6.4~6.5 4 / 6.4~6.5 7 / 6.7~6.8 8 / 6.6~6.7 11 / 6.6~6.7 13 / 6.8~6.92 14 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.8 17 / 6.7~6.6 2 / 6.5~6.6 5 / 6.4~6.5 区提士見層 2 / 6.6~6.7 調査区員層 39 / 5.4~5.5 6 / 5.2~5.3 8 / 5.2~5.3 8 / 5.2~5.3 8 / 5.2~5.3	6.4~6.5 6.4~6.5 6.7~6.8 6.6~6.7 6.8~6.9 6.6~6.8 6.5~6.6 6.5~6.6 6.5~6.6 6.4~6.5 6.4~6.5 6.5~6.6 6.5~6.6 6.5~6.6 6.5~6.6 6.5~6.7 8.51 8.51 8.51 8.51 8.52 8.52 8.52 8.53 8.52 8.53 8.53 8.53 8.53 8.53 8.53 8.53 8.53

ノンシャ学選表

	インツン	計測表	(Bd:遠位端幅	Bp:近位端幅)		
出土地点	上腕骨	榛骨	脛骨	县 顧	距骨	第3中手骨
L6/5.2~5.3	Bd 48.00±(R)					
1号土壙墓下層			Bd 27.40±(R)			Bp 23.00 \pm (L)

イノシン歯牙計測表

		イノシン顎骨片・歯牙計測表(上段:歯冠長 下段:歯冠幅)	牙計測表	(上段: 歯冠	長 下段:	極冠幅)			
出土地点	資料名	歯列長	M^2	M^3	d m4	P_4	\mathbf{M}_1	M_2	M ₃
C3/6.1~6.2	左下顎歯				-			? 12.68	
Dグリッド 混貝土層	右下顎歯 (同一個体か?)					15.81 10.15	17.42 11.03	21.12 14.06	35.41 16.36
	右上顎骨片		21.14	؟ 21.15					
正 十 其 二	左下顎骨片	$P_4 \sim \langle M_3 \rangle : 84.79$ $M_1 \sim \langle M_3 \rangle : 71.68$				14.62 9.82	16.92 12.26	21.90 15.43	⟨?⟩ 35.09
1 方工懶盝 1 僧	右下顎歯 (同一個体か?)	$d m_4 \sim M_2 : 58.26$			19.39 9.31		18.04 11.44	22.87 14.83	⟨?⟩ 13.48
	左下顎歯							؟ 14.91	

シカ計測表

	ĦĮII.			B 24.24
	田	-		B 2
	町	2(L)		
聖	腫	Bd 36.72(L)		
T 位端	D###.	Bd		
Bp:近位端幅)	車		0(R)	
	脛		Bp 58.30(R)	
b 位端			Bp	
(Bd:遠位端幅	Ąm			
表 (E	燕			
計測				
ジカ	יוולנו			
ニホンジカ計測表	上腕骨			
1	'			
	गाः	~5.3	C17/6.7~6.8	貝層
	出土地点	J12/5.2~5.3	6.7	Cグリッド貝層
	Ħ	12/	117/	ジグリ
	<u> </u>		\cup	

出土遺物観察(一覧)表

1. 土器観察表

番号		出土地点	時期	部位	文様などの特徴	胎土虫	(色調一)
	N N	遺構・層位				の砂粒	(外面/内面)
1 2		1号土壙墓・下層	前期IV			1 mm以下	にぶい橙
3		1号土壙墓・下層 1号土壙墓・下層	前期IV				にぶい橙
$\frac{3}{4}$,	前期IV 前期IV		内外面の肥厚帯に縄文LR、口縁部に竹管文		にぶい橙
5		1号土壙墓・下層 1号土壙墓・下層	前期IV		内外面の肥厚帯に縄文LR、口縁部に竹管文	1 mm以下	にぶい橙
$\frac{3}{6}$	C-D		前期IV		縄文R L 縄文R L	1 mm以下 1 mm以下	にぶい褐
7	C-D	T 7	前期IV		縄文RL、貼り付け突帯上に押引き竹管文		橙~にぶい褐
8	C-D		前期IV		縄文LR、貼り付け突帯上に押引き竹管文	1 mm以下	黒褐/にぶい橙
9		1号土壙墓・下層	前期IV		縄文LR、貼り付け突帯上に押引き竹管文	1 mm以下	にぶい褐
10		1号土壙墓・下層	前期IV		縄文LR、貼り付け突帯上に押引き竹管文	1 mm以下	にぶい褐
11		1号土壙墓・下層		2/3 残存	縄文RL	1 mm以下	にぶい橙~黒褐
12		1号土壙墓・下層	前期IV		縄文LR	1~2 mm	灰黄褐
13		1号土壙墓・下層		胴部下半	縄文RL		にぶい黄橙~褐灰
14		1号土壙墓・下層		胴部下半	縄文RL		にぶい黄橙~黒褐
15		1号土壙墓・下層	前期IV		無文、内面は平滑		にぶい黄橙
16		1号土壙墓・下層			無文、器表に指頭様の押圧		灰黄褐
17		1号土壙墓・上層	前期IV		内面の肥厚帯に縄文LR、突帯上に竹管文		にぶい橙~黒褐
18		1号土壙墓・上層	前期IV		内面の肥厚帯に縄文LR、突帯上に竹管文		にぶい橙
19		1号土壙墓・上層	前期IV		外面の肥厚帯に縄文RL		にぶい橙
20	C-D		前期IV	口縁部	縄文RL、内面に縄文帯	1 mm以下	橙
21	C-D		前期IV		縄文RL、内面に縄文帯	1 mm以下	にぶい橙
22	C-D	1号土壙墓・上層	前期IV		縄文RL、内面に縄文帯		にぶい橙~褐灰
23	C-D	1号土壙墓・上層	前期IV	口縁部	縄文RL、内面に縄文帯	1 mm以下	灰黄褐~褐灰
24	C-D	1号土壙墓・上層	前期IV	胴 部	縄文RL、貼り付け突帯上に押引き竹管文	1 mm以下	灰黄褐
25	C-D	1号土壙墓・上層	前期IV	胴 部	貼り付け突帯上に押引き竹管文	1 mm以下	にぶい橙
26	C-D	1号土壙墓・上層	前期IV	胴 部	貼り付け突帯上に押引き竹管文	1 mm以下	にぶい橙
27	C-D	1号土壙墓・上層	前期IV	胴 部	貼り付け突帯上に押引き竹管文	1 mm以下	にぶい橙~褐灰
28		1号土壙墓・上層	前期IV		貼り付け突帯上に押引き竹管文	1 mm以下	にぶい橙~褐灰
29	C-D	1号土壙墓・上層	前期IV		縄文RL		橙
30	C-D		前期IV		縄文RL、口縁は小さい波状となる	1 mm以下	灰黄褐
31	C-D		前期IV		口縁は小さい波状となる	1 mm以下	にぶい黄橙
32	C-D		前期IV		口縁端に刻目	1 mm以下	灰黄褐
33	C-D			口縁部	竹管状工具による押引き刺突文		にぶい黄橙
34		1号土壙墓・上層	前期IV		器表に指頭様の押圧		橙
35		1号土壙墓・上層	前期IV		無文		にぶい黄橙~褐灰
36		2号土壙墓	前期IV		貼り付け突帯上に押引き竹管文		にぶい橙~浅黄
37		2号土壙墓	前期IV		縄文RL	1 mm以下	明赤褐~黒褐
38		2号土壙墓		胴 部	縄文RL		明赤褐~黒褐
		2号土壙墓	前期IV		縄文RL		明赤褐~黒褐
40	F	土壙1	前期IV		外面の肥厚帯に縄文RL、突帯上に竹管文	1 mm以下	
41		土壙1	前期IV 前期IV		縄文尺上	1 mm以下	
	F F	土壙1			縄文RL 縄文RI	1 mm以下	
43		土壙 1 淡褐色混礫土	前期IV 早期?	胴 部 口縁部	縄文RL 内外に二枚目条度、口急機に目標に度		にぶい黄橙 明黄褐〜暗灰黄
45		茨陶巴庇傑工 茶褐色土	中期? 前期 I		内外に二枚貝条痕、口縁端に貝殻圧痕 内外に二枚貝条痕、口縁外面を肥厚し刺突文		明寅橋~暗灰寅 にぶい橙
46	E	貝層	前期I		内外に二枚貝条根、口縁外面を肥厚し炯矢又内外に二枚貝条痕、口縁外面を段状に肥厚		灰黄褐~褐灰
47	C	<u>具層</u> 貝屬		口縁部	内外に二枚貝条痕、口縁外面を投状に肥厚	$1 \sim 2 \text{ mm}$ $1 \sim 2 \text{ mm}$	灰黄褐
48		黄褐色土		胴部	内外に二枚貝条痕	$1 \sim 2 \mathrm{mm}$	にぶい黄橙
49		黄褐色土	前期Ⅲ		竹管状工具による押引き刺突文	1 mm以下	褐灰
50		黄褐色土	前期IV		内面の肥厚帯に縄文RL	1 ~ 2 mm	灰黄
51		黄灰褐色土	前期Ⅳ		内面の肥厚帯に縄文RL	$1 \sim 2 \mathrm{mm}$	にぶい橙~褐灰
52		黄灰褐色土	前期Ⅳ		縄文RL	1 ~ 2 mm	にぶい黄橙
53		黄灰褐色土		胴部	縄文RL		灰黄褐
54		黄灰褐色土	前期IV		縄文RL		にぶい橙
					Li-Ti-Forming and a second and a		

				r			A -m
番号	出		時期	部位	文様などの特徴	胎土中の砂粒	色調 (中南 / 外南)
	N N	遺構・層位		الراب مياب الراب مياب	₩-++ To T	の砂粒	(内面/外面)
55		黄灰褐色土	前期IV		縄文RL	1 mm以下	
56		黄褐色土	中期I		縄文RL、内面、口端に縄文		灰黄褐
57		暗褐色土	中期I		縄文RL、内面に縄文		灰黄
58		黄灰褐色土	中期Ⅱ		突帯による施文	1 ~ 2 mm	
59		暗褐色土	後期I		縄文RL、磨消縄文		にぶい褐〜褐灰
60	E-F	暗褐色土	後期Ⅱ		縄文RL、3本沈線による磨消縄文	$1 \sim 2 \mathrm{mm}$	
61	F	黄茶褐色土	後期Ⅲ		垂下条線		灰黄
62	С	暗茶褐色土	後期IV		縄文RL、口縁に沿って1条の沈線		灰黄褐
63	F	黄茶褐色土	後期IV	口縁部	口端に沈線、外面に縄文帯RL	$2 \sim 3 \mathrm{mm}$	
64	E	黄茶褐色土	後期IV	口縁部	外面をわずかに肥厚させ、縄文帯LR	1 mm以下	にぶい黄橙
65	E	暗褐色土	後期IV	口縁部	外面をわずかに肥厚させるが、縄文を有しな い	1 mm以下	にぶい黄橙
66	F	黄茶褐色土	後期IV	口縁部~胴部	胴部と口縁内面に結節縄文RL	1 mm以下	明褐~褐灰
67		黄茶褐色土	後期	口縁部	内面ミガキ、外面は巻貝による調整のちナデ	1 ~ 2 mm	にぶい黄橙〜灰黄褐
68		黄茶褐色土	後期IV	底 部	内外ともナデ	1 mm以下	明褐~褐灰
		5.5~5.6	前期Ⅱ		区画線を伴う爪形文	1 ~ 2 mm	にぶい橙~褐灰
		5.1~5.2			区画線を伴う爪形文		にぶい橙~褐灰
		5.5~5.6	前期Ⅱ		区画線を伴う爪形文		にぶい橙~褐灰
72		5.2~5.3	前期Ⅱ		区画線を伴う爪形文		にぶい橙~褐灰
73		貝層	前期Ⅱ		連続爪形文	1 mm以下	
_		5.5~5.6	前期Ⅱ		縄文LR		灰黄褐
		5.6~5.7	前期Ⅱ		羽状縄文	1 ~ 2 mm	
76		6.3~6.4	前期Ⅲ		押引き刺突文	$1 \sim 2 \mathrm{mm}$	
					押引き刺突文		褐灰~灰黄褐
77		貝層	前期Ⅲ				橙
78		6.3~6.4	前期IV				
		6.3~6.4	前期IV		縄文RL、貼り付け突帯上に押引き刺突文	1 ~ 2 mm	
80		5.3~5.4	前期IV		縄文LR、低い貼り付け突帯上に刻目		褐灰
81		6.5~6.6	前期IV		縄文LR、内外面を肥厚し縄文帯		にぶい黄橙
82		6.4~6.5	前期IV		縄文RL、内面を肥厚し縄文帯	1 ~ 2 mm	橙
83		6.3~6.4	前期IV		縄文RL、内面に縄文帯		橙~褐灰
84	B1	6.5~6.6	前期IV		·	1 mm以下	
85	B1	6.3~6.4	前期IV			1 mm以下	
86	J12	5.3~5.4	前期IV				灰黄
87	I	貝層	前期IV		縄文不明、貼り付け突帯上に押引き刺突文		橙~黒褐
88	A6	6.7~6.8	中期I	口縁部	縄文RL、内面に縄文帯、外面に爪形文	1 ~ 2 mm	明黄褐~橙
89	I17	5.6~5.7	中期I	山 <i>郡</i> 部 	縄文RL、口端に刻目、内面を肥厚させ縄文 帯とし、外面に平行竹管文	$1 \sim 2 \mathrm{mm}$	
90	B2	6.3~6.4	中期I		縄文RL、内面に縄文帯、外面に二枚貝圧痕		
91	J12	5.5~5.6	中期I	胴 部	内外面に縄文RL	$1 \sim 2 \mathrm{mm}$	にぶい褐~橙
		5.4~5.5		胴 部	内外面に縄文RL、外面に爪形文を施文	$1 \sim 2 \mathrm{mm}$	にぶい褐〜橙
93		6.5~6.6		口縁部	突帯文と平行竹管文	$2 \sim 3 \mathrm{mm}$	にぶい黄橙
94	_	6.3~6.4	中期Ⅲ		突帯文と平行竹管文	1 ∼ 2 mm	にぶい黄橙
95		6.3~6.4		胴 部	突帯文と平行竹管文	1 ~ 2 mm	にぶい黄橙
96		6.35~6.5		胴 部	突帯文と平行竹管文		にぶい黄橙
97		貝層	中期Ⅲ		縄文LR、平行竹管文		にぶい黄橙
98		6.19~6.3	中期Ⅲ		縄文不明、平行竹管文		にぶい黄橙
99	_	6.5~6.6	中期Ⅲ		縄文LR、平行竹管文		にぶい黄橙
		6.4~6.5	中期皿	 	縄文LR		にぶい黄橙
		6.3~6.4		口縁部	口縁に刺突文と縦位の沈線		灰黄
		6.3~6.4	中期Ⅲ		太く浅い沈線文		にぶい黄橙~橙
	_	6.4~6.5		胴部	太く浅い沈線文		にぶい黄橙~橙
		6.4~6.5		胴~底部	縄文LR、太く浅い沈線文		にぶい黄橙~橙
		6.32	中期Ⅱ		棒状工具による刺突文		にぶい黄橙~橙
				底 部			灰黄褐
		6.3~6.4	中期		縄文RL		灰黄褐~橙
		5.4~5.5		底 部	縄文LR、底面に縄の圧痕		
	_	5.4~5.5		口縁部	縄文RL、磨消縄文		橙
	+	5.6~5.7		口縁部	縄文R L 、磨消縄文		橙
		5.6~5.7		口縁部	縄文RL、磨消縄文	1 ~ 2 mm	
	_	6.6~6.7	 	口縁部	縄文RL、磨消縄文		暗灰黄~黒
112	C22	6.7~6.8	後期I	口縁部	縄文RL、磨消縄文	$1 \sim 2 \mathrm{mm}$	にぶい黄橙〜黄灰

番号	岸	土地点	時	期	部位	文様などの特徴	胎土中	色調(分表/中本)
112	区区	遺構・層位 5.4~5.5	56. H	1 т	rı (⊒. †/7	個子り! 廃災個子	の砂粒	(外面/内面)
113 114			·	•	口縁部 胴 部	網文RL、磨消縄文	1 mm以下	110 17 1 1111
	F	貝層	後期後期			縄文RL、2本沈線による磨消縄文 縄文RL、3本沈線による磨消縄文	$1 \sim 2 \mathrm{mm}$ $1 \sim 2 \mathrm{mm}$	
115 116		貝層 貝層				縄文RL、3本ル線による磨消縄文		
					胴 部		1 ~ 2 mm	
		6.5~6.6			橋状把手	縄文RL ロロス ロロス ロロマン ユガルナンサイ	1 ~ 2 mm	
118 119	_	6.4~6.5 6.5~6.6	_		口縁部 口縁部	縄文RL、口縁外側を肥厚させ弧状文を描く 縄文LR、口縁外側を肥厚させ渦文を描く		にぶい黄橙〜黄灰
		$6.5 \sim 6.6$ $6.4 \sim 6.5$	-	 	口縁部		$2 \sim 3 \text{ mm}$ $1 \sim 2 \text{ mm}$	暗灰黄
121		6.7~6.8			口縁部	縄文RL、口縁外側を肥厚させ縁帯文とする 口縁内側を肥厚させ短沈線による文様を描く		灰黄褐~黒褐
$\frac{121}{122}$		6.5~6.5			口縁部	口縁内側を肥厚させ縄文RLを施す	$1 \sim 2 \mathrm{mm}$	
123		6.5~6.5					$1 \sim 2 \text{ mm}$ $1 \sim 2 \text{ mm}$	
			_		口縁部	口縁内側を肥厚させ沈線文、縄文RLを施す口骨中側を肥厚させ沈線文、縄文RLを施す		灰黄褐
124	_	6.4~6.5		~~~	口縁部	口縁内側を肥厚させ沈線文、縄文RLを施す	1 ~ 2 mm	灰黄褐
125 126		6.4~6.5 6.6~6.7			口縁~胴部 胴 部	口縁上端を拡張させ沈線文、胴部に垂下条線	1 ~ 2 mm	黄褐
		6.4~6.5			 	頸部と胴部の境に段、胴部には垂下条線 中高は2本の平台波線上原波線で埋みれる。	1 ~ 2 mm	
121	ועו	0.4~0.5	1 (交共	1 Ш	橋状把手	内面は2本の平行沈線と短沈線で描かれる	1 ~ 2 mm	橙~褐
128		6.6~6.7	後期		口縁部	口縁に平行して2本の沈線、その間に縄文R L		にぶい黄橙〜灰黄褐
129	D2	6.5~6.5			1/3残存	口縁部と胴部に無節縄文LR、頸部は無文	1 ~ 2 mm	にぶい黄橙〜灰黄褐
130	A7	6.8~6.9	後期	IV	口縁部	縄文LR、波状口縁	1 ~ 2 mm	黒褐
131	А3	6.7~6.8	後期	IV	口縁部	縄文LRの疑似羽状縄文、口縁に平行して沈 線	1 ~ 2 mm	にぶい橙~灰黄褐
132	C8	6.8~6.94	後期	IV	口縁部	側面にループの付いた縄文LR、横位の平行 沈線	1 mm以下	にぶい橙~灰黄褐
133	C9	6.7~6.8	後期	IV	胴 部	縄文RL、縄文との境に列点をめぐらす	1 ~ 2 mm	灰黄褐
134	C8	6.5~6.5	後期	IV	胴 部	縄文RL	1 mm以下	にぶい黄橙
135	B4	6.7~6.8	後期	ĪV	胴 部	縄文RL、頸部無文、胴部縄文	1 ~ 2 mm	浅黄~黄灰
136	D9	6.5~6.5	後期	IV	口縁部	縄文RL、内側に沈線をめぐらし内外に縄文 帯	1 ~ 2 mm	暗黄灰
137	D9	6.6~6.7	後期	IV	口縁部	縄文LR、外面に縄文帯	1 ~ 2 mm	橙~灰褐
_		6.7~6.8			口縁部	縄文RL、内側に沈線をめぐらし縄文帯	1 mm以下	黄灰
139	C23	6.7~6.8	後期	IV	口縁部	口縁部には縄文をもたない	2~3 mm	にぶい黄橙
140	С	貝層			口縁部	口縁部には縄文をもたない		にぶい黄橙~橙
141	A6	6.6~6.7			口縁部	縄文RL、外面に縄文帯		灰褐~灰
142	D	貝層	後期	IV	口縁部	縄文LR、外面に縄文帯		
143	C8	6.8~6.94	後期	IV	口縁部	口縁内側に円形刺突列、口端に浅い刻目	1 mm以下	橙~黄橙
144	C6	6.7~6.8	後期	IV	口縁部	口縁部に2本の沈線を引き、刺突を加える	1 mm以下	にぶい黄橙~褐灰
145	F8	6.4~6.5	後	期	口縁部	波頂部に線刻状の刻目	1 ~ 2 mm	にぶい褐
146	С	貝層			口縁部	波頂部が水平	1 mm以下	橙~にぶい黄橙
	J4	5.5~5.6			口縁部	口端に棒状工具による刻目	1 ~ 2 mm	
		5.4~5.5			口縁部	波状口縁、巻貝調整痕を残す	1 ~ 2 mm	黄灰
149		5.4~5.5			口縁部	口端に竹管状工具による刺突、内面ナデ、外 面巻貝調整		橙~灰黄褐
150	19	5.4~5.5	後	期	口縁~胴部	口端に棒状工具による刻目、穿孔あり、内面 ナデ、外面巻貝調整のちナデ	1 ~ 2 mm	灰黄褐
151	C8	6.8~6.94	後	期	口縁部	内外面とも巻貝調整痕	1 mm以下	暗灰黄
152		6.8~6.93			口縁部	内外面とも巻貝調整痕	1 ~ 2 mm	にぶい黄橙~灰黄褐
		6.7~6.8			口縁部	内面巻貝調整のち粗いナデ、外面には粘土帯 の継ぎ目が残る	2 ~ 3 mm	にぶい黄橙
154	A 5	6.8~6.9	後	期	口縁部	巻貝調整のち内面ミガキ、外面ナデ	1 ~ 2 mm	褐灰
-	_	6.6~6.7			口縁部	内面縦位ヘラミガキ、外面横位ヘラミガキ		明黄褐
		6.4~6.5			口縁部	内面ミガキ、外面ナデ		橙~黒褐
		5.4~5.5			2/3残存	内外面ナデ	1 ~ 2 mm	にぶい橙
		6.7~6.8			1/2残存	内面ミガキ、外面口縁部ミガキ、胴部以下ナ デ		灰黄褐/黒

1. 石器計測表

番号	区	グリッド	レベル・遺構	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	整理番号
1	北		1 号土壙墓	石鏃	サヌカイト	(1.25)	1.05	0.29	(0.3)	107
2	北		1号土壙墓	石鏃	サヌカイト	1.42	1.07	0.32	0.3	101
3	北		1号土壙墓	石鏃	サヌカイト	(1.32)	1.23	0.25	(0.4)	111
4	北		1号土壙墓	石鏃	サヌカイト	(1.48)	1.20	0.33	(0.4)	105
5	北		1 号土壙墓	石鏃	サヌカイト	1.52	0.98	0.33	(0.3)	102
6	北		1 号土壙墓	石鏃	サヌカイト	(1.33)	1.30	0.27	(0.4)	116
7	北		1 号土壙墓	石鏃	サヌカイト	1.36	(1.23)	0.24	(0.49	104
8	北		1号土壙墓	石鏃	サヌカイト	1.89	1.27	0.33	0.6	103
9	北		1号土壙墓	石鏃	サヌカイト	(1.98)	1.55	0.26	(0.6)	106
10	北		1号土壙墓	石鏃	サヌカイト	1.73	(0.88)	0.24	(0.3)	110
11	北		1号土壙墓	石鏃	サヌカイト	(1.69)	(1.56)	0.29	(0.7)	112
12	北		1号土壙墓	石鏃	サヌカイト	1.34	1.06	0.25	0.3	108
13	北		1号土壙墓	石鏃	サヌカイト	1.23	0.89	0.21	0.2	113
14	北		1号土壙墓	石鏃	サヌカイト	1.67	1.02	0.55	0.8	115
15	北		1号土壙墓	石鏃	サヌカイト	2.44	1.05	0.27	0.4	114
16	北		1号土壙墓	石匙	サヌカイト	3.31	4.39	0.45	6.1	120
17	北		1号土壙墓	異形石器	サヌカイト	5.16	(4.52)	0.60	(11.6)	119
18	北		1号土壙墓	スクレイパー	サヌカイト	2.43	3.15	0.29	2.6	121
19	北		1号土壙墓	スクレイパー	サヌカイト	4.54	6.56	1.60	49.3	122
20	北		1号土壙墓	叩石 	安山岩	(7.02)	4.10	3.60	(159.2)	42
21	北北		1号土壙墓	石錘石錘	玄武岩	6.11	5.85 3.96	2.25 1.00	99.8 33.2	124 123
23	北北		1号土壙墓		ガタカイト	1.26	1.45	0.31	0.3	125
23	北北		2号土壙墓	石鏃石鏃		1.70	1.45	0.31	0.3	126
25	北		2号土壙墓	石錘	サヌカイト 粘板岩	5.68	4.00	1.53	52.9	128
26	北		2号土壙墓	石錘		5.62	4.00	1.40	45.9	129
27	北		2号土壙墓	石錘	流紋岩	5.21	3.42	1.46	(31.2)	127
28	北		2号土壙墓	石錘	砂岩	4.03	3.55	1.39	25.1	130
29	北	F	土壙1	石鏃	サヌカイト	2.77	1.89	0.49	(2.3)	51
30	北	F	土壙1	石鏃	サヌカイト	1.72	1.32	0.40	0.7	117
31	北	F	土壙1	石鏃	サヌカイト	(1.33)	(1.20)	0.31	(0.3)	52
32	北	F	土壙1	石鏃	サヌカイト	1.79	1.23	0.29	0.15	53
33	北	C		石鏃	サヌカイト	(0.84)	(1,10)	0.30	(0.3)	19
34	北	A		石鏃	サヌカイト	1.48	(1.04)	0.24	(0.3)	1
35	北	D		石鏃	サヌカイト	(1.57)	1.35	0.23	(0.3)	27
36	北	F	6.1~6.25	石鏃	サヌカイト	1.71	1.34	0.33	0.4	54
37	北	E		石鏃	サヌカイト	2.18	1.49	0.41	0.8	33
38	北	E		石鏃	サヌカイト	(1.84)	(1.31)	0.24	(0.7)	37
39	北	E		石鏃	サヌカイト	2.15	1.98	0.54	1.5	35
40	北	F	6.2~6.25	石匙	サヌカイト	3.53	(7.06)	0.78	(16.7)	68
41	北	F		石匙	サヌカイト	(4.69)	6.65	0.73	(20.6)	69
42	北	F		石匙	サヌカイト	2.91	3.66	0.60	3.2	65
43	北	F		スクレイパー	サヌカイト	3.26	8.36	0.68	20.8	73
44	南	J		スクレイパー	サヌカイト	3.32	4.23	0.84	13.7	92
45	南	K	5.2	石核	サヌカイト	5.72	8.81	3.05	169.4	97
46	南	J5	5.0~5.1	石鏃	サヌカイト	1.01	(1.33)	0.20	(0.2)	86
47	北	D4	6.4~6.5	石鏃	サヌカイト	1.69	1.72	0.39	0.7	28
48	北	C3	6.2~6.3	石鏃	サヌカイト	(1.45)	1.03	0.25	(0.3)	11
49	北	C1	6.5~6.6	石鏃	サヌカイト	1.69	0.98	0.17	0.2	10
50	北	A1	6.23~6.3	石鏃	サヌカイト	1.87	1.37	0.25	0.4	2
51	北	C2	6.5~6.6	石鏃	サヌカイト	2.10	1.54	0.27	0.6	14
52	南	J10	5.3~5.4	石鏃	サヌカイト	2.60	(1.73)	0.28	(0.7)	90
53	北北	D8	6.4~6.5	石鏃	サヌカイト	2.70	(1.80)	0.31	(0.9)	29
54	北北	C2	6.16~6.3	石鏃	サヌカイト	2.52	1.60	0.37	1.1	15
55	北	A7	6.3~6.4	石鏃	サヌカイト	2.79	1.73	0.59	1.4	
56	南北	I10	5.6~5.71	石鏃	サヌカイト	1.83	1.43	0.29	(0.9)	80
57	北北	C5	6.4~6.5	石鏃	サヌカイト	(1.75)	(1.96)	0.33	(0.9)	18
58	北	C3	6.2~6.3	石鏃	サヌカイト	2.07	(1.96)	0.49	(1.6)	17

()内は現存値

番号	X	グリッド	レベル・遺構	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	整理番号
59	北	C24	6.54~6.6	石鏃	サヌカイト	1.66	1.28	0.35	0.7	16
60	南	I12	5.6~5.74	石鏃	サヌカイト	2.35	1.70	0.43	1.3	81
61	南	J2	5.1~5.2	石鏃	サヌカイト	(2.11)	(1.57)	0.36	(0.7)	88
62	北	C24	6.54~6.6	石鏃	サヌカイト	2.14	(0.76)	0.30	(0.5)	20
63	南	J13	5.1~5.2	石鏃	サヌカイト	3.55	0.72	0.45	1.2	89
64	北	D16	6.4~6.5	石鏃	サヌカイト	4.31	1.33	0.43	2.8	30
65	南	L2	5.72	石鏃	サヌカイト	4.59	1.70	0.73	6.6	98
66	南	L16	5.3~5.4	石槍	サヌカイト	13.83	3.52	1.22	56.7	99
67	南	L14	5.5~5.6	スクレイパー	サヌカイト	4.90	5.79	1.51	44.4	100
68	北	B4	6.4~6.5	スクレイパー	サヌカイト	8.67	2.92	1.43	47.3	7
69	南	J2	5.1~5.2	スクレイパー	サヌカイト	4.99	8.94	0.92	50.4	93
70	南	I	5.14	ノッチ	黒曜石	5.49	2.98	1.25	22.0	83
71	北	C6	6.36~6.4	石核	サヌカイト	7.23	6.21	2.68	141.6	22
72	北	A3	6.4~6.5	石錘	デイサイト	7.57	6.21	2.16	153.1	5
73	南	L3	5.4~5.5	石錘	アプライト	5.09	4.61	1.86	64.6	25
74	南	J2	5.4~5.5	装身具	滑石	4.66	304	0.67	10.7	
75	北	C3	6.4~6.5	装身具	蛇紋岩	1.79	1.00	0.69	1,6	

()内は現存値

3. 遺構出土石器組成表

番号	×	グリッド	レベル・遺構	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	整理番号
59	北	C24	6.54~6.6	石鏃	サヌカイト	1.66	1.28	0.35	0.7	16
60	南	I12	5.6~5.74	石鏃	サヌカイト	2.35	1.70	0.43	1.3	81
61	南	Ј2	5.1~5.2	石鏃	サヌカイト	(2.11)	(1.57)	0.36	(0.7)	88
62	北	C24	6.54~6.6	石鏃	サヌカイト	2.14	(0.76)	0.30	(0.5)	20
63	南	J13	5.1~5.2	石鏃	サヌカイト	3.55	0.72	0.45	1.2	89
64	北	D16	6.4~6.5	石鏃	サヌカイト	4.31	1.33	0.43	2.8	30
65	南	L2	5.72	石鏃	サヌカイト	4.59	1.70	0.73	6.6	98
66	南	L16	5.3~5.4	石槍	サヌカイト	13.83	3.52	1.22	56.7	99
67	南	L14	5.5~5.6	スクレイパー	サヌカイト	4.90	5.79	1.51	44.4	100
68	北	B4	6.4~6.5	スクレイパー	サヌカイト	8.67	2.92	1.43	47.3	7
69	南	J2	5.1~5.2	スクレイパー	サヌカイト	4.99	8.94	0.92	50.4	93
70	南	I	5.14	ノッチ	黒曜石	5.49	2.98	1.25	22.0	83
71	北	C6	6.36~6.4	石核	サヌカイト	7.23	6.21	2.68	141.6	22
72	北	A3	6.4~6.5	石錘	デイサイト	7.57	6.21	2.16	153.1	5
73	南	L3	5.4~5.5	石錘	アプライト	5.09	4.61	1.86	64.6	25
74	南	J2	5.4~5.5	装身具	滑石	4.66	304	0.67	10.7	
75	北	C3	6.4~6.5	装身具	蛇紋岩	1.79	1.00	0.69	1.6	

4. 骨角貝製品観察表

	ŀ	出土 地 点			長さ		厚さ			T0 111 15
番号	区	遺構・層位	時 期	器種	(cm)	幅(cm)	(cm)	重量(g)	素材	残存状況
1	C-D	1号土壙墓・下層	前期IV	管状垂飾	7.1	1.5	1.5	0.8	大型鳥類脛骨	完 形
2	C-D	1号土壙墓・下層	前期IV	管状垂飾	4.2	1.7	1.3	5.1	大型鳥類脛骨	完 形
3	J 5	5.4~5.5		骨製垂飾	1.2	1.2	0.5	0.4	大型エイ類椎骨	ほぼ完形
4	J 5	5.4~5.5		骨製垂飾	1.2	1.3	0.6	0.4	大型エイ類椎骨	周縁を欠く
5	J 5	5.4~5.5		骨製垂飾	(1.5)	(1.5)	0.7	0.5	大型エイ類椎骨	周縁を欠く
6	J 5	5.4~5.5		骨製垂飾	(1.4)	1.4	0.7	0.5	大型エイ類椎骨	周縁を欠く
7	J 5	5.3~5.4		骨製垂飾	1.4	1.4	0.7	0.6	大型エイ類椎骨	ほぼ完形
8	J 2	5.3~5.4		骨製垂飾	(1.4)	1.4	0.7	0.5	大型エイ類椎骨	周縁を欠く
9	J 5	5.5~5.62		貝輪			0.4	0.8	サルボウガイまたはアカガイ	小片
10	J 12	5.3~5.4		貝輪			0.4	3.5	サルボウガイまたはアカガイ	1/3残存
11	J 12	5.2~5.3		貝輪			0.4	5.1	サルボウガイまたはアカガイ	小片

)内は推定値

5. 貝層内容物表

グリッド	堆 積 (cc)	総重量 (g)	混土率 (%)	混礫率 (%)	貝殻 (g)	獣骨(g)	魚骨(g)	土器 (g)	石器類 (g)	その他 (g)
J 1 / 5.6~5.66	900	2,140	82.6	6.5	224.5	0.0	0.0	8.9	0.0	
5.5~5.6	9,900	21,400	88.3	9.5	4,457.9	0.0	0.0	16.1	0.4	
5.4~5.5	16,500	36,840	62.7	24.3	4,705.6	0.0	0.0	63.5	1.1	
5.3~5.4	20,380	45,010	57.4	25.6	7,614.5	0.0	0.1	2.4	3.8	
5.2~5.3	17,340	36,550	58.0	25.6	5,981.4	0.0	0.2	3.1	14.9	
5.1~5.2	12,900	27,570	60.4	27.5	3,346.2	0.0	0.3	0.0	0.0	
5.0~5.1	2,400	4,720	76.0	14.0	474.3	0.0	0.3	0.0	0.0	
J 2 / 5.5~5.59	6,800	13,800	83.4	6.5	1,366.4	0.6	0.2	22.1	0.0	
5.4~5.5	16,100	35,520	60.2	16.7	8,168.3	0.8	0.3	35.2	0.0	
5.3~5.4	7,100	16,280	56.9	18.2	4,058.9	0.0	0.1	3.7	0.0	骨製垂飾0.5
5.2~5.3	5,000	11,260	58.4	16.0	2,879.8	0.0	1.5	2.6	0.0	
5.1~5.2	7,400	18,740	42.7	39.5	3,248.1	0.7	1.7	34.2	56.9	
5.0~5.1	5,400	13,080	53.2	35.5	1,476.5	0.0	0.4	6.5	1.9	
J 3 / 5.5~5.68	19,600	42,210	59.5	20.5	8,460.8	0.0	0.4	6.7	0.5	
5.4~5.5	21,700	46,760	54.1	27.9	8,420.8	0.1	0.7	13.3	0.0	
5.3~5.4	16,900	38,900	46.7	36.9	5,994.5	0.0	0.8	4.0	0.0	
5.2~5.3	11,300	24,800	60.4	26.0	3,330.5	0.7	0.0	14.8	1.1	
5.12~5.2	4,900	11,920	73.2	20.3	771.7	5.3	0.0	4.8	2.4	
J4/5.6~5.64	2,000	4,940	73.1	7.3	959.5	0.2	0.0	7.1	0.0	
5.5~5.6	13,100	33,760	59.3	17.2	7,684.8	0.0	0.1	86.4	0.0	
5.4~5.5	11,800	29,720	51.4	20.1	8,466.7	0.1	0.3	19.6	0.3	
5.3~5.4	18,200	44,440	53.0	23.4	10,508.9	0.3	0.6	2.7	0.0	
5,2~5.3	12,700	31,360	47.3	36.9	4,911.7	0.3	1.5	17.9	2.4	
5.1~5.2	6,800	15,960	64.3	20.4	2,417.3	3.7	0.4	8.9	5.4	
J 5 / 5.5~5.62	17,400	44,480	68.5	13.5	7,932.3	3.7	0.4	52.4	5.5	貝輪0.8
5.4~5.5	15,100	37,580	57.3	17.8	9,328.7	0.1	0.9	23.5		骨製垂飾1.7
5.3~5.4	12,300	28,050	59.2	15.3	7,125.9	0.0	1.1	7.3	0.5	骨製垂飾0.6
5.2~5.3	14,900	34,200	63.1	13.1	8,115.5	0.0	0.6	9.7	0.1	
5.1~5.2	19,400	47,320	49.0	31.3	9,201.6	10.5	3.6	89.7	19.4	
5.0~5.1	7,800	18,460	70.8	16.4	2,360.8	0.5	1.0	14.5	0.3	
J 6 / 5.5~5.6	7,900	19,160	82.7	1.5	3,004.0	0.0	0.2	39.5	0.4	:
5.4~5.5	9,200	22,480		21.8	5,183.8	0.0	0.5	20.5	0.0	
5.3~5.4	13,200	31,060		29.4	6,947.3	21.8	2.2	65.1	2.0	
5.2~5.3	10,500	25,220		22,4	5,652.6	2.2	1.0	0.0	0.0	
5.1~5.2	2,500	6,920		19.4	1,826.1	0.0	0.1	8.4	0.0	
5.0~5.1	8,000	20,300		34.3	2,538.0	0.0	0.7	67.5	2.9	
J7/5.5~5.55	1,300	3,340			585.2	0.0	0.0	3.1	2.0	
5.4~5.5	4,300	11,060		34.9	1,653.0	0.0	0.1	1.4	8.4	
5.3~5.4	3,700	9,960		29.5	2,023.0	0.8	0.0	11.0	0.0	
5.2~5.3	3,700	9,800	ļ		1,961.3	0.0	0.1	7.0	0.0	
5.1~5.2	5,000	13,020			2,689.1	0.3	0.3	6.1	0.7	
5.0~5.1	3,700				1,527.4		0.0	8.4	0.0	
J 8 / 5.6~5.75	14,500	33,180			6,418.7	0.3	0.6	27.8	0.0	
5.5~5.6	18,800	43,240			9.570.9	4.8	0.9	49.2	0.0	
5.4~5.5	12,700	32,640			6,299.5	0.0	0.2	580.8	6.2	
5.3~5.4	10,200	24,680			4,456.1	0.6	0.8	45.7	0.6	
J 9 / 5.6~5.7	8,700	21,260			5,542.3	0.1	0.3	14.9	0.0	
5.5~5.6	15,100	37,720			9,460.8		6.2	13.5	0.0	
5.4~5.5	15,200	37,500			9,225,9		2.5		0.0	
5.3~5.4	14,400	35,540							3.5	
5.23~5.3	1,300	3,140	_		343.6		0.0		0.0	
J 10 / 5.6~5.66	3,700	8,240		1.2					0.0	
5.5~5.6	17,300	41,740			11,014.2		0.0		0.0	
0.0 - 0.0	11,300	71,140	00.0							
5.4~5.5	13,600	32,880	56.9	13.9	9,593.0	0.9	0.5	4.4	0.0	

グリッド	堆 積 (cc)	総重量 (g)	混土率 (%)	混 礫 率 (%)	貝殼 (g)	獣骨(g)	魚骨(g)	土器 (g)	石器類 (g)	その他 (g)
J 10 / 5.2~5.3	15,400	38,000	58.2	26.6	5,688.3	0.0	0.3	60.3	1.4	
5.1~5.2	7,600	18,920	69.3	19.0	2,201.0	0.0	0.1	14.0	0.4	
J 11 / 5.5~5.63	15,000	37,320	53.6	20.7	9,411.1	0.0	0.0	191.9	1.3	
5.4~5.5	15,500	39,700	35.3		10,044.3	3.7	0.0	180.8	0.0	
5.3~5.4	13,600	33,520	45.6	31.2	7,653.5	2.9	0.4	96.2	0.0	
5.2~5.3	16,600	40,780	46.9	32.2	8,466.6	6.5	0.5	64.2	0.0	
5.1~5.2	15,400	37,220	53.0	31.6	5,636.5	2.0	0.2	75.7	16.4	
5.0~5.1	2,300	5,720	71.3	16.4	653.7	0.2	0.0	77.2	0.0	
J 12 / 5.5~5.6	_	_	_	_	4,104.1	2.7	0.0	36.9	0.0	
5.4~5.5	-		_	_	8,812.3	0.0	0.1	190.6	12.8	
5.3~5.4	_	_	_	_	11,382.1	0.0	0.1	66.0	9.2	貝輪5.3
5.2~5.3	_	_	_	_	9,840.2	6.7	0.2	53.7	23.2	貝輪5.1
5.1~5.2	_	_	_	_	5,235.0	0.0	0.1	54.8	1.2	
5.0~5.1	_	_	_	_	3,492.4	0.7	0.5	42.6	0.9	
J 13 / 5.5~5.58	3,900	9,860	38.1	38.9	2,258.4	0.0	0.2	0.0	0.0	
5.4~5.5	10,100	24,740	43.6	28.8	6,755.3	1.4	0.1	78.8	0.1	
5.3~5.4	13,500	33,000	58.5	19.9	7,020.0	2.5	0.5	77.4	0.2	
5.2~5.3	12,800	31,740	59.4	15.5	7,901.5	0.0	0.7	43.7	15.7	
5.1~5.2	12,600	31,200	61.0	19.9	5,922.5	4.2	3.0	24.1	2.8	
5.0~5.1	15,600	38,700	58.5	26.0	5,963.9	0.1	0.3	34.5	0.0	
4.95~5.0	2,200	5,320	76.0	9.4	767.3	0.0	0.0	10.5	0.0	
J 14 / 5.4~5.5	7,400	17,160	63.1	12.9	4,102.1	0.0	0.1	10.6	0.0	
5.3~5.4	7,300	17,560	53.4	23.1	4,117.0	0.1	0.1	0.0	0.0	
5.2~5.3	8,200	19,760	53.3	19.0	5,472.5	0.0	0.2	0.0	0.0	
5.1~5.2	7,700	20,180	46.3	29.9	4,753.9	0.0	1.5	34.2	3.8	
5.0~5.1	6,300	15,640	53.9	26.7	3,014.5	0.1	0.3	16.2	2.0	
C1/6.9~6.96	7,480	15,060	46.2	30.0	3,550.6	0.7	0.3	26.6	0.8	
6.8~6.9	13,980	28,780	44.0	31.5	6,993.3	1.7	3.5	58.6	0.0	
6.7~6.8	23,200	46,080	51.7	21.6	12,182.3	7.3	11.7	117.1	4.9	
6.6~6.7	17,560	34,820	55.1	11.1	11,614.0	30.8	1.2	124.7	0.7	
6.5~6.6	23,340	44,960	69.9	16.1	6,170.2	0.9	3.2	75.9	2.0	
6.4~6.5	18,820	36,440	67.9	24.3	2765.9	0.0	0.1	62.5	10.8	
6.3~6.4	10,620	20,160	98.5	1.1	78.6	0.0	0.0	4.4	1.3	
6.19~6.3	32,680	61,780	91.1	6.6	1,411.6	0.0	0.2	49.5	5.7	
C 2 / 6.9~6.96	6,300	12,720	47.9	29.9	2,793.4	0.0	0.2	28.1	0.0	
6.8~6.9	6,660	14,320	39.5	29.9	4,207.6	1.6	0.2	169.7	0.0	
6.7~6.8	14,380	29,820	40.4	35.4	7,116.8	3.7	0.5	77.2	0.0	
6.6~6.7	19,740	40,160	46.5	25.0	11,336.9	11.4	4.5	74.6	0.0	
6.5~6.6	16,660	32,300	59.1	12.5	8,980.1	6.1	2.1	183.3	2.7	
6.4~6.5	8,920	17,480	60.7	11.9	4,678.7	0.3	0.3	105.4	3.7	
6.3~6.4	12,862	24,540	78.0	13.4	2,069.2	0.7	0.1	55.3	3.7	
6.16~6.3	21,600	39,160	89.0	8.7	767.0	0.0	0.1	87.5	35.7	
C 3 / 6.9~6.96	8,240	16,520	49.5	34.4	2,590.0	3.2	0.3	77.1	0.0	
6.8~6.9	7,160	14,400	45.5	30.1	3,445.5	4.3	0.6	80.9	1.0	
6.7~6.8	18,320	37,900	42.5	32.1	9,462.9	0.3	0.8	147.8	4.2	
6.6~6.7	9,920	20,620	42.9	27.8	5,976.9	0.5	0.8	56.0		鳥類0.4
6.5~6.6	27,260	54,580	51.2		13,673.0	4.8	1.3	336.2	2.4	
6.4~6.5	14,220	27,300	62.0	14.6	6,253.8	2.3	0.6	145.5	4.2	
6.3~6.4	12,060	23,140	67.7	13.2	4,358.7	0.3	0.4	49.2	2.6	
6.2~6.3	2,980	5,900	74.5	20.7	275.4	0.0	0.0	6.4	1.9	
6.1~6.2	18,300	34,940	73.9	18.1	2,773.7	2.0	0.1	0.0	8.3	
6.0~6.1	14,300	27,540	74.2	20.4	1,397.3	0.6	0.2	90.8	9.4	

貝類の出土量(1)

									_			_											, ,					
か の 君				774 1						カワニナ1	カワニナコ・								7 # 1) R1					777.41 1951				
セッサ	ガイキ	L/R									2/0					1/1					0/1				0/1		1/0	
シャレ	ガイキ	ĽR									3/1														1/0			
<トグ:	<u> </u>	L/R	9/9	37/42	17/10	13/10	8/9	25/31	12/9	22/9	77/73	6/2	2/0	17/19	8/5	8/6	11/15	9/6	24/10	24/20	22/24	3/7	2/3	36/42	21/15	25/25	23/21	14/11
* #%	ガイジミ	L/R		0/1	1/0	1/1					1/0						2/2							0/1	3/1	1/0		
シジニ: ナマユ	₹ ∀	L/R		4/3	2/1					1/0	0/1			0/1		0/1	0/1				0/1		0/1	1/1				
マガキ		L/R	44/25	326/270	377/357	1307/1307	694/623	578/622	28/62	84/152	1208/1444	866/844	523/486	395/209	235/305	106/135	994/1104	520/604	1436/1635	1039/1051	539/731	249/325	197/173	1418/1252	1694/1731	2094/2082	986/982	422/692
< ケガ、	+	2		10/19	13/17	16/15	3/3	1/0	0/1	4/1	19/36	9/14	1/4	4/1	1/0	3/3	2/5	9/11	15/15	3/3	2/1	1/1	3/4	32/32	43/38	11/13	2/2	1/1
エカガリイガ	K	L'A		2/2	0/1	0/1	0/1					0/1			1/0			3/2	1/0	2/1	2/1	2/3		1/1	2/0	2/1		2/0
イギコ・ フィツ:	シの合ガイと	盂		5	1	2	12	8		1	8	1		3	3			3	6	17	28	လ	2	00	5	4	6	9
イボコ	<i>"</i>			1		2	2	1			1	1		3	3				П	9	6	1				1	5	
フ ケツ;	ガイ			1		-		4			П								3	9	ည				3	П	1	4
アカニ	<i>'</i> \			7	11	21	14	8	3	2	∞	3		14	7		3	4	12	12	∞	9		9		4	10	6
₽ III 1] -	ナ類合	盂	10	106	130	191	135	62	23	33	213	182	98	23	14	24	138	66	232	86	41	16	23	263	355	295	92	10
カワア	+			7	7	9	2				ഹ	4	2				က	3	2	_			1	5	9			
レナく・				1	9	2	2				8	က					က		14	ᆔ			1	21	28	6		
< + v :				3			П	Н			H	1				1		П	1					က	2	2		П
イボウ	<i>w</i> 11+		4	62	83	152	104	14	2	19	146	130	71	13	3	15	116	74	185	69	14	6	12	158	252	237	31	6
ホンウ	<u>"" </u>					က				ļ	-						П	П			1	-		00	7	I		$ \neg $
D III 11 ·			П	10	20	14	2	17	9	3	24	22					2	7	13	13	17	2	2	46	45	27	21	
スガイ				7	2	5	9	9	2	4	9			6	2			1	1	3	11	9	2	3	П	8	2	∞
トツダ・	Ø III																									ļ	7	
	グリッド		J1 / 5.6~5.66	5.5~5.6	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~5.2	5.0~5.1	J2 / 5.5~5.59	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~5.2	5.0~5.1	13 / 5.6~5.68	5.5~5.64	5.5~5.6	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~2.3	5.12~5.2	J4 / 5.6~5.64	5.5~5.6	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~2.2

貝類の出土量(2)

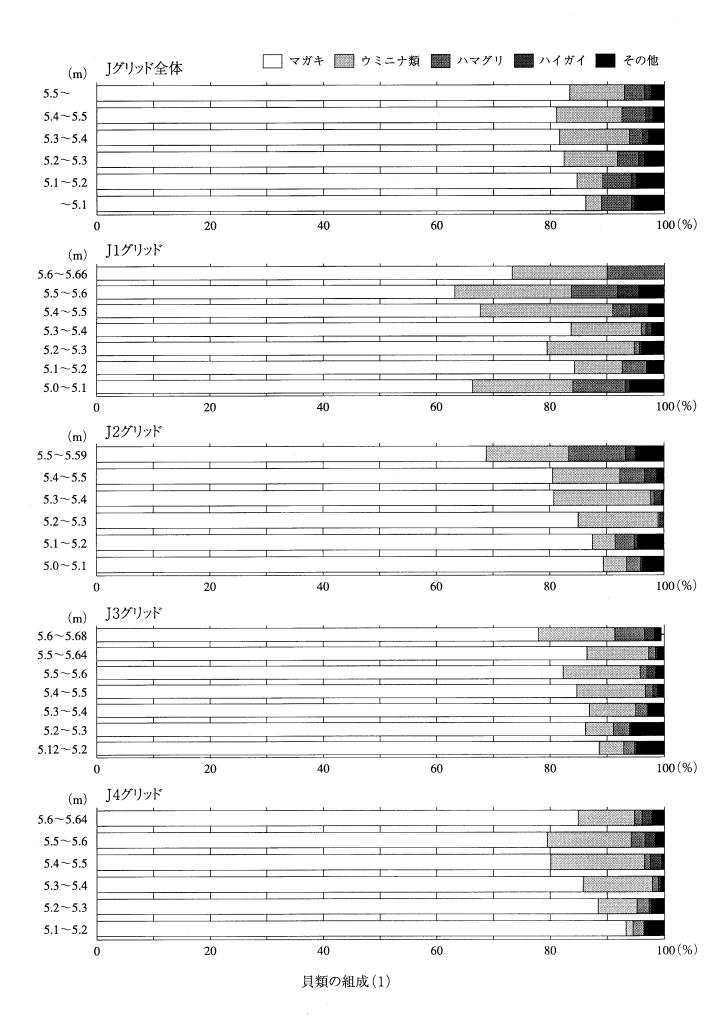
F			1																									
₩ <i>6</i> :	一			カワニナコ							•			727 = 51	:				7 # 1) L.1			771.11	7717.41			カワニナコ		
4 ラ	ガイサキ	L/R					1/2				1/0										2/1	0/1	1/1			1/1	1/0	
シャ	ガイフキ	L'A		0/2		1/1						0/1				1/0					0/1		0/1	0/1	1/2	2/1	1/0	
< >:	グコ	L/R	41/45	25/22	25/16	41/39	92//26	21/24	25/17	45/40	39/40	44/43	6/4	31/39	4/6	9/15	7/17	9/18	10/17	21/15	25/19	98/109	120/73	24/25	8/10	72/73	25/26	3/4
**	メジミ	Z,	2/3	1/0	1/0	1/0	0/1		1/0	0/1							1/1	0/1	1/0		1/1			1/0	1/1	0/1	2/0	
シング	ミガイ	L/R	3/4						0/1		0/1					1/0		1/0			8/2		0/1		1/0			
マガ	#	L/R	1119/984	1643/1604	1258/1239	1627/1284	1450/1482	397/386	424/322	782/591	860/929	875/678	273/258	419/345	61/70	233/192	189/172	355/319	430/396	235/161	1370/1302	1367/1541	722/1035	068/589	2132/1932	1730/1807	798/1011	64/69
< +	ガイ	2	16/11	23/34	23/25	2/2	9/2	0/2	4/7	9/9	37/40	11/18		2/1	1/2	1/2	3/2	12/11	2/12	2/3	4/5	2/2	3/2	3/4	4/2	4/2	2/2	
エガル	イガネ	L/R		0/1	2/2	2/1	3/2	0/1		2/0	1/1	0/2		3/2	1/0	0/2	1/0	1/0		3/2	16/14	2/2	2/2	3/3	25/19	1/2	0/2	
レボ フ ム	ニシのタンガイル	に計	7	4	2	3	30	13	3	4	2		2	12		7	4	1	10	4	3	32	31	6	1	11	13	
∠ ∦	11.9		1			1	9	3	1	2	2			2			П		9	2		9	23			3		
7 4	シガイ		1	3		1	12	3	1	П	2		2	4		3	2	П	4	2		5		3		4	13	
アカ	11.3		2	9	2	7	34	13	1	∞	8	2	3	12		9	4	8		11	2	15	19	2	1	4	S	
₽ III	ニナ類な	口	139	307	254	165	31	2	99	85	245	152	5	3	20	29	33	78	62	∞	119	117	17	94	234	113	∞	
カワ	K 7		1	14	11	2	2		1	က	12	12						10	4			1		2	3			
	く ナ タ =	<u> </u>	15	22	18	3		1	3	4	2	4				2		9	2		1	1	1	4	5	1		
< h			П	3	2					П	2	2						2	1		1	1			8	1		
—	₽ // I 	\	89	145	148	103	18	1	35	28	124	82	2	3	13	19	17	30	22	വ	101	102	11	20	192	75	വ	
	<u>₽₩1 +</u>		-	11	7	2					6	1				1		-	3		. '	. '	2	1	1 1			
₽ III	·		31	85	54	30	9		12	14	75	43			9	3	8	24	21	2	2	9	2	13	8	7	1	
スガ	7		2	1	3	4	22	3	1	3	1	1		2	3		3		1	7	3	11	14	2	1	2	10	П
	ダタミ					1					1	2	က						7						1	9		
	グリッド		J5 / 5.5~5.62	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	$5.1 \sim 5.2$	$5.0 \sim 5.1$	J6 / 5.5~5.6	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	$5.1 \sim 5.2$	$5.0 \sim 5.1$	17 / 5.5~5.55	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	$5.1 \sim 5.2$	$5.0 \sim 5.1$	J8 / 5.6~5.75	5.5~5.6	5.4~5.5	5.3~5.4	19 / 5.5~2.6	5.4~5.5	5.3~5.4	5.23~5.3

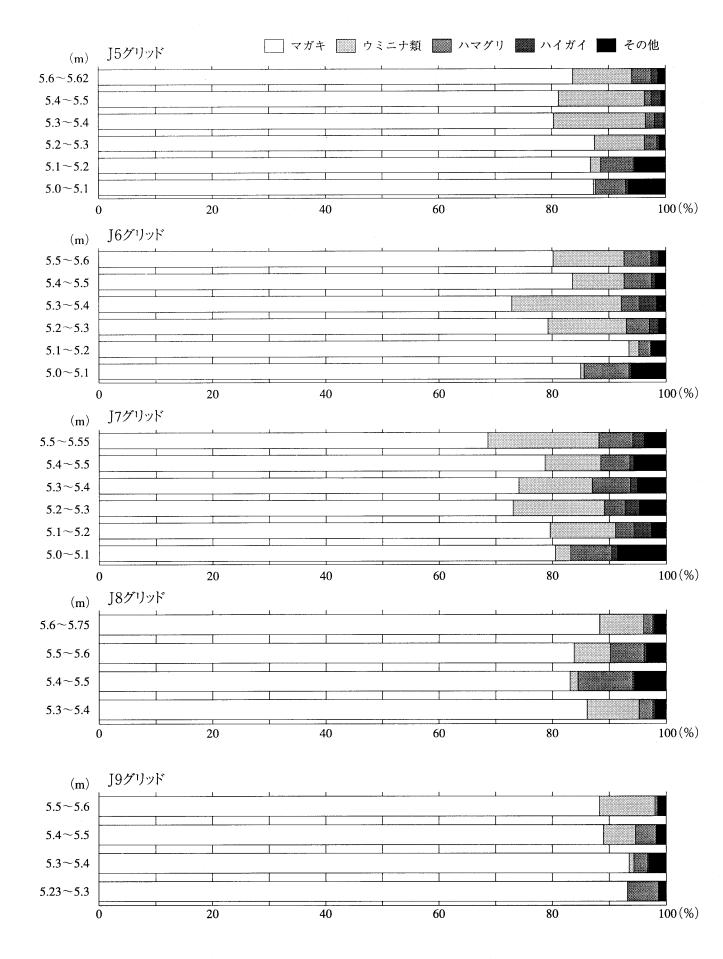
貝類の出土量(3)

			1													r1									\neg
小 の毛										774.11			カワニナ1	タマカ・イ科1	971.1 11/10/11	#194 1L1				-	タマカ・イ科1	7 号 1) 缶.	7 サリ 缶.	7 步 9 缶.	
ガイ ・ムラサキ (\ \ \									1/0	1/0			0/1	2/1	0/1	1/0	0/1			2/0	0/1	0/1	1/1	
ガイ - シオフキ 6	2 0	2	4/2	9/9	1/2			1/1	1/2	3/1					1/2	2/2	1/1			0/2	0/1		1/1	1/0	
<トグコ <u>-</u>	19/9	27/38	55/71	28/28	79/72	22/20	93/79	83/70	51/59	83/101	86/75	10/13	02/08	127/100	82/84	22/22	52/59	30/40	14/15	63/64	41/42	48/43	34/36	35/37	4/4
ナキシジミ か	۱ ۱ ۱	2/0	2/1			1/1	1/2		2/1	1/0	0/1		0/1	0/2	2/2	2/1					1/0			0/1	
トマナ トムル	2 0						1/4						0/1				0/1		1/0		1/0				
+ ポイ	164/158	2036/1803	1494/1524	1239/1134	1159/1094	357/341	308/966	1243/1048	666/866	999/919	506/540	103/117	379/317	877/783	1198/1374	1276/1220	623/669	520/379	238/248	540/553	974/890	1027/1081	800/773	793/816	79/127
ミステン	4/9 4/9	11/10	12/18	16/17	5/2	4/1	16/22	17/26	33/26	16/23	10/9		14/19	28/28	24/22	30/17	10/11	3/2	6/8	11/13	10/11	11/11	2/11	4/3	
エガイ -カリガネ ら	7	2/0	3/4	1/2	1/2	0/2	1/0	3/0	1/2	3/4	23/20	8/6	1/2	6/9	13/9	2/2	9/2	4/8	3/3	9/9	2/3	1/1	1/1		
イボニシの合む レイシガイと	- -		3	20	15	9	11	œ	6	18	21	5	20	32	41	33	24	13	9	22	30	87	15	1	
イボニシ				1	4		2	3	1	4	3		8	1	6	∞	4	2	3	8	2	3	9	9	
レイシガイ		2		∞	4	2	∞	က	5	4	7	1	2	∞	2	15	10	3	2	4	∞	က	က	2	
アカニシ		3		1	11	∞		10	6	20		1	9	1	18	20	10	9		9	15	2	13	10	
ウミニナ類合む	19	166	207	89	20	14	09	66	206	128	27	_	39	118	274	210	97	14	42	175	243	140	4	40	2
カワアイ	1	-	m	2	4			5	12	4	က		2	П	4	12	2		П	က	n	က	က	2	
フトヘナタリ	1-	24	6	T	3	Г	4	4	16	4	-	-	D	10	10	2	4		2	2	5	2	1		1
ヘナタリ			2		က			П	1	-				-	4	5	2			က	7	4	1		
イボウミニナ	=	80	141	55	26	5	30	57	89	47	9		22	65	83	62	28	3	19	65	89	16	6	9	1
ホソウミニナ				-			-	-	∞	7	-			2		9	2		2	1	4	8		2	
ウミニナ	-	37	31	∞	9		13	28	92	28	16		9	32	169	110	49	6	12	66	159	107	30	26	
スガイ	4	+	-	6	6	5	5	1	1	2	10	1	5	8	14	15	က	4	-	4	22	11	9	16	П
イシダタミ	\top	-	2	37	20			-	12	20	00	П			9	2			1	-			1	2	
グリッド	110/56~566	5.5~5.6	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~5.2	J11/5.5~5.63	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~5.2	5.0~5.1	J12/5.5~5.6	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~5.2	5.0~5.1	113/5.5~5.58	5.4~5.5	5.3~5.4	5.2~5.3	5.1~5.2	5.0~5.1	4.95~5.0

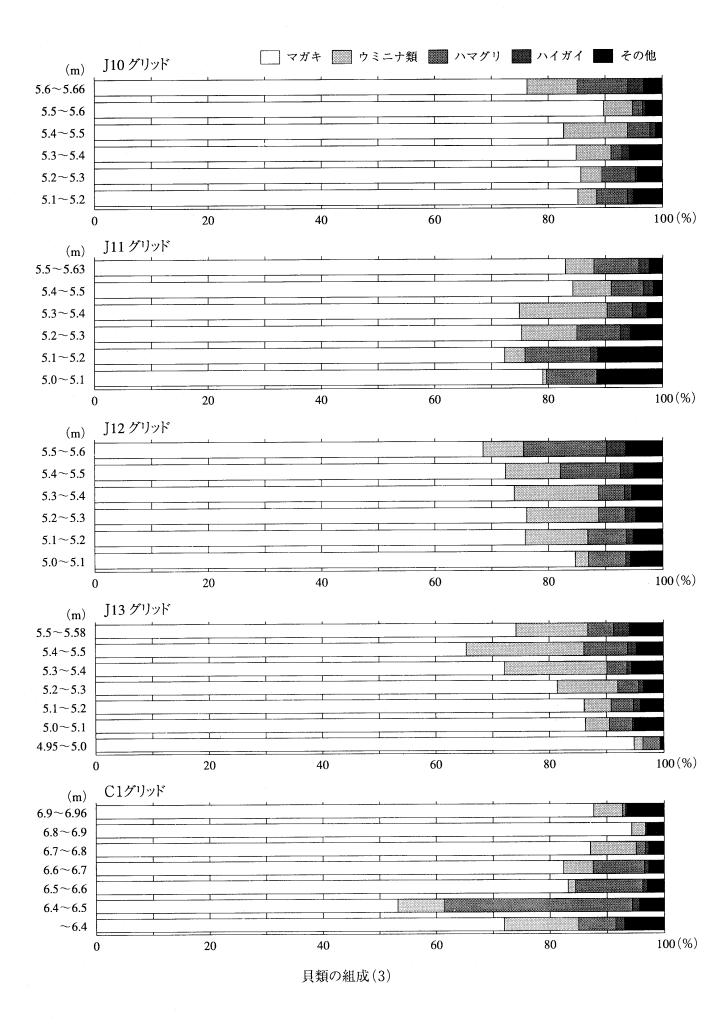
貝類の出土量(4)

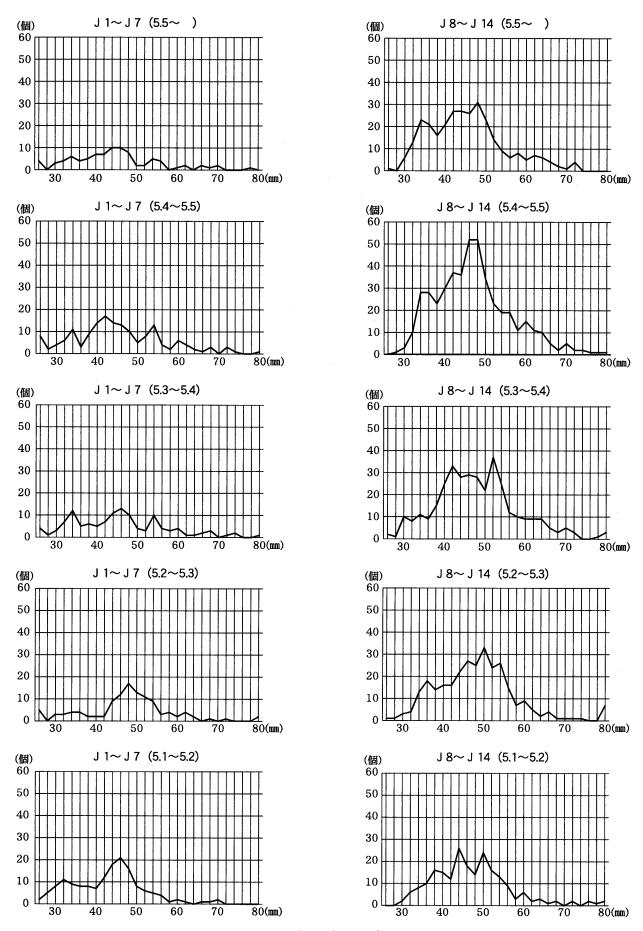
	λ ψ;	スガ	D 111	ホン・	∠ ₩.	くナ	レトレ	D 111	∠	7 4	イボ	・ ボ フ ナ	H X	カラ	< 7	アガ	シン	*#	< P	シャ	ムラ	46
グリッド													<u> </u>	ガネ	ガイ	#	ミガ	メジ	グラ	ガギノ	ガキチ	事
	111		• • •		11+		<u>~ ~</u>	巻 石	HODE &-	7	•	<i>è</i> ₫	ا لہ 🗲				\			7	7	
								iliez	_			盂		L/R	L'A	L/R	L/R	L/R	L'R	<u>ہ</u>	Z R	
J14/ 5.4~5.5		3	89	8	15	2	3		86	1	1		3 0/	0/1	1/4	494/489	2/0	0/1	14/9			カワニナ科1
5.3~5.4			23		15		-	4	42	1	2		5 1/	1/0	2/4	715/656		1/0	2/8			
5.2~5.3		3			2		1		2	10	2	5	18 1/	1/0 1	10/9	640/620			21/23			र रे गे रे रे १.स.
5.1~5.2		5			3				4	2	4		15		8/5	633/623		1/0	40/34		1/0	रर्गे रेशें
5.0~5.1		Н			7		က		5	-			3 1,	1/2	3/3	462/409			9/12			オオヘヒ、カ・イ1 タマカ・イ科1
C1 / 6.9~6.96	3	21	2	2	25				37		1	10	12 0/	0/2	2/0	622/643			2/3		0/1	
6.8~6.9		22	14	1	17		3	2 3	35	က	2	12 2	20	<u> </u>	1/0	1402/1149			2/2			
6.7~6.8		18	17	4	93	9	61	1 183		24	-	4	10		11/13	1966/1995	0/3		36/27		0/1	#101 1R1
6.6~6.7		5	20	9	18	ຕາ	36	1 8	86 1	12	_	4	00	II.	12/13	1369/1374	17/12	2/1	141/148	1/1	1/1	
6.5~6.6		2	2		8		4	2 2	20 2	21	2		4		12/8	1001/1311 13/11	13/11	2/3	184/161	1/0	0/2	NJ DEB 111
6.4~6.5		2	10		21		3	4	41	9		2	5		3/6	182/266	3/7	1/2	161/165		1/0	
6.3~6.4			4		1				2							0/3	2/0		0/1			
6.19~6.3		1	9		14	1		.,	21	9	ļ				1/3	106/140	2/3		7/12			タマカ・イ科2





貝類の組成(2)





ハマグリの殻長分布

図 版



1号土壙墓出土の土器

図版1 北調査区



 1. 貝層検出 状況(南から)



2. 貝層断面 (北から)



3. 貝層断面
 (1号土壙墓付近)

南調査区 図版 2



1. 貝層検出状況 (東から)



 調査風景 (貝層土壌サン プリング中)



3. 貝層の遺物 出土状況

図版3 土壙墓



1. 1号·2号土壙墓

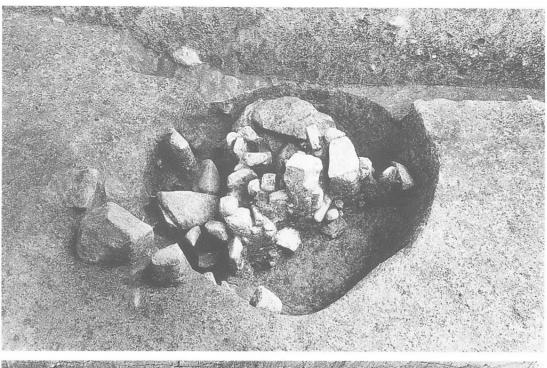


 1号土壙墓 (下層の状況)



3. 3号土壙墓

その他の遺構 図版4



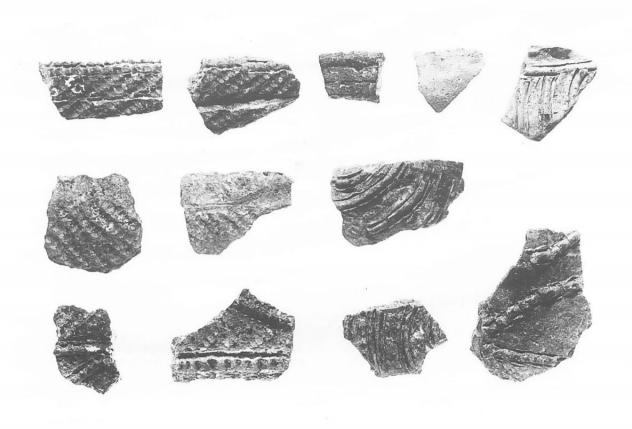
1. 土壙1



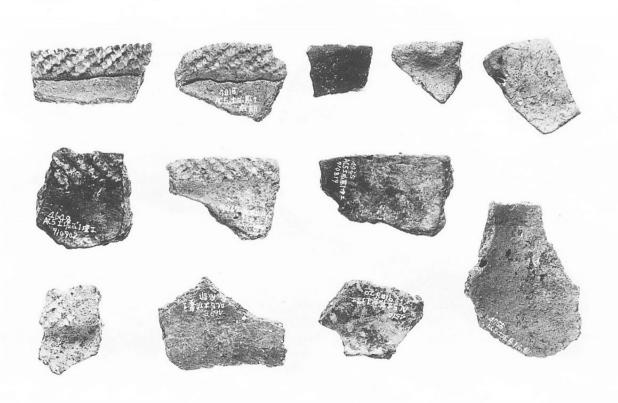
2. 溝状遺構



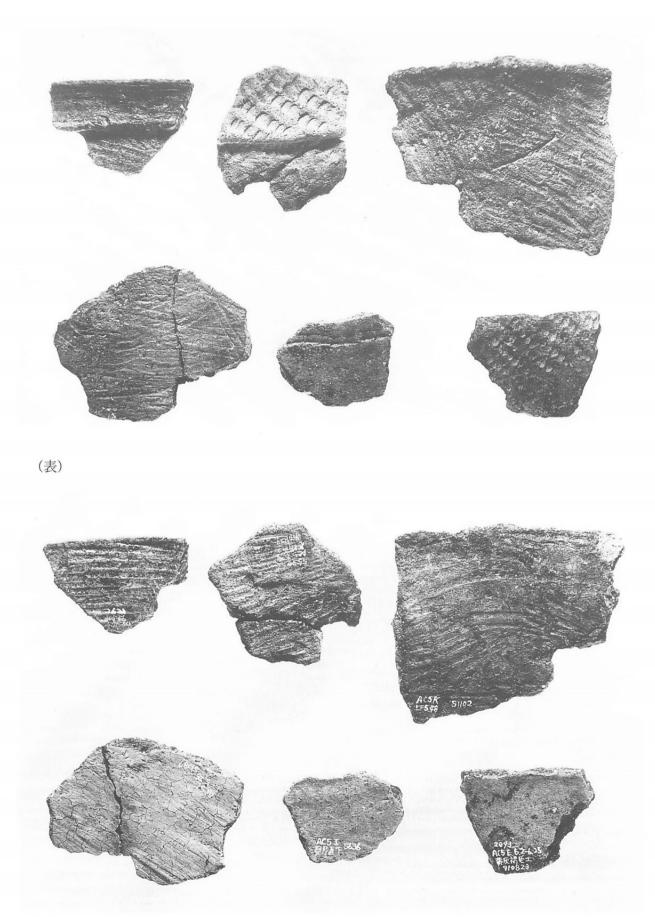
3. 貝塚遠景 (左側トンネル手前)

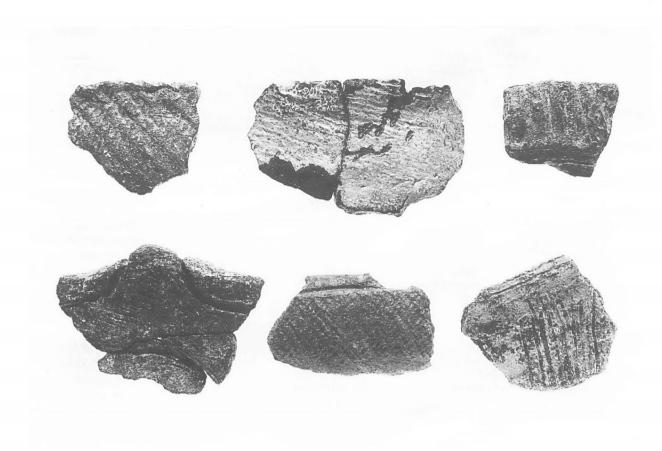


(表)

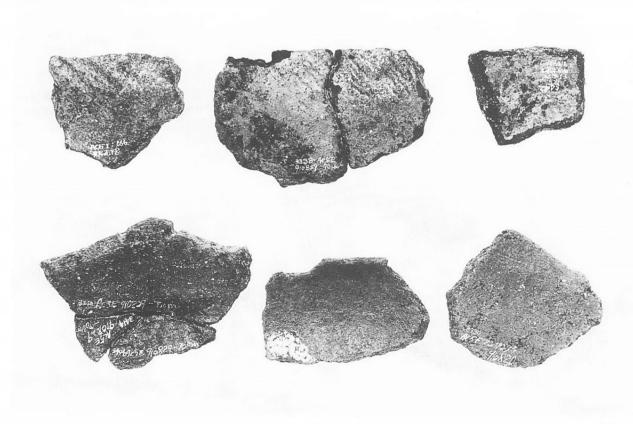


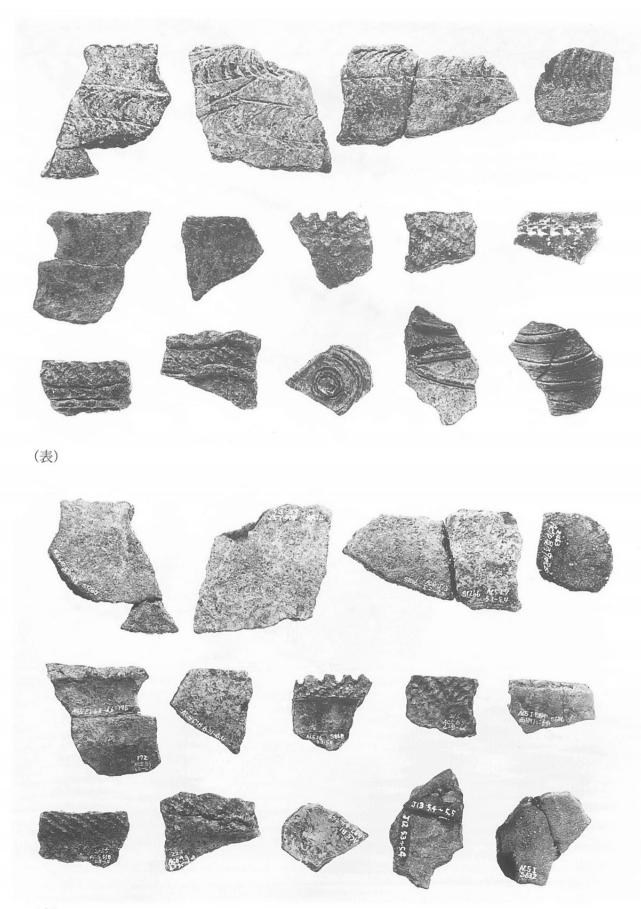
包含層出土土器(1) 図版6

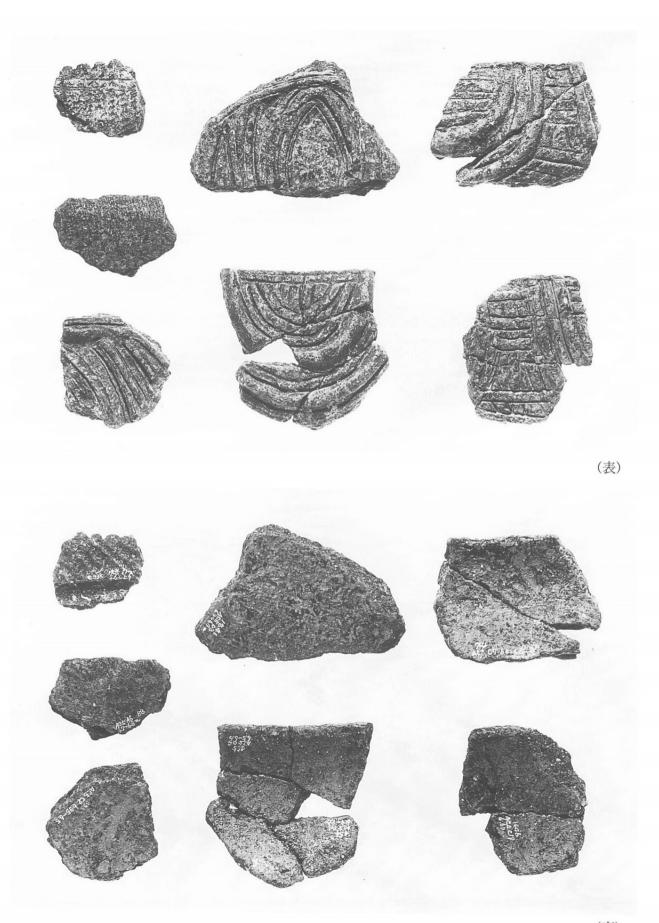


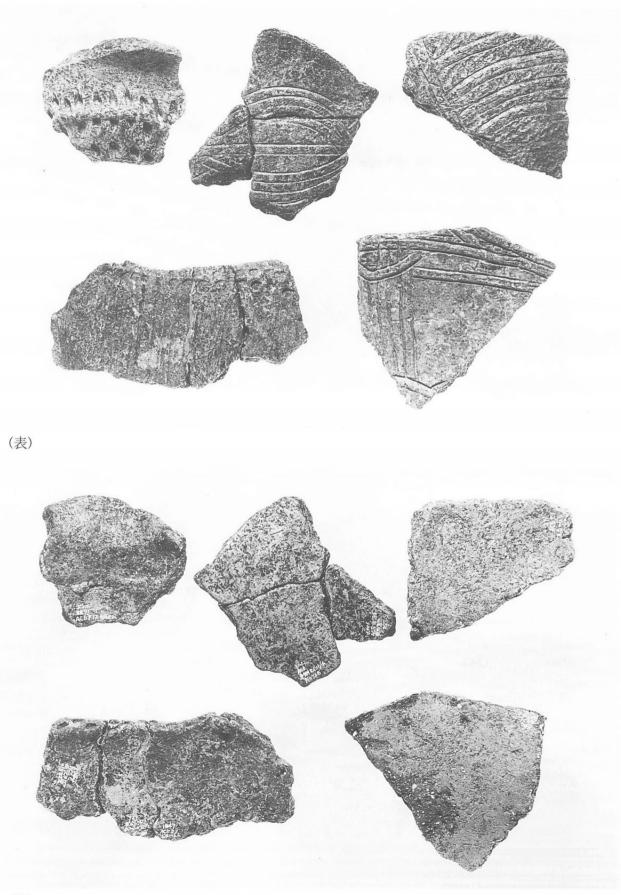


(表)



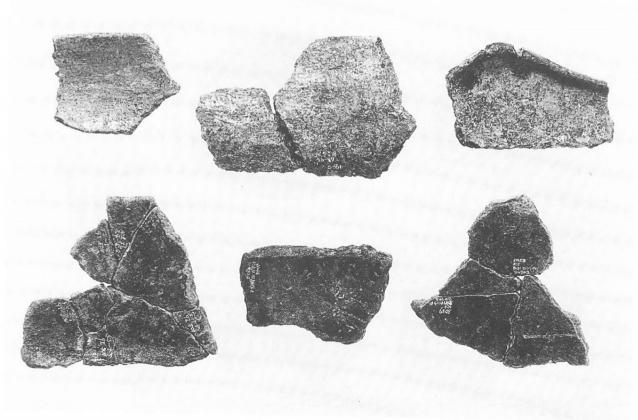


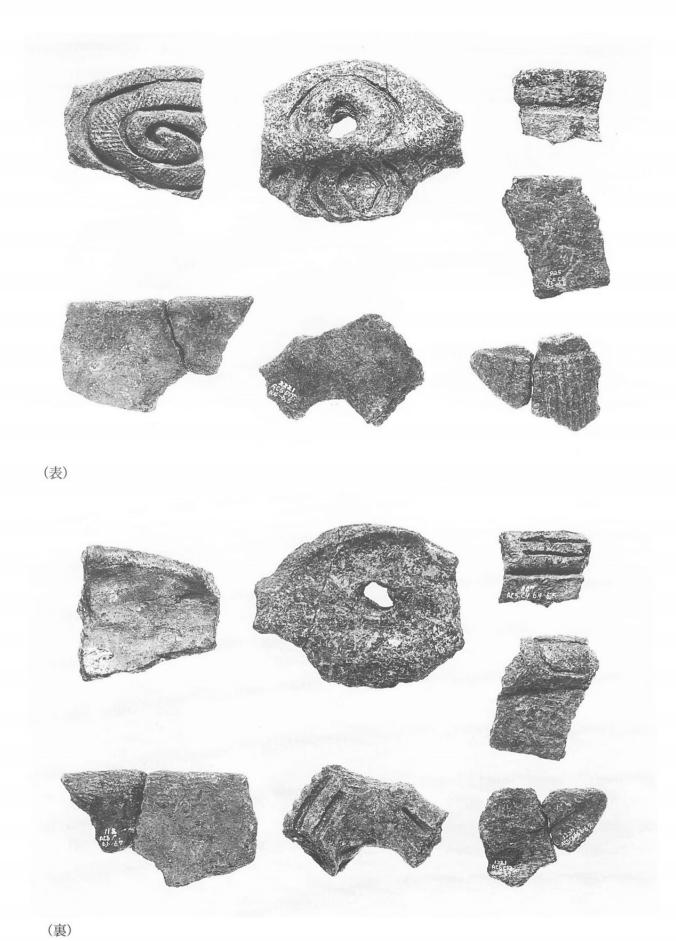


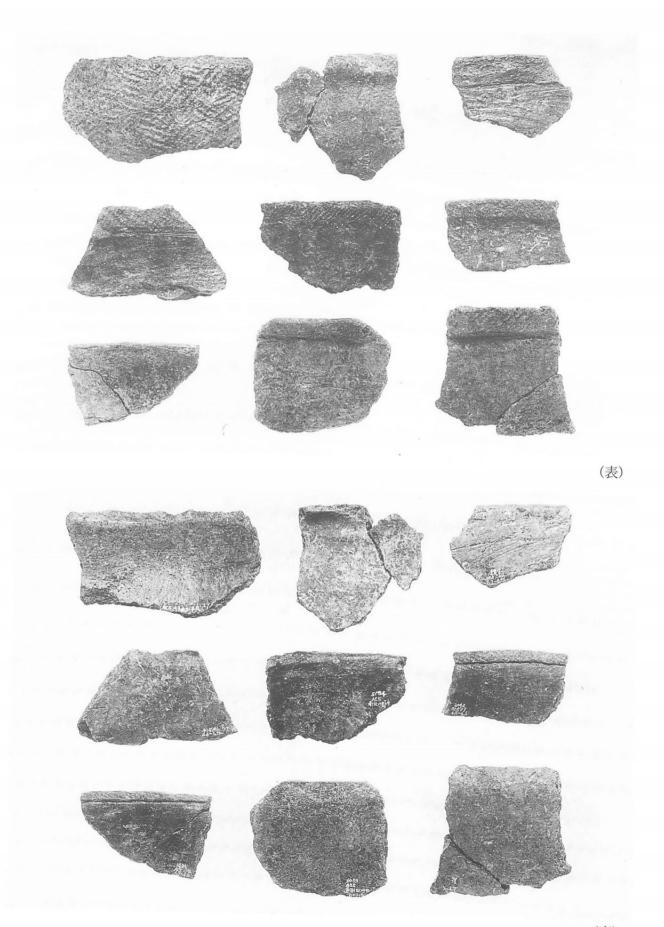












出土土器(1) **図版14**



1号土壙墓出土の土器









(裏)

(表)



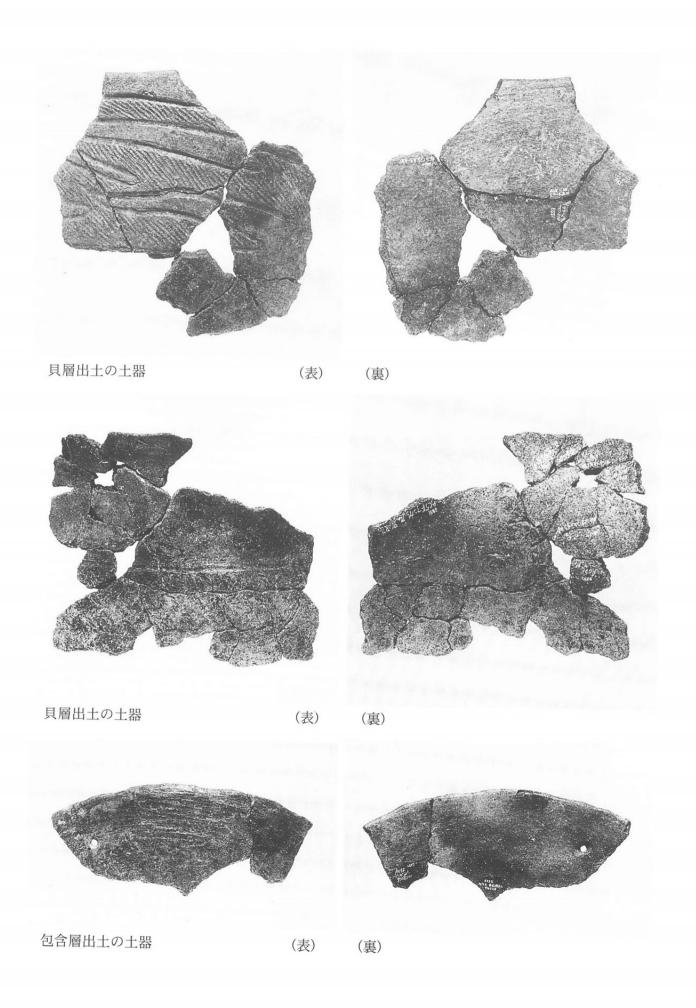


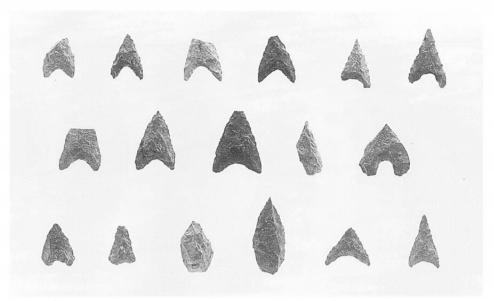
貝層出土の土器



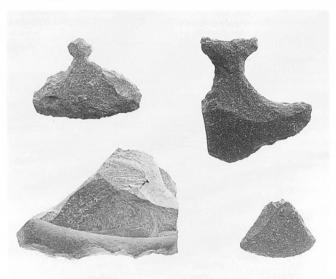


(表) (裏)





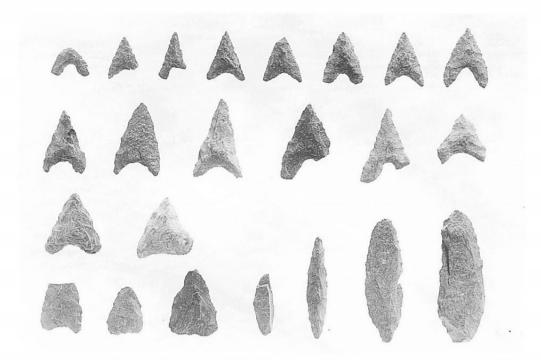
石 鏃



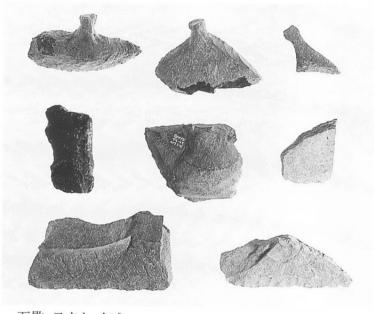
石匙・異形石器・スクレイパー



叩石·石錘



石 鏃



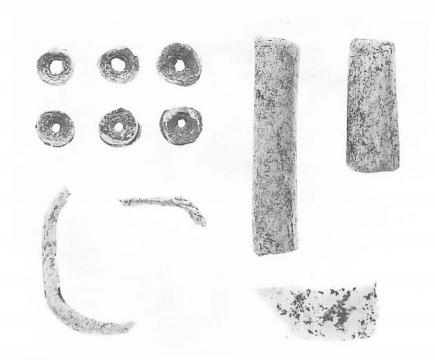
石匙・スクレイパー



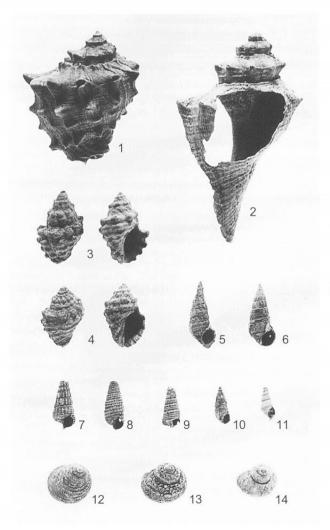
石製装身具



石 槍

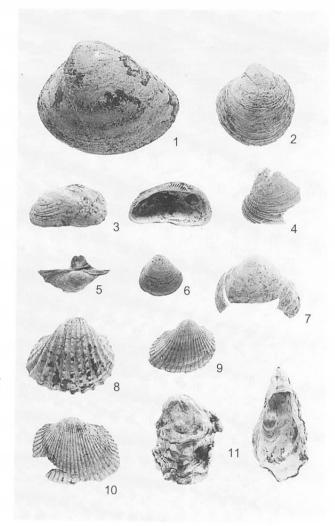


骨角貝製品



腹足綱(1/2)

- アカニシ
 テングニシ
- 3. レイシガイ
- 4. イボニシ
- 5. イボウミニナ
- 6. ウミニナ
- 7. フトヘナタリ
- 8. カワアイ
- 9. ヘナタリ
- 10. ホソウミニナ
- 11. カワニナ
- 12. イシダタミ
- 13. スガイ
- 14. ヤマタニシ

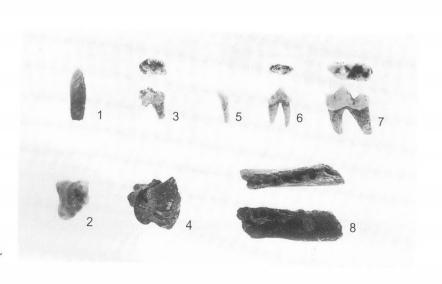


斧足綱(1/2)

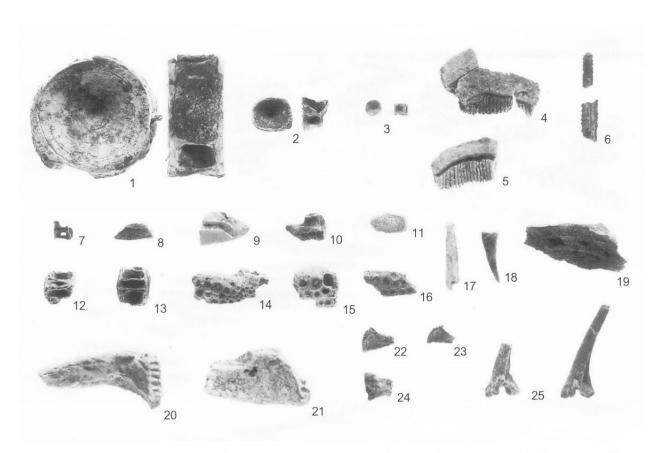
- 1. ハマグリ
- 2. オキシジミ
- 3. カリガネエガイ
- 4. アサリ
- 5. オオノガイ
- 6. ヤマトシジミ
- 7. シオフキガイ
- 8. ハイガイ
- 9. ハゴロモガイ
- 10. サトウガイ
- 11. マガキ

中型獣類(1/1)

- 1. サルI¹
- 2. アナグマR M¹ 3 15^{イヌLM2} 4. イヌ上腕骨R
- 5. タヌキL I 1
- 6. タヌキLP₄
- 7. タヌキLM₁
- 8. タヌキ下顎骨L

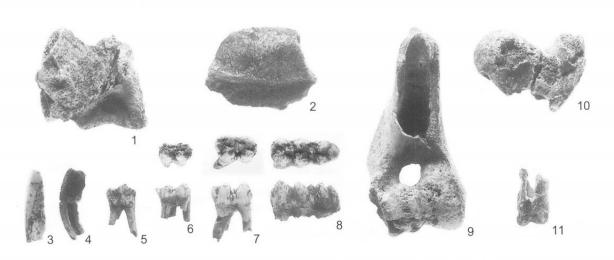


動物遺体(2) 図版20



- 1. メジロザメ科椎体 2. サメ類椎体 3. エイ類椎体 4・5. マダラトビエイ歯板 6. エイ類尾棘 7. ヒラ尾椎
- 8. スズキ歯骨 9. スズキ耳石 10. ハタ類前上顎骨L 11. ニベ耳石 12. タイ類尾椎 13. タイ類椎体
- 14. クロダイ前上顎骨L 15. クロダイ前上顎骨R 16. クロダイ歯骨L 17. クロダイ臀鰭血管間棘
- 18. タイ類第1 臀鰭棘 19. マダイ歯骨L 20・21. フグ類前上顎骨L 22・23. フグ類前上顎骨R 24. フグ類歯骨L
- 25. カワハギ類背鰭第1棘

魚 類(1/1)

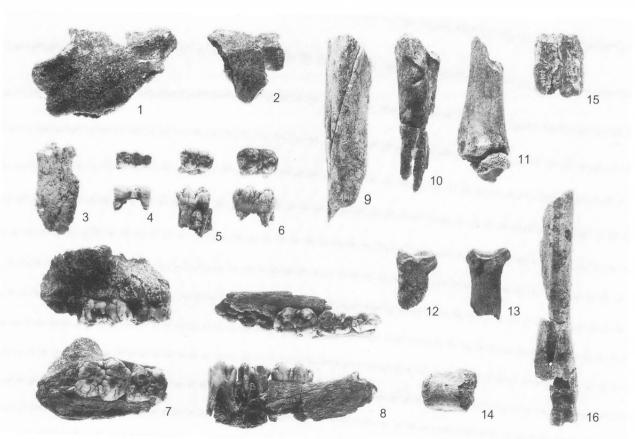


- 1. 側頭骨R 2. 頭頂骨R 3. R I 1 4. ♀R·C 5. R P 4 6. R M 1
- 7. RM₂ 8. RM₃ 9. 上腕骨R 10. 大腿骨R 11. 基節骨L

イ ノ シ シ (1/2)



1. M₁ 2. RM₃ 3. 下顎骨下縁 4~6. 鹿角 7. 大腿骨L 8. 大腿骨R 9. 脛骨R 10. 距骨 11. 踵骨L シ カ(1/2)



イノシシ 1. 頬骨R 2. 頭頂骨L 3. 下顎犬歯R 4.Rdm4 5. RM1 6. RM2 7. 上顎骨R 8. 下顎骨L 9. 脛骨L 10. 尺骨R 11. 脛骨R 12. 末節骨L 13. 第3中手骨L 14. 胸椎シ カ 15. 鹿角 16. 中足骨R

1 号土壙墓出土イノシシ・シカ (1/2)

報告書抄録

S 10 13 .k								
ふりがな	ふなくらかい	ふなぐらかいづか						
書名	船倉貝塚	船倉貝塚						
副書名								
巻 次								
シリーズ名	倉敷市埋蔵	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第8集	第8集						
編著者名	小野雅明・	小野雅明・福本明・鍵谷守秀・藤原好二						
編集機関	倉敷埋蔵文	倉敷埋蔵文化財センター						
所 在 地	〒 712-8046	〒 712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田 940 番地 TEL 086-454-0600						
発行年月日	1999 年 3 月 31 日							
ふりがなふ	りがな	コード	北緯	東 経		·		
所収遺跡名 所	在 地 市	町村」遺跡番号	。 / //	0 / //	調査期間	調査面積	調査原因	
船 倉 貝 塚 岡	やまけんくらしきし 山県倉敷市 332	202 4-222	34°	133°	19910708 ~	110 m²	都市計画道路	
state) 合町	1	35′	46′	19910927		羽島四十瀬線	
		1	10"	39″			工事に伴う発	
[19911130		掘調査	
所収遺跡名 種	別主な時代	え 主な遺構		主な遺物		特記事項		
船倉貝塚	具塚 縄文時代	十	土壙墓3基 縄文土器・石器・骨角貝製					
	前期	·	土壙 1基 品:貝類・魚類・獣類など					
			1					
	縄文時代 後期	縄文時代 溝状遺構1条 後期		の自然遺物				

船倉貝塚

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第8集

平成11年3月31日 印刷発行

編集・発行

倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地 IIL 086-454-0600

The Excavation Report Of Funagura Shell Mound In Kurashiki

Volume 8

Kurashiki Archaeological Center

March 1999